

目次

巻頭言	- 1 -
南三陸エリア	- 5 -
仙台エリア	- 49 -
多賀城エリア	- 71 -
石巻エリア	- 91 -
松島エリア	- 111 -

生徒一人一人が大きく変容した「震災学習」

校長 根本 文昭

今年本校は、初めて「震災学習」を採り入れた修学旅行を実施しました。10月28日から3泊4日で、初日は宮城県での「震災学習」、2日目が平泉で「歴史学習」、3日目・4日目が函館で「体験学習」とメリハリをつけた修学旅行としました。

特に、「震災学習」では、3～4名で編成した班が東日本大震災で被害を受けた仙台、多賀城、石巻、松島、南三陸の5つのエリアの57の役所や事業所を訪問し、震災の様子や復興状況を聞き取る調査を行いました。事前指導での調べ学習やオブジェの制作、被災した大学生3名を招聘してのパネルディスカッション、取材の際のマナーの指導等きめ細かく指導しました。その成果が顕著に表れました。

まず、何よりも「震災学習」により生徒一人一人が大きく成長したことです。実施前と実施後にこれほど生徒の変容を感じたことは今まで経験したことがないほどです。

被災地でのフィールドワーク、修学旅行後の報告会、プロジェクションマッピング制作、「切り替え」指導としての進路学習会等の行事でその成果が表れました。

被災地では被災者と直接会話することがいかに大変か。被災者の心に真摯に耳を傾け、被災者に心を寄せながら丁寧に対応をしたことが被災者と一緒に撮影された写真から伺えます。コミュニケーション能力が試されました。さらに、報告会では発表内容や方法を相当な時間をかけて準備・検討し、発表しました。ここでもいかにわかりやすくまとめ、発表するかといったコミュニケーション能力が試されました。この一連の作業をほとんど全員の生徒が体験しました。

また、プロジェクションマッピング～「復興への思い with サスケ」でも、被災地に寄せる思いを何日もかけてストーリーや絵コンテに表現してくれました。映像制作会社に制作を依頼したとはいえ、コンセプト（基本概念）や構成など全ての面で生徒たち自身が制作しました。音楽とともに流れるCG映像を観て、感極まって涙ぐむ生徒が多数いました。さらに、生徒が被災地への思いをしたためた詞にメロディーを付けたオリジナル曲「茜空」を歌い上げたサスケの歌声にも感動したようです。プロジェクションマッピングやオリジナル曲の制作が生徒一人一人の自信につながったと確信できました。

さらに、「切り替え」指導として、「震災学習」報告会後に行われた進路学習会では、メモをとる姿や聴く態度などが真剣そのものでした。7名の卒業生をパネラーにディスカッションが行われましたが、多くの生徒が挙手し、質問をしていました。自分の進路のために何かを掴んでやろうとする熱意や積極性が会場に漲っていました。休憩なしの2時間半があっという間に過ぎてしまいました。

今回の修学旅行、特に「震災学習」によって、生徒一人一人が大きく成長し、その後の学校生活の様々な場面でそのことを証明してくれています。進路学習会後に新たに制作されたオブジェ、『希望の樹』（ツリー）には短冊のようなプレートに生徒一人一人の今後の「夢」や「志」が刻まれ、掲げられていました。生徒たちは修学旅行が終わり、ひと回りもふた回りも大きく変容してくれました。

「夢は見るものではなく叶えるもの」と今季限りで引退を表明した澤穂希選手の言葉がふと頭をよぎりました。残りの清風生活をどう過ごすかによって、「夢」は実現します。追い求め続ければ、必ず実現できます。頑張れ、2年生！

結びに、今回の震災学習の実施にあたり、多大なるご理解とご協力を賜りました関係の皆様方には改めまして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。また、各事業所のさらなるご発展を祈念申し上げます。報告集の挨拶とします。

この報告集を刊行するにあたって、まず被災地の57の事業所および協力者の方々に感謝いたします。

3月11日は、決して忘れられない日です。誰もの記憶に残る未曾有の震災被害でした。私達の学年は、この学習を修学旅行の目玉としました。

ですから生徒達は、震災学習に真摯に向き合いました。さらに付け加えるならば、被災されたみなさまとの数を重ねた手紙のやり取り、初めて挑んだ取材体験などを通して、みなさまの現実に向き合う姿勢および心情に、生徒達は深く感銘を受けました。

旅行後、被災者 佐藤敏郎様をお招きした震災学習に関わる報告会を催しました。班ごとの取材を共有することで生徒一人一人の心の中に被災の現状を焼き付けさせました。また学校全体への波及効果を狙いプロジェクションマッピングも催しました。

これらは、この学習が決して修学旅行で帰結するものでなく、今後も考えて行くことであるからだと思えるからです。

つまり、東北震災の被害に見舞われた方々との触れ合いは、生徒達に、現実を見つめ生きて行く逞しさと、その中でも助け合う温かな心を示してくれました。そしてそれは、さらに生徒達が自身の将来を考えるきっかけに発展したように思えます。これこそが絆なのでしょう。

生徒諸君、みなさんは震災学習と通じて何を感じ取りましたか。そして今後、被災地の方々にどうやって関わって行きますか。

私達の震災学習は終わったのではなく、いま始めたのです。地震列島に住む私たちにとって、明日は我が身かもしれません。だからこそ真の絆を理解し大切にしていこうではありませんか。

取材エリアと担当教諭

○ 南三陸エリア

佐野 有恒 野村 匡 神田 長希 宇都 絢美

○ 仙台エリア

星野 久幸 牧島 孝則 鯉沼 詩織

○ 多賀城エリア

石原 伸一 加藤 一郎

○ 石巻エリア

高橋 美美 佐々木 龍馬

○ 松島エリア

遠藤 公司 鈴木 公基

○ 本部

田中 一俊 田原 周典

震災学習 指導経過

	月	内容	詳細
前年度	3	- 震災体験者講話 - プロジェクションマッピング企画チーム準備開始	- 実際に震災を東北で経験した本校教諭に、震災時の様子や津波の恐ろしさを話していただきました。 - 震災学習の集大成であるプロジェクションマッピングの企画班が動き出しました。
1学期	4	事業所への取材依頼	
	5	取材先へ依頼文送付	
	6	- 生徒アンケート - 生徒訪問先決定	生徒の進路希望を考慮し、取材先の割り当てを行いました。
	7	- 取材班顔合わせ・エリア別指導 - あいさつ文送付 - 震災体験者講話	震災ボランティア経験のある本校教諭から、ボランティアを経験して学んだことや被災地に行くにあたっての心構え等を話していただきました。
夏期休業	8	- 取材先調べ及び質問作成 - 修学旅行モニュメント作成	- 夏期休業中の宿題で、インターネット等を利用して取材先調べを行いました。 - 有志の生徒を中心に Re:birthday ケーキの作成を始めました。
2学期	9	エリア別指導	取材内容の決定や取材先への行き方など行程表の作成を行いました。
	10	- モニュメント完成セレモニー - 震災学習直前講話	- モニュメントと集合写真を撮影しました。 - 大学生3名を講師として招き、「震災と向き合った4年半」というテーマでパネルディスカッションを行いました。
	修学旅行当日		
	11	- 事後指導 - 震災学習報告会 - プロジェクションマッピング上映会	- 佐藤敏郎様を本校にお招きし、各エリアの取材内容の報告会と佐藤様による講演会を行いました。 「復興・鎮魂・祈り」をテーマにしたプロジェクションマッピングの上映を行いました。また、歌手のサスケの二人に書き下ろしていただいた「茜空」を披露していただきました。

取材先一覧（掲載順・敬称略）

○ 南三陸エリア

株式会社及川商店
アスリートやまうち
マルエー
（有）ナカノ電気商会
BJ ヤマウチ
レストラン慶明丸
南三陸ポータルセンター
神割観光プラザ
南三陸図書館
志津川高校
未希の家

マルセン食品
マルタケ大衆ストア
佐藤酒店
アングラーズショップ大隆丸・まきの衣料
たみこの海パック
株式会社 ヤマウチ
上山八幡宮
南三陸町役場観光振興課
南三陸警察署
佐良スタジオ

○ 仙台エリア

JA 仙台
河北新報社
仙台市ガス局
株式会社 エフエム仙台
仙台空港

仙台放送
国土交通省 東北地方整備局
株式会社 ハッピーウーマン
陸上自衛隊 仙台駐屯地
NPO 法人 KIDS NOW JAPAN

○ 多賀城エリア

しらとり幼稚園
せんだいあらはま
高砂中学校
麒麟ビール（株）仙台工場
夢メッセみやぎ

芳賀 正
井土生産組合
太平洋フェリー
東洋製罐

○ 石巻エリア

街づくりまんぼう
一般社団法人 みらいサポート石巻
NPO 法人 まちの寄り合い所・うめばたけ
社会福祉法人石巻市社会福祉協議会 VC
キャンナス東北

仮設日和ヶ丘第二団地
日本カーシェアリング協会
石巻仮設自治連合推進会
社会福祉法人石巻社会福祉協議会 CSC

○ 松島エリア

陸奥物産店
宮城県松島公園管理事務所
瑞巖寺
磯崎漁業組合

松島温泉絶景の館
松島蒲鉾本舗
丸文松島汽船（株）松島事務所
第一交通有限会社

南三陸エリア



株式会社 及川商店を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 株式会社及川商店 』
『 及川 吉則 様 』

II **取材者**
班長 清水 俊希 **記録** 鈴木 陸
写真 茅野 翔太 **報告集** 長谷川 拓磨

III **会社・団体の概要**

日本一の生食用かきの産地、宮城三陸の志津川・南三陸町・気仙沼。豊かな森に守られ、潮の流れに鍛えられた、宮城三陸かきを育てて全国へお届けしている会社です。

IV **震災時の状況**



● 震災後の工場はどのような様子でしたか

4つの工場が津波に流されてしまった。1つだけ無事の工場は、ガレキや泥で2メートルほど埋まってしまった。しかし悲しんでいる時間もなく、4～5人の手作業でガレキや泥を撤去し5月のゴールデンウィークが終わる頃によりやくお店を再開させた。

津波で流された人々を多く見た。

● 震災後の食料はどのように確保されましたか

震災後の食料は、津波で流れてきた缶詰や冷蔵庫の中の物などを食べていた。

1週間してよりやく食料が届いた。遅れた理由は、津波の影響で山々に囲まれた道しかなくなってしまうからである。

2週間後にはアメリカによる「友達作戦」のおかげで各地に物資が送られた。

● 震災後1番苦労したことはなんですか

震災後1番苦労したことは、ライフラインだった。

1週間電気が使えなかった。使えるようになったのに、電化製品が使えなかったこととそ

れに加え 6 か月間、水道が使えないので近くの川まで行って水を汲んでいた。

● 震災後辛かった事はなんですか。嬉しかった事はなんですか

死体の搜索や回収、人が死んでいることを悲しむのではなく、津波で流され中々死体が見つからない中、死体が見つかる「良かった～」と、喜んでいたらしい。

V **取材を終えて**

今回の震災学習では、埼玉にいたら知ることの出来ない事を知ることができて良かった。津波の影響で、南三陸の半島が孤立してしまったという事を聞いたときは本当に驚いた。また、埼玉のスーパーなどで売られている物とは味が違い凄く美味しく、カキの試食をさせていただきとても嬉しかった。

清水 俊希

東日本大震災の被災状況を詳しく知ることができて良かったです。南三陸町は五年経ってもまだ復興ができていない事に驚きました。この震災学習でとても貴重な経験が出来て良かったと思います。

茅野 翔太

今回の震災学習で被災者の絆を知ることが出来ました。及川さんから教えてもらった事を、学校生活など今後に活かしたいと思いました。まだまだ復興が遅れているので、自分にも出来ることがあったら積極的に参加していきたいと思います。

鈴木 陸

私は、及川さんの話を聞いて驚いた。仮設住宅の部屋の広さが 4 畳半くらいだと聞いた。自分の部屋より狭いのに 4 人くらいが住むのに色々な苦労があったと思う。それだけでなく部屋と部屋の間にある壁が薄く隣人トラブルが多かったと言っていた。及川さんの話を聞くことができて自分にとっていい経験になったと思う。

長谷川 拓磨

VI **参考資料**

<http://www.maruara.jp>



南三陸マルセン食品を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 マルセン食品 』 『 三浦 洋昭 様 』



II 取材者 班長 生井莉乃 記録 遠藤あかり 写真 瀧澤由来 報告集 三浦隆介

III 会社・団体の概要

昭和八年から開業し、今の社長である三浦洋昭さんは三代目になります。2011 年 3 月 11 日に津波によって工場が流されてしまいましたが、2012 年 2 月 25 日に、宮城県南三陸町の志津川地区にオープンした、仮設商店街で販売を再開されました。

IV 震災時の状況

1、震災当日

海の近くにある工場で三浦さんと 10 人ほどの従業員で働いていた所に波が押し寄せてきました。三浦さんは 10 分もしないうちに従業員を避難させ、その後自宅に家族が居ないかを確認した後、高台に避難しました。何度も地震や津波を経験していたため、防災訓練には力を入れており、避難はスムーズに行うことが出来ました。しかし車に乗って逃げようとした人達は、渋滞によって波にのまれてしまいました。避難経路や手段が今後の課題になるのではないかと仰っていました。

2、震災後の生活

助かった人達は停電で電気すら使えないので、寒い日がとても大変でした。高台にいる間は乾パンや水などでしのいでいました。高台の無線放送で南三陸町の半分ほどの人の安否が不明だった事を知りました。

三浦さんは最初に娘さんの安否を確認するために小学校へ行き、次に奥さんが避難しているような高校へ行きました。そして無事に娘さんと奥さんに会えました。

その後三浦さんの家族は、娘さんがいた小学校に避難しました。そこでは 850 人の人達が避難生活をしていました。そこで三浦さんは炊事当番をしていました。しかし道具が無かったので家庭科室の道具を使ってご飯を作っていたそうです。

またトイレは水洗トイレにプールの水をバケツリレーで送り流しました。お風呂に入れたのは震災から 2 週間後の事だったそうです。避難生活によって普段の生活がどれほど幸せだったかを実感させられたと仰っていました。

3、震災後の良かった事

地域みんなが協力し合い、みんなの事を考えて行動してくれるようになったことが嬉しかったと仰っていました。また仕事が出来ない状態だったので次の日の事を考えないで済み、おかげでストレスを溜めずに過ごせたのが良かったそうです。



4、震災で怖かったこと

人間は自然に勝つ事が出来ないと感じたこと。

5、三浦さんからの言葉

どんなに辛くても「無理」という言葉を使わないで、前向きに生きてほしい。三浦さんは子供たちの常に前向きな笑顔に励まされて、自分も前向きになろうと思ったと仰っていました。

V 取材を終えて

震災学習をして、私は普段学べない事を学ぶ事が出来て良かったなと思いました。取材させていただいた方がとても優しく分かりやすい説明をしてくださったので、緊張がとけてしっかり話を聞くことができました。津波の恐ろしさや避難所での苦労は想像以上のものでしたが、その反面、前向きに生きる皆さんのお話を聞いて震災で学ぶ事が想像以上に大きかったなと思いました。この経験は凄く貴重だなと思いました。

生井莉乃

話をしてくれた三浦さん達は、とてもいい人達で今日限りの繋がりだけでなく、これからも繋げていけたらいいなと思いました。また帰りにタコ天をいただき、うれしい反面、少し申し訳なく思いました。帰りの車の中でも奥さんが、「ここでは元は〇〇だったのよ。」と説明してくださり、車を降りてからも、「これから頑張るね」、「修学旅行楽しんでね」と言われてとても嬉しく、今回の取材に行って良かったなと心の底から思いました。

遠藤あかり

埼玉県では津波被害に遭うことが無く、地震の被害もほとんど無いので、被災地の状況がどれ程すごいものなのか分からないまま今まで過ごしてきました。今回、修学旅行の震災学習として現地の方の三浦さんに実際にあった出来事をお聞きする事が出来て、震災に対しての自分の考えが変わりました。現地で見えるものは悲しいものもありましたが、現地の方々の明るさに触れる事が出来ました。とても貴重な体験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

三浦隆介

今回私は、震災学習という形でマルセン食品さんへお邪魔しました。震災後の話を聞くどころか、宮城に行くこともなかなか無いので、凄く良い経験をしたと思います。最初は震災の話と聞くともっと重い話になると思っていて、「修学旅行に震災学習かぁ、重いなぁ」なんて思っていました。皆様明るく今を考えていました。震災の影響がほとんど無かった私でも容易に想像できるお話で凄く理解しやすかったです。「自然の怖さ・震災」について改めて思い返す事が出来て、今後の自分の生活に生かしていこうと感じました。

瀧澤由来

VI 参考資料

南三陸の美味しいかまぼこ製品・水産加工品をお届けする株式会社

<http://www.marusen-s.co.jp/>

アスリートやまうちを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 アスリートやまうち 』 『 山内 義申 様 』



II **取材者**

班長 松田 美紅

記録 河野 愛

写真 磯野 拓海

報告集 清水 魁人

III **会社・団体の概要**

南三陸町歌津地区で営業していたスポーツ用品店、和洋服、寝具のお店津波の被害にあい、店舗・自宅共に流失してしまいました。

現在は仮設住宅に住みながら伊里前福幸商店街の仮設の店で営業中です。

山内義申さんは、今、伊里前福幸商店街の会長をやっています。

IV **震災時の状況**

1. 震災当時は店の人や近所の人たちを避難させ、中学校の上の方にとりあえず車を 2 台置
きに行き、瓦礫をくぐり避難した。
避難して 5 分もたたないうちに津波が襲ってきた。それだけでなく、津波が線路を渡っ
てやってきた。
2. 防災リュックに詰めたもの
布ガムテープ・タオル・懐中電灯・カッターナイフ・飴玉・手ぬぐい・非常時連絡先
トイレトーパー・ホッカイロ
3. 持っていればよかったもの
マジック・ボールペン・メモ用紙・ペンチ・下着・サランラップ・オロナイン軟膏・缶
切り、栓抜き・割りばし
4. 震災のことを思い出してしまう時はありますか？
何かをしようとして仲間がいないときや震災前にあったものがないことに気づいた時

V **取材を終えて**

私は、南三陸に行きました。大震災が起きた場所でインタビューするのはすごく不安でし
た。震災後初めて足を踏み入れ景色が殺風景で震災前との景色とは全く違いびっくりしまし
た。山内さんは経営している店が流されてしまって、家族と離ればなれで暮らしていますが、
明るく、笑顔でとても話しやすかったです。震災から 4 年半たってまだ復興していない部分
もあるので、自分ができることをやってみたいと思いました。

松田 美紅

私は、南三陸に行きました。被災者に直接震災について聞いていいのかなと不安がありま
した。でも行ってみると皆さん快く受け入れてくださったので安心しました。建物がなく殺
風景で、神社がある以外は土が山積みになっている状態でした。南三陸の様子を Y o u T u
b e で見て津波は本当に恐ろしいもので、復興するのに時間がかかりそうだなと思いました。
実際 4 年半経った今でもあまり復興しておらず、回復するには時間がかかりそうですが、少

しずつ復興することを願っています。

河野 愛

テレビなどで見たり聞いたりするより、肉眼で見たり生で現地の人の声を聞いたりすることはとても貴重で、いい体験をしたなと思いました。今後、この聞いた話をたくさんの人々に話を広めて、被災地、3・11の出来事を伝えていこうと思いました。

磯野 拓海

今回の震災学習を行う前に不安がありました。僕も実際に行ったことがあり、ある程度は復興していることも知っていました。でも実際に話しを聞いてみて復興が全然進んでないなと思いました。仮設住宅も多く、砂を高くし高台をつくりそこに家や店を建てる計画も今や4年半も経ってしまいました。しかしまだ建設途中で、計画当初よりものすごく時間がかかっているようです。震災当時の話を聞いて、胸が痛む話も多々ありました。しかし現地の人たちは、とても明るく楽しく話しやすい人たちでした。今後復興関係のボランティア活動が行なわれるときは参加してみようかなと思いました。

清水 魁人

VI 参考資料

<http://fukkoichiba.com/store/3173>



マルタケ大衆ストアを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 マルタケ大衆ストア 』
『 高橋 武一 様 』

II **取材者**
班長 垣 堀 尚 **記録** 室 崎 美 希
写真 小 池 和 也 **報告集** 関 口 凱 斗



III **会社・団体の概要**

マルタケ大衆ストアでは、食料品全般、家庭用雑貨、南三陸町産お土産品、南三陸産のお米などを取り扱っています。

高橋さんにとって、南三陸の海はなんと言ってもかけがえのない宝物でした。この自然と、震災で確かめ合うことができた人と人とのつながりを高橋さんは未来に伝えていきたいと考えています。全国の方たちからの支援と励ましが心の支えになっているそうです。震災前と同じような商店街にするのではなく、将来にわたり町の人々に愛され、多くの方に訪れてもらえるような商店街をつくらなければならない、という使命感を持ち、仲間の方々と日々新しいまちづくりのために奔走しています。

IV **震災時の状況**

東日本大震災で南三陸の町は壊滅的な被害を受けた。海に面した市街地にはいまでも瓦礫が残り、復旧工事に追われている。一方で復興に向けて着々と歩んでいる人たちもいる。その一例が歌津地区の伊里前福幸商店街、旧・伊里前商店会の人々だ。

震災発生時、いつもの地震ではないとすぐわかった。いつもの地震ではお店は揺れないようにできている。しかし 3 月 11 日の時の地震はいつもとは違って、やばいと感じてすぐ逃げた。そのとき地元の人たちは戻ってくるつもりでいた。品物が崩れ、地震が来たとき、津波が来るのではないかと予測したおかげで何とか津波から逃げることができた。

かつてないくらいに揺れた。その時からただ事じゃないと思った。津波が来ると言っても、どれくらいの高さか分からないから、判断が難しかった。その時たまたまお客様がいなくて、お店を閉める手伝いをしてくれた人が津波を知らないでそのまま帰宅してしまったことを、後悔したそう。あとになって、その人が無事だったことを聞いて安心した。

高橋様は、自分達のところ以外の被災した場所にボランティアに行ったりしたそう。

1. 復興状況

テレビやほかの情報で、私達が知っている情報では、復興が進んでいる。だが、実際は、復興は全然進んでいなかった。1 月頃に高台の場所を土で埋めて再度建て直す予定

2. 自分達にできること

もとの街に戻らないとしても自分達は少しでも元気づける為にお店を開くこと。東日本大震災を忘れないでこの先生きてほしい。私達の力で少しでも元に戻そうとする努力をすること。

V 取材を終えて

「この震災が起きたことを忘れないでほしい。震災で起こったことを伝えて今後役に立ててほしい」ということを高橋さんはおっしゃっていたので、私達はそれを伝えていかなければならないと強く感じました。

私は今回震災学習にあたって色々な方の話を聞いて、自分が考えていた復興状況とは異なっていて驚きました。私たちは、高橋さんや被災者の思いを直接聞いたものとして震災を知らない方たちに伝えていくことができたらいなと思いました。

垣堺 なお

この商店街の人達はみんな高校生のように元気でした。もちろんその中で悲しい思いがあると思うので、地元の人たちのたくましさや前向きさは、本当にすごいなと思いました。私はこのような心強い姿に感動しました。震災から4年経っているけどまだまだ復興できてはいないと私は取材を通して思いました。この震災があったことを何年も何十年も忘れずに伝えられることができるようにしたいです。

室崎 美希

津波の怖さや人との繋がりが大切だと分かりました。3月11日の東日本大震災のことを忘れずに人々に伝えていきたいです。人を助けることを繰り返す南三陸の人々は、人を助けることで、自分たちも助けられているようでした。そのような姿は、日本の大切な宝だと思いました。自分も南三陸の人々のように生きたいです。そのためには、日々の生活を大切にしないといけないのだと思いました。

小池 和也

被災した人たちと自分達のようなテレビでしか震災を知らない人では、その時の状況や何を思っていたのか、どうしたら良かったのかなどの考え方や思いが全く違いました。話を聞いて、震災時は本当に辛く大変だったということがわかりました。南三陸の人々はみんなで助け合って、復興、復旧をしようとしていて、自分にも当時何か出来ることがあったのではないかと思います。これから自分にもボランティアなどを進んで活動していきたいと思いました。今回の震災学習ではとても貴重な体験をさせていただきました。

関口 凱斗



総合衣料店マルエーを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 マルエー 』 『 千葉 教行 様 』

II **取材者** **班長** 岩波 愛璃 **記録** 大島 優香 **写真** 丸山 愛生 **報告集** 寺本 彩音

III **会社・団体の概要**

総合衣料店マルエーは、南三陸町歌津地区に 2011 年 12 月頃にオープンした伊里前福幸商店街の仮設店のひとつです。主に衣料品、ギフト商品、オリジナル商品の開発や販売をしています。震災後に避難者の衣料などを支えてきた商店です。

IV **震災時の状況**

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震は想像をはるかに超える大津波となって東日本沿岸を襲いました。

1、震災の被害

お店や家はすべて津波に流されました。衣料品などの在庫はすべてなくなったそうです。もちろん家にあった財産などもすべて失いました。

2、復興にむけて

南三陸町では、現在「南三陸さんさん商店街」や「伊里前福幸商店街」を中心に商業復興・復興に取り組んでいます。今後、仮設商店街から本設の商店街への移行や中心市街地におけるにぎわいの回復、地域経済の拠点整備など、様々な課題に対応していく必要があるそうです。商業機能の回復や産業立地の促進などを計画的に実行することを目指しているそうです。

3、震災にあってからの生活

千葉さんは避難所に 75 日間ほどいたそうです。体育館では 600 人もの人が避難していたようです。当初は毛布などは一家族に一枚しか配布されず、食事は一日 2 食、おにぎり・サンドイッチ・パンのどれかの配布でした。水道が出なかったのも、池の水やお風呂の水を使用しそうです。ですが、水の匂いに耐えられず入らない人もいたそうです。化粧などは天皇が慰問された時ぐらいしかできなかったそうです。

震災から 4 ヶ月ほど経って南三陸のオリジナル T シャツや上着を作りました。そこから何ヵ月か経って、ようやく仮設ですがお店が再開できたそうです。その時はとても嬉しかったそうです。



4、震災を経験して気づいたこと

自分の身に何があるかを常に考えなくてはいけないことやいざという時は自分の身は自分で守ること。人との交流の大切さ、当たり前な生活を当たり前だと思ってはいけないことに加えて、ボランティアの方々への感謝の気持ちや失ったものも多かった一方で、たくさんの出会いがあったことなどだそうです。

V 取材を終えて

今回の震災学習では新聞やニュースに掲載されていないような細かい話を聞くことができ、改めて震災の被害が大きく、被災者の方はとても大変だったということがわかりました。避難所では満足に入浴できず、ご飯も少ししか食べられない状態の中で、みんなで助け合って協力していたと聞いてすごいなと思いました。今もまだ大変なのにみんなが笑いあって過ごしていて、強くてカッコいいと思いました。まだまだ元通りの生活にはなっていませんが、頑張りたいと思いました。

岩波 愛璃

実際に震災を体験した人たちの話を聞いて、いつどこで何があるかわからないと感じました。今自分が当たり前のように感じている生活も、当たり前と思ってはいけないなと改めて思いました。失ったものがたくさんあっても、ボランティアに来てくれた人たちのつながりが財産になったとおっしゃっていて、みんなの協力や交流などが大切なのだと思います。

大島 優香

今回のインタビューで被害にあった方と話してみて、当時の辛さや大変だったことがすごく伝わってきました。前向きに取り組んでいる姿を見て、被災者の方たちが地元を元の姿に戻したいという気持ちが伝わってきて感動しました。今もまだ復興できていないところがあったのでこれから元の活気のある町になるように頑張りたいと思いました。

丸山 愛生

震災にあった人の話を聞き、改めて人の温かさを感じました。生活をするために必要な水や食料を運び、協力し合ったそうです。千葉さん達は、最悪の状況でも前向きに物事を考えていてすごいなと思いました。またボランティアの方々にもとても助けられたとおっしゃっていました。私も社会に何か貢献できる人になりたいと思いました。

寺本 彩音

VI 参考資料

伊里前福幸商店街

<http://www.m-kankou.jp/isatomaeshoppingmall/>



佐藤酒店を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 佐藤酒店 』
『 佐藤 裕 様 』



II **取材者**
班長 今西 智也 **記録** 原 健斗
写真 片山 稜人 **報告集** 紫藤 拓実

III **会社・団体の概要**

佐藤酒店ができたのは、今から約 100 年前である。現在の伊里前商店街で営業を始めたのは、2012 年 9 月のことである。

現在は、2 人で経営している。

主に、店舗で酒類の小売販売を行っている。お店に来られないお年寄りなどには、配達を行っている。

IV **震災時の状況**

- ・ 揺れの様子。阪神淡路大震災は、縦に揺れたり、横に揺れたりした。しかし、東日本大震災は横揺れがすごく強く、立てない状況だった。(ハイハイの体勢でも倒れてしまう。)
- ・ 電柱は、柔らかい棒の様に、ふにゃふにゃに揺れていて、現実とは思えない光景だった。
- ・ 水位がとても上がり、海岸にあるテトラポットも意味をなさない状況だった。
- ・ 津波がすごく、跡形もなくなってしまった。
- ・ 線路が津波にのまれてしまい、列車が通れない状況になった。(現在、壊れたところは、コンクリートで道路になっており、バスが通れるようになっていた。)



- ・ 南三陸の家は、コンクリートで造られているところもあった。そんな頑丈な家でも、倒れたり、傾いたりするほどの威力だった。
- ・ 佐藤酒店は、震災後 2011 年 11 月頃、伊里前商店街で店を再開。
2012 年 9 月頃、父親からの電話で、店を頼まれ、佐藤さんが店を始めた。
- ・ 佐藤さんが言っていた言葉。
「津波から逃げる際、自分も周りの人も食料を持っていなかった。でも自分がたくさん持っていたら、皆に分け与えることが大事。」と話していた。
- ・ 支援物資は、震災の後 3 日ほど経ってから届いた。それまでは、なにも食べられなかった。
- ・ 最初の頃は、体が食べ物を受け付けず、ご飯 1 握りくらいしか食べられなかった。その後、徐々に食べられるようになった。

V 取材を終えて

東日本大震災が起きた時、僕はまだ小学6年生でした。僕たちはその時、一斉下校で校庭に皆いました。小学生の僕たちは、ビックリしている人もいれば、揺れを楽しんでいた人もいたと思います。校庭にある掲揚塔は、ものすごく揺れていて、地割れしてしまうのかなど色々な事を皆思っていたはずです。僕は正直、どこで何が起こっていたのかも分かっていませんでした。でも、だんだん歳を重ねるにつれ、すさまじい事が起こったのだと分かりました。

僕は今回、修学旅行で南三陸の伊里前商店街にある佐藤酒店に行きました。その光景はとても悲惨なものでした。線路が途中でなくなっていたり、橋がなくなっていたり、家が倒れていたり、僕にとってありえない事ばかりでした。でも、伊里前商店街にいた人たちは、明るく話してくださり、とてもすごいと思いました。震災が起きてめちゃくちゃになってしまった所をみんなで協力し合い、店を建てたりしてすごいと思いました。元通りは難しいと思いますが、頑張っしてほしいです。

災害は人間の力で完全に防ぐ事はできませんが、今回の震災学習を通じていつ来るか分からない地震に立ち向かえる様に頑張りたいです。僕は、東日本大震災で亡くなってしまった約2万人の人たちのためにも、一生懸命に生きたいと思いました。

紫藤 拓実

今回、南三陸へ行って思った事は、他の所より、復興が遅いということです。

家があまり建てられてなく、橋や他の建物も形だけ残っており、電車も開通できなく臨時バスが走ることにすごくビックリしました。

インタビューした人の話を聞くと、関東大震災と違う災害。津波の恐ろしさ、一瞬にして無くなった建物がたくさんあったと聞き、地震や津波はとても怖く感じました。しかし、インタビューした人たちは、とても明るく、僕たちも元気をもらいました。これからも、震災が起きたことを忘れず生きていきたいです。

今西 智也

僕は、この震災学習をやる前は、被災地の事など少しも考えたことがなかったです。

ですが、今回の震災学習で、被災地への考え方が変わりました。まずビックリしたのが、被災地の人が、とても明るかったことです。震災のことは話しにくいかと思いましたが、すごく明るく対応してくれました。

本当に、佐藤さんに感謝しています。当時のことなど、詳しく聞くことができました。貴重なお話をありがとうございました。

片山 稜人

震災学習では、南三陸の佐藤酒店に行きました。震災から4年半が経って、まだ震災の跡がたくさんありました。

インタビューに行くとき、佐藤さんはまだ元気がないのかな、と思いながら行ってみるとすごく元気がある人で、親切な人でした。当時の事を聞いてみると、地震の揺れの強さ、地震の揺れ方、津波の勢い、津波の高さなど教えてくださいました。

今回、佐藤さんに当時の事を話していただき、震災の事をたくさん知ることができたので、とても良かったです。

原 健斗

ナカノ電気商会を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 (有) ナカノ電気商会 』
『 高橋 良子 様 』

II **取材者**
班長 梶田 芽衣 **記録** 埜本 李緒
写真 奥河 英亜 **報告集** 梶田 芽衣

III **会社・団体の概要**
電気工事
電器店



IV **震災時の状況**

～当時の状況～

地震発生後、徐々に海水が増えていき、その後津波が来て一瞬で町がのみこまれた。引き波で家も車もすべて持っていかれて鉄骨だけが残った。崩壊した 3 階建ての建物が津波の恐ろしさを物語っていた。中学校の体育館に約 600 人が避難した。寿司屋から米を貰い、女性が交代しておにぎりを握った。ダンボールで寒さを凌ぎ、木を拾って、火をたいたりして何とか過ごした。子ども達は親と離れていても泣かなかった。着の身着のまま避難して食べるものも着るものもなかった。それでもみんな同じ状況下だったため一体感があった。津波は夜まで続いた。



～地震前何をしていたか～

店で仕事。地震後は家族を先に避難させ自分は店の大事な物を詰め込んで町へ走ってみんなに声をかけた。

～震災直後一番心配だったこと～

明日からどう生きていくか。

～壊れた電化製品をどのように片づけたのか～

全部流されたため何も残らなかった。引き波ですべて持っていかれた。

～当時の状況を体験していない私たちに何を伝えたいか～

建物から離れる。広いところに逃げる。大事なものはすぐに持っていけるようにする。お金を大切にする。生きていくうえでお金が大切。

～震災前後の売り上げの違い～

家電品は赤十字が寄付してくれたため家電工事の仕事が忙しくなった。生きていくうえで仕事をしないことには食べていけないためこれからも店を営業していく。

～損害金額～

店舗の損害約 2000~2500 万の損害があり、総額では約 4500 万の損害があった。

V 取材を終えて

私は今回の震災学習で初めて被災地に行きました。ナカノ電気商会では、初めに DVD を見せてもらいました。YouTube で見た動画や新聞の写真よりも悲惨な光景でした。テレビの上には震災前と震災後の写真があって、その違いがとても凄まじかったです。引き波で三階建ての建物が崩れていてその威力の大きさを感じました。今までニュースや新聞で震災の話はたくさん聞いてきましたが、今までのどの話よりも深い内容を聞くことが出来ました。震災学習という形で南三陸、ナカノ電気商会でお話を聞くことができて本当によかったです。

梶田 芽衣

私はナカノ電気商会を訪れて今まで知らなかった事をたくさん知ることが出来ました。地震の影響もあったけど、津波の方が町に大きな影響を及ぼしていたと知りました。それと、津波には押し波と引き波があり、引き波の方が瓦礫などを持っていくほど凄いと聞き、特に津波は恐ろしいのだと実感しました。聞いた話によると、夜中もまだ津波の音がしていたと言うので波がかなりきたことが分かりました。埼玉では津波は来ないけど、地震が起きたときの為に対策を練るべきだと思いました。なので、いつ地震がきても良いように靴を近くに置いておき、すぐに避難が出来るようお金などを纏めておくのと良いと教えてくれたので、地震が起きた時の為に備えておこうと思いました。

桒本 李緒

ナカノ電気商会でお話を聞いてとても勉強になったと思います。最初に見せていただいた DVD では自分が思っていた以上に壮絶な映像でした。家や建物が崩れ倉庫や車が流されていてとても怖かったです。質問では普段聞けない貴重なお話が聞けました。いつ地震が起こるか分からないので必要なものを纏めて地震が起きたら建物に近づかない、津波がきたら高いところへ避難するなどとても勉強になりました。今回の取材で学んだことをこれから先、学校や普段の生活に生かしていければいいと思いました。

奥河 英亜



アングラズショップを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『アングラズショップ 大隆丸・まきの衣料』 『牧野 隆明 様』

II **取材者** | | | | | |-----------|-------|------------|-------| | 班長 | 桜井 玲菜 | 記録 | 只野 麻帆 | | 写真 | 三上 里奈 | 報告集 | 村田 春華 |

III **会社・団体の概要**

店舗は伊里前商店街にあり、ご家族で経営されています。もともとは、釣り具と衣料品が別々のお店で販売されていました。しかし、店舗が津波の被害にあってからは、現在の伊里前商店街の場所で 1 つの店舗で釣り具と衣料品を販売するようになりました。商品などは、以前の間屋さんから仕入れて、お店を続けているそうです。

IV **震災時の状況**

牧野さんは地震が起きたときすぐにお店のシャッターを閉め、レジのお金は出さずに金庫にあるお金を出し、衣服や毛布をもって外に出たそうです。その後、すぐに津波がおそってきて電気もつかなくなっていました。牧野さんたち家族は近くの小学校に避難し、津波がひどかったため上の中学校まで上がったそうです。津波は、まるで火山が噴火したかのような赤い煙を上げながら南三陸の町に押し寄せてきました。小学校では一階まで津波がきてしまい、なにもかも流されてしまいました。

それから牧野さんたちは、避難した中学校が避難所になったため、そのまま中学校で避難生活をするようになりました。避難所では物資や食料がなかったため、避難したその日は食料などが配られませんでした。だんだん日が経つにつれておにぎりが配られるようになりました。好き嫌いはしていられないとおっしゃっていました。好き嫌いなんかしていたら自分も死んでしまうからだそうです。

避難所の生活は朝の 5 時から始まり、いろいろなグループに分かれて仕事をしました。それはとても楽なことではなく大変なことばかりでした。避難所の人たちはそれぞれ「早くここから出よう」と話しあっているほどでした。

また津波がおさまった後、小学校のプールの中には遺体が沢山あったそうです。それらの遺体は高校生や避難した方々が小学校の体育館まで運んだそうです。

伊里前商店街ではまきの衣料さんが一番にお店を始めたそうです。お店を再開するにあたって必要なものは間屋さんがすべて提供してくれました。牧野さんは津波のせいでもともと伊里前商店街にあったお店が少なくなってしまうと寂しそうでした。しかし自分たちでできることはどんどんやっていきたいとおっしゃっていました。

V **取材を終えて**

私が行ったところは、服も売っていたので服の話もさせてもらいやはり残っている服はなく、今は埼玉や東京から服を低価格で提供してもらい今営業しているということでした。今も色々建設が進んでいて、来年の 12 月には、新しい伊里前商店街ができるそうです。今回は、色々な話をさせていただいて私には当然想像できないなと思いました。このことをいかしていければ

いいなとおもっています。

桜井 玲菜

今回の取材を終えて一番被害の大きかった地域だけあって私が思っていた以上にひどい被害を受けていて、あたり一面が煙で周りがまったく見えなかった。地震があったその日から何日か食べ物や毛布なども全然なくビスケット一つペットボトル一本をみんなで回し飲みをして一晩を過ごしたこともあった。など話を聞いてとてもつらくなりました。ただつらいことだけでなく人とのつながりが増えたなどよかった面もあったと、とても貴重な話を聞くことができて悲しくもありましたがとてもいい経験になりました。

只野 麻帆

今回の取材を終えて、お店の中をみていままでデパートなどの光りがひかっている、音楽が流れている店にしかいったことがなかったのほんとうにびっくりしました。震災学習で地震の怖さと津波のおそろしさをしました。震災がおきた日は家族がそれぞれ別のことをして一日あうことができず心配でなにもかんかえられなかったとき私だったらずっと泣いていたと思うしどうにかして家族のひとりでもいいから会いたいなとおもいました。

三上 里奈

今回の取材を終えて、たくさんのことをまなびました。病院で点滴をうたれている患者さんも寝たまま流されてしまい、その日の朝、昼、晩、はビスケットだけと聞いてとても大変だなと思いました。実際に見るのとニュースでみるのはかなり違い自分の目でみることでよかったです。普段は、携帯にたよってばかりだけど地震が起きたときは使えないので携帯にたよらず生きていきたいと思いました。そして今、自分にできることをやっていきたいと思います。今回の話をきいてとてもいい経験になりました。このことをいかしいつ地震がきてもいいようにしたいです。

村田 春華



B J ヤマウチを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 B J ヤマウチ 』
『 山内 良子 様 』

II **取材者**

班長 山田 歩美 **記録** 細川 奈緒
写真 小原 里枝 **報告集** 中島 琉華

III **会社・団体の概要**

伊里前福幸商店街で美容師を営んでいる。伊里前福幸商店街とは 2011 年 12 月 18 日、宮城県南三陸町歌津地区にオープンした仮設商店街である。

震災後再開するか迷っていたが、全国からの支援のおかげで道具など全て揃えられたのと、お客様の一言で再開することを決めた。震災の年の 12 月半ばにお店を再開し今もお店を続けている。



IV **震災時の状況**

Q1 地震が来たときは何をしていたか

A1 パーマをしているときに地震が来てそのままお客様と車で避難し、その途中で車を止めてお客様の頭に巻いていたパーマをはずしてさらに上に避難した。その 10 分後くらいに津波が車を止めていたところまで来た。その後 2 か月間避難所で暮らした。

Q2 自分が住んでいる家が津波に巻き込まれた時はどういう感情を持ちましたか

A2 逃げたとき上にいたからその瞬間は見えていない。
周りの人といたから少しは冷静でいられた。

Q3 水は建物のどのくらいの高さまできたか

A3 20m くらいまできた。
最初は小学校に避難したが危険を感じたため近くの中学校に逃げた。

Q4 美容室の設備はどうだったか

A4 全国から支援してもらった
再開するか迷っていたが、お客様の一言で再開することを決めた。
震災の年の 12 月に再開した。

Q5 今後の復興について

A5 少しでも早く元に戻ってほしい。
生きている人達で頑張っていきたい。

V **取材を終えて**

震災学習を通してたくさん学べました。一番驚いたことは、小学校は高台にあるのにも関わらず、津波が一階まで来たということです。実際に小学校を見せていただきましたが、ここまで津波が来たのかと驚きました。改めて津波は怖いということを実感しました。

今回この震災の話を聞くことができて本当に良かったです。

このことを忘れずにこれからも生活していきたいと思います。

小原 里枝

今回の震災学習を通して、ニュースやインターネットで見るだけでなく実際に経験した方にお会いしたことで、被災地では自分が思っていた以上に大変で、辛いことや苦勞してきたことがあったのだということを聞くことができました。バスの移動のときには、窓の外から見える景色に建物が少なくなっていくのが分かりました。

仮設で作られたコンビニなどもたくさんあり、まだまだ復興されてないところもたくさんあったので少しでも早く復興してほしいと思いました。

中島 琉華

実際に被災された方のお話を聞いて 3.11 は本当に忘れてはいけない日だと改めて思いました。南三陸は被害が大きかった場所で、まだガレキが残っていました。建物があつた場所は、今は何も無く、初めて実際に見てまだまだ復興には時間が必要だと思いました。1 日でも早く復興してほしいと思います。

山田 歩美

初めて震災学習というのをやって、改めて被災地の大変さが分かりました。津波でほとんどの家や建物が流れされたと聞いて、テレビで見ていたことや聞いたことはすべて現実だと知らされました。震災から 4 年半たった今、まだまだ復興が進んでないので、以前のような元気のある姿に戻ってみたいです。

細川 奈緒



たみこの海パックを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 たみこの海パック 』
『 阿部 民子 様 』



II **取材者**
班長 関口瑞希 **記録** 中村祐紀
写真 遊馬菜月 **報告集** 深谷栞

III **会社・団体の概要**

(HP より)

南三陸町の美味しいものを皆さんに伝えたくて、イチオシ商品の詰め合わせを考えました。南三陸町から、ありがたい気持ちを込めてお届けする海産物の通信販売です。津波と地震の恐怖がなかなか取れず、毎日が不安との戦いでした。

もうこれ以上涙が出ないだろうと思うぐらい泣きました。そんな中、沢山の支援や励ましを受け少しずつ前を向けるようになりました。

震災前、養殖業を家族で営んで来ましたが、あの震災で、これまで積み上げてきたすべての物を失いました。家族も犠牲になり一時は南三陸町から離れようとも考えました。月日と共にこれからの事を考えるようになり、南三陸町から離れたところで何が出来たのだろうか？今まで積み上げて来た事すべてが無駄になるのではないかと、いろいろ考え迷ったどり着いた答えが、南三陸町の復興を自分達の身近なところからやってみようと思ひでした。

IV **震災時の状況**

・ 震災当時

阿部さんは 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分頃、震災当時は加工場でわかめの作業をしていました。電信柱が激しく揺れ、自宅に避難し自分の家は山の方だったので津波は来ないだろうと思い込み、近所の人たちと余震がおさまるのを庭で待っていたそうです。

家は山の方にあるので津波は来ないと思っていましたが、思っていたよりも津波は高く、山の方の家でも津波が来たそうです。津波によって木々はえぐれ、加工場や船は流されてしまい 5 件ほどあった加工場は 2 件に減りました。

阿部さんは庭にいた近所の高齢者を山奥に避難させましたが、自分の家、そして残っている人も気になったので引き返したそうです。

その時、山へ逃げるおばあさんが真っ黒いドロドロの津波にのみこまれているのを見て震えが止まらず、四つん這いになって必死に山に逃げるのが精いっぱいだったそうです。実際に経験した人にしかわからない恐ろしさを体験して頭が真っ白になり、どうしていいのか全く分からず、夫や息子に連絡しようとしたのですが、携帯が使えず、連絡もできない状態で安否もわからないままだったそうです。

阿部さんの夫は海に出ていたので多分駄目だろうと不安でしたが、無事沖に逃げられたので助かって安心したそうです。息子たちも何とか連絡がつき、無事を確認できて安心したそ

うです。しかしあの怖い経験をし、夜は涙が枯れるくらい涙を流したそうです。海も怖くなり、わかめの養殖もやりたくなくなってしまったそうです。

- ・ 復興に向けて

夫の仕事は海に出てわかめの養殖をすることなので、自分が海を怖くなったからといって「海に出ることを仕事にしている夫に迷惑はかけられない」と思い、ボランティアの人たちに支えられながらたみこの海パックを建てたそうです。現在の復興状況は、家や仕事場が復活してないので復興はまだまだ半分にも満たしていないと言っていました。

V 取材を終えて

実際体験した話を直接聞いて、テレビで見ただけではわからない当時の雰囲気などが理解できました。やはり、実際に体験した人たちでないとわからないことが沢山あるのだなと思いました。

中村 祐紀

震災学習は行くまではとても緊張していましたが、実際行ってみたら相手の方がすごくいい方で、話しやすかったです。波は低いところに来て高いところには来ないのかと思ったら私たちが行ったところは、低いところに来ないで高いところに津波が来たそうで、高いからといって安心してはいけないのだなと思いました。

お話を聞いてこれからの自然災害の対策に役立てていきたいです。

遊馬 菜月

テレビや新聞ではない、実際体験した人の話を聞き、自分が思っている以上に避難生活や復興までの道のりは大変なものだなと改めて思いました。

関口 瑞希

実際に被害にあった方から直接お話を聞いて、体験した人にしかわからない怖さなどが伝わってきて鳥肌が立ち、涙が出そうでした。私たちが思っていた被害と南三陸の方々が体験した被害は全く違うもので、考え方や感じ方も違い、勉強になりました。

この貴重な経験を大事にしていきたいです。

深谷 栞

VI 参考資料

たみこの海パックホームページ

<http://www.tamipack.jp/>

レストラン慶明丸を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 レストラン慶明丸 』 『 三浦 さき子 様 』

II 取材者

班長 飯野 大夢 記録 栗澤 将崇
写真・報告集 柚木崎 唯香



III 会社・団体の概要

〈農漁家レストラン〉農林漁業者が経営していて、自家の生産物や地域の食材を活かして自ら調理をし、農山漁村ならではの料理を提供するレストランです。

志津川ならではの食材を活用して原材料はすべて地元産。野菜や米も自分の家で栽培したもの。魚介類は志津川湾から新鮮、安全な食材で皆さんに安心して食べていただいております。食材の本物の味を食べていただくよう、頑張っております。また、春から夏など養殖施設見学も相談にのります。

直売所では塩蒸しホヤ、ほたて、若布など、お安く販売しております。新鮮な魚介類の直送も致しております。(HP より)

IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日 金曜日

1 震災前

南三陸では、ドキュメンタリー映画が作製されていて、活気があり充実していた。

その他にもガソリンスタンド、雑貨屋、スーパーや酒屋など生活に必要なお店がレストラン慶明丸の周りにはたくさんあった。近所には約 80 世帯、260 人ほどの人が住んでいた、敷地にはガレージ、自宅、自分の店などがあったそうだ。

2 震災当時

海の近くにいて、魚などをあげていた最中地震がありその場で立っていることが出来なかった。地震で車が弾んでいた。20mの津波がきて、戸倉小学校の 1 階が沈水した。90 歳になるさき子さんの母を車に乗せ、すぐに高いところへ避難した。その時はすぐに戻れると思っていたため、荷物は何も持っていなかったと言っていた。

3 震災後

避難訓練をしていて、1～5 区に分かれていて避難場所もそれぞれ違う。震災で失ったものでなにが戻ってきてほしいかを尋ねると、できれば全部、でも一番は家と言っていた。また、今回の震災でなにが一番変わってしまったかを聞くと、三浦さんはすべてと言っていました。バラバラになった近所、むき出しになった鉄金、熱心に三浦さんは教えてくれた。

4 震災前と変わったところ

前に住んでいた場所が危険区域になってしまい、今は 3 5 軒しか周りに家がなくなってしまった。もう一度レストランをやることを息子に反対されたが、ボランティアに来てくれた人のためにもう一度建てた。命の重みを改めて知った。

V 取材を終えて

震災学習を通して学んだ事が2つあります。1つ目は、やっぱり東日本大震災は大きな影響を与えたということです。どこでそれを感じたかという、事業所に取材に行って震災の時のことを詳しく教えてもらい、僕たちがいた埼玉県とは被害の状況がまったく違うと知ったときです。事業所で震災当時の写真などを見せてもらい、改めて詳しく被害状況がわかりました。2つ目は被災地の人たちの強さです。そう思った理由は、取材をしたときに暖かく迎えてもらい、とても元気で笑顔な表情だったからです。被災地の人たちがこんなにも元気な姿で生活しているなら被害の少なかった僕たちも、もっと強く生きなきゃなと今回の震災学習で思いました。

飯野 大夢

私にとって震災学習はとてもためになりました。何がためになったかという、震災が起きたとき、どのように避難するかです。津波が来たときの高さは、テレビで見たり聞いたりして想像していたのよりもひどくとても怖いものだと思います。そして突然震災が来たとき、どのように対応するかなどを学びました。東北の人は辛い思いをしても、笑顔で頑張っているのでも私も頑張っていこうと思いました。もし次にこのような震災が起これば私も実際に現地に足を運び復興をお手伝いし、風化させないような活動をしていける大人になりたいと思いました。

栗澤 将崇

今回震災学習で貴重なお話を聞いて、命の大切さと自然の恐ろしさを改めて考えることができました。自然の恐さは最初テレビで見ているだけだったので、正直に言うとわかりませんでした。実際に見て、被災者の方に話を聞きとても恐いことがわかりました。津波が来た高さを知り、私より高くて驚き、衝撃的でした。周りに何もなかったことってこんなにも怖いのだと私は感じることができました。ここまで貴重なお話を聞けることはまずないと思うので、絶対に忘れません。笑顔を大切に、命の大切さを考え毎日をすごしたいと思います。

柚木崎 唯香

VI 参考資料

みやぎ農漁家レストラン・民宿連絡会

<http://www4.famille.ne.jp/~honami/nrr/index.html>

農漁家レストラン 慶明丸

<http://www4.famille.ne.jp/~honami/nrr/keimeimaru.html>



株式会社 ヤマウチを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 株式会社 ヤマウチ 』 『 山内 正文 様 』

II 取材者 班長 庄司 直矢 記録 星野 洸大 写真 上 真里愛 報告集 庄司 直矢

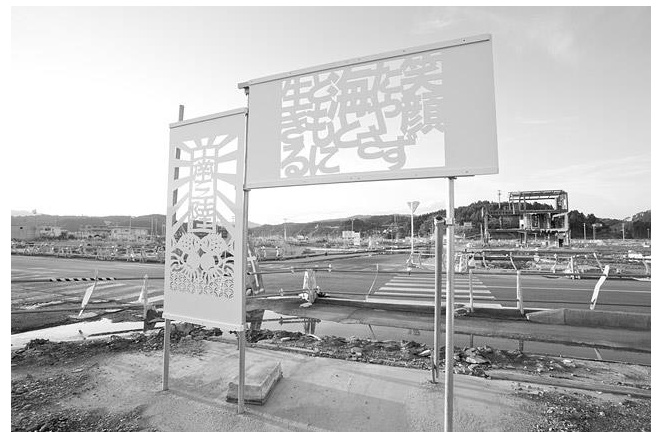
III 会社・団体の概要

2011 年 8 月、高台に実店舗を再建しました。

生活のための買い物が満足にできない状況だったので、鮮魚の他精肉や日用品も販売していました。今では震災前働いてくれていた社員も約半分以上が戻ってきたそうです。現在は、被災を免れた高台に一号店があり、食事処も併設しています。南三陸のキラキラ丼の他、日替わり定食なども楽しんで頂けるそうです。また、水揚げが回復した魚介類の販売や発送も行っているそうです。2012 年 2 月には二号店が南三陸さんさん商店街に開店しました。

右の写真は震災後、店があった場所に設置された「きりこボード」です。海に向け、町を背にし、亡くなった方々への追悼の想いと、復興にかけるメッセージを記しているそうです。

南三陸の海と魚、名産のタコをあしらったデザインになっていて、店が創業以来大切にしてきたメッセージである「笑顔たやさず海とともに生きる」が刻まれています。現在は嵩上げ工事のため、南三陸ポータルセンター敷地内に設置しています。



IV 震災時の状況

2011 年 3 月震災直後に撮影した店舗（写真 1）と工場（写真 2）です。重量鉄骨の店舗は 100 メートルほど移動し、逆さまになっていたそうです。また工場の 4 階建てにあたる屋上にも、津波が到達したそうです。

写真 1



写真 2



震災直後は、何をすればいいのか、どのように行動すればいいのか分からず、瓦礫でいっぱいになっていた工場を直すのに苦労したそうです。唯一残った工場も、現在は取り壊され更地になっているそうです。

また、震災後の生活は、十分な物資が無く、大変困ったそうです。例えばとても寒い時期だったので避難所の中学校のカーテンを毛布の代わりにして寒さをしのいでいました。食事も一日一食しか食べられませんでした。もちろん電気が通っていないためテレビが使えず、情報を得る手段はラジオしかなくて不便だったそうです。

震災発生の日後にはボランティアの人が来てくれましたが、日本人だけではなく、外国の人も来てくれて、大変ありがたかったそうです。

V 取材を終えて

自分は震災学習を通して、震災で日常の生活パターンがほとんどなくなってしまい、また趣味のものなども流されてしまったことはとても怖いと思いました。しかし取材をしてみて驚いたことがありました。それは、避難する時間が十分にあったということです。なんで時間があつたのに多くの死者が出てしまったのだろうと思いました。これからは、すぐに対処できるように避難経路を確認するなど地震を意識して生活していきたいと思いました。

庄司直矢

今回、震災学習を行って、復興の形は人それぞれなのだなと改めて感じました。以前、震災の講演会を聞いた際に講演者の方は「海の防波堤が震災後とても高くなってしまって以前のように海が見えなくなってしまったことが残念だ。」と話されていたので地域の人々みなさんがそう思っているのかなと思っていました。しかし、修学旅行のインタビューで防波堤のことを山内さんに聞いてみたところ「南三陸の防波堤は、震災前から高く作られたためさらに高く作られるのは、そこまで気にならない。」と話されていたので一つのことで考え方、感じ方は人によって本当に違うのだなと思いました。

上 真里愛



津波の堤防は、反対する人ばかりなのかと思っていましたが、山内さんは別に気にしていないと聞き、気にしない人もいるのだなと思いました。家や車を流されて、ゼロからスタートしても前向きな東北の人たちはとても強いのだなと思いました。

星野 洸大

VI 参考資料

株式会社ヤマウチ ホームページ

URL

<http://www.yamauchi-f.com/company/311story.html>

南三陸ポータルセンターを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地『 南三陸ポータルセンター 』

『 菅原 きえ 様 』

II 取材者

班長 渡辺伸 記録 遠藤百恵

写真 遠藤百恵 報告集 阿部光



III 会社・団体の概要

ポータルセンターは大型テントを活用した仮施設と、木造平屋の 2 施設からなり、地区の集会や会議などできる場所です。また、教育旅行の受け入れや各種イベント、ワークショップなど町外との交流の拠点としていく場所です。

IV 震災時の状況

- 1、 大変だったこと…
避難をするときに妊婦さんと一緒に避難し、妊婦さんのおなかを冷やさないように布をかぶせたりと気を遣ったりする時が大変だったそうです。
- 2、 震災が起きたとき家の状況…
津波もきてしまい家やお店が流されてしまい、電気や水やガスがすべて使えなくなってしまったそうです。
- 3、 震災時に必要なもの…
震災時はすごく寒い日で、偶然夫の車に毛布がありとても助かったと言っていました。
- 4、 学校の体育館で生活していたとき…
学校の体育館で生活していた時、菅原さんは家がなくなったことなどですごく落ち込んでいたそうです。しかし自分の子供たちが友達と、はしゃいでいる姿を見て菅原さんはすごく元気になったそうです。子供たちにはすごく感謝していると言っていました。
- 5、 震災前と震災後…
震災前は南三陸には緑と家とお店がたくさんありました。しかし震災後は家も緑もなくなっていて、土が盛ってあるなどと、とにかく町がなくなっていました。
- 6、 不便だったこと…
車が流されて遠くまで買い物に行くことができなかった人もいます。バスや自転車もなくなり、学校から遠い人は歩いて通学することがほぼできなくなりました。また少しの間食料が水と乾パンだけだったことだそうです。
- 7、 バスができて…
バスができると南三陸のみんなが使い始めて、小学生から高校生までがそのバスで登校するようになった。
- 8、 震災後、海に行ってみて…
菅原さんの子供が時々海に行きたいといっていて一緒に海に行くそうです。海を見て育ったので、海を見るとほっとするそうですが、二度と津波は来てほしくないと言っ

ていました。しかしまだ地面にガラスの破片が残っていることが多く、海岸に行く際も絶対に裸足でいけないほうが良いと言っていました。

9、 仮設住宅に住んでいる数…

今は仮設住宅に住んでいるのは南三陸の人口の全体のおよそ30%です。まだ4000人の方が仮設住宅から抜け出せていません。

10、 伝えたいこと…

今までの当たり前の生活が津波、地震で生活が一変してしまった。今の生活を当たり前だとは思わず、日々生きていることに感謝して生活したいと思います。



V 取材を終えて

僕は今回の修学旅行で震災を受けた南三陸で話を聞いて、自分が思っていたよりもとても酷い状況だった事に驚きました。地震が起きた時は丁度高台にいて助かったが事務所が気になり、車を走らせ事務所へ向かったところ、みんな避難していて安心したそうです。赤ちゃんが生まれる一ヶ月前ほどの妊婦さんがいて、お腹を冷やさないように毛布などで温めたりしながら移動するのがすごく大変だったそうです。自分がその場所に居たとしたら、そこまで相手の事を考えながら行動する事が出来なかったと思います。さまざまな話を聞いて、菅原さんたちをととても尊敬しました。自分は埼玉で特に大きな災害がなかったけれど、今回の取材を聞いて1日1日大切に生きていこうと思いました

渡辺伸

菅原さんが震災の時に電気、ガス、水道が使えなくなってしまったと言っていました。そんなことが毎日続いたら僕は耐えられないと思います。僕は電気、ガス、水道のありがたみをあらためて知りました。他には、昔の写真と現在の写真を見せてもらいました。それを見てどれだけ震災が大変だったのかが伝わりました。

阿部光

菅原さんの話を聞いて、私は周りの人を大切にしようと思いました。いつ何が起こるかわからないので、どんな時でも人を大切に、一日一日を精一杯生きたいと今回の取材で思うことができました。この取材はこれからの人生にも役立つし現地の人の声を聞く素晴らしい経験で、やってよかったと思います。

遠藤百恵



上山八幡宮を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 上山八幡宮 』
『 工藤 真弓 様 』

II **取材者**
班長 松本 正幸 **記録** 齋藤 伶奈
写真 綿貫 裕一 **報告集** 松本 正幸



III **会社・団体の概要**

遷座の際、本殿はそのまま転（ころ）に乗せて八幡川を渡り坂道を引き上げ、拝殿は一度分解し運ばれた後に現在地で慎重に組み立てられたと言います。

遷座前は東向きで、保呂羽山を背に五日町を向いていましたが、現在は南西向きで、五日町・八幡町の向こうに保呂羽山を望む形になっています。

上山八幡宮の祭典日はもともと旧暦 8 月 15 日ですが、現在では新暦 9 月 15 日に定まっております。宵宮には本吉法印神楽が舞われ、本祭では来年小学校に上がる子供たちが稚児行列となって御神輿と共に町内を練り歩きます。

IV **震災時の状況**

取材をした工藤さんは震災が起こった日、買い物に行こうとして息子さんを誘ったがその日はたまたまついてこなかった。その買い物の帰りに大地震が起きて大きく揺れた。その時近くにあったボールにしがみついて、とっさに頭をよぎったのは息子さんの事だったそうで息子さんの名前を叫んだ。その後家に帰ると、おばあさんと一緒に居て息子さんは無事だった。様々な場所へ避難した後に、学校の体育館へ避難したそう。体育館では、布団などの代わりに、体操マットが使われていたそうで、さらに水がなかったため、トイレなどはプールの水をバケツリレーして、それをゴミ箱やペットボトルに入れて使っていた。震災当日は炊かなくても食べられるお米を食べ、ちゃんとしたご飯を食べられたのは 2 日後だった。震災から 3 日後には普通の水が届いた。体育館に逃げた翌日に外を見ると少しの建物以外何もなくなっていた。その体育館では 10 日間過ごし、その後、2 時間ほど離れた加美町に 5 か月間避難し、4 年半は戻れなくて仮設住宅にいた。そして 9 月 30 日に、今のところ（上山八幡宮）の隣へと引っ越した。

～質問～

Q 精神的に落ち着いたのは？

A 1 年半程たってから。なぜなら仮設住宅での生活は 4 畳半での生活だからだそう。

Q 引っ越そうと思ったこと？

A 避難リストがあり、2 時間かかる父が以前勤めていて、知人の多いところへ行った。そこは田んぼが多く、助け合いもありすごくいい場所だと思った。町長も土地を貸すと言ってくれていたの、せっかくならここで子供も育てていこうと思った。しかし、やはり帰らなければならないし、復興していく姿を見せながら、育てていくのも子供にとってすごく勉強になると思った。そのため、引っ越そうという想いはすぐに無くなった。

Q 役に立つものは？

A 手ぬぐい、理由は包帯にもなるし、すぐに破けるし、ものを包めるので、便利だからだそう
だ。そのため、今はカバンの中に入れて持ち歩いているそうだ。

Q 伝えたいことは？

A 身近にいる人を大切にしてほしい。いつも一緒にはいられないことを知ってほしい。だから、今、後悔しないようにやさしく接してほしい。

今工藤真弓さんは、皆で避難路を作っていて、その避難路にツバキの花を植える活動をしている。ツバキは塩水に強い花で、みんなの防災意識も広がるからだ。さらに最後にこの様なことも言っていた。「失くすものもあれば得るものもある」と。

V 取材を終えて

この震災学習でインタビューをして、いろいろなことを学ぶことができました。普段テレビなどでは報道していない被災地の現実を知ることができました。インタビューをした中で心に残ったことが2つあります。1つは、一番身近な人程大切にすること。2つめは、「失くすものもあれば得るものもある」と言っていたことです。大きな被害があった後に、得るものがあると言える事は素晴らしいことだと思いました。

松本正幸

震災学習を終えて、この学習でいろいろなことを知ることができました。特に「一番伝えたいことは？」という質問で「簡単なようで難しいけど、一番身近にいる人を大切にしてほしい」と言っていました。それ以外にも役に立つものなど自分にもできる対策なども教えてくれました。この震災学習で色々なことを知れて良かったです。

綿貫裕一

被災地に直接行き、工藤さんの話を聞くことは、改めて大切なことだと思いました。工藤さんは、いま私たちにできることを教えてくれました。それは、「今そばにいる人を大切にすること」「1日1日を大切にすること」だと。いつも一緒にいることはできないから、後悔しないように、1日を過ごしてほしいと言っていました。なので、私はそばにいる人を大切に、「ありがとう」などの一言を大切にしたいと思いました。

齋藤伶奈



☞津波が到達した場所にある石碑



☞上山八幡宮

VI 参考資料

上山八幡宮 URL <http://tohoku-monogatari.org/spot/?lid=62174>

南三陸町観光協会 神割観光プラザを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 神割観光プラザ（神割崎キャンプ場） 』 『 及川 渉 様 』

II 取材者

班長 米盛 愛 記録 小田 幸奈
写真 上野あかね 報告集 西川 実佑

III 会社・団体の概要

南三陸観光協会の管理する神割崎キャンプ場は、森の中にあり、海も近くにあるため、とても自然を感じられる施設になっています。寝る時には、近くの海のさざ波の音と共に眠りにつくことができます。夏はとても涼しくて快適に過ごすことができます。



IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震が起きました。

ライフラインは止まり、食糧も少なく、寒さのため毛布 1 枚では耐えられず、食事はおにぎり 1 個だけや水 1 杯の日もあり、それらが回復したのもおよそ 3 日目だったそうです。1 番困ったのは情報のやり取りができないため、安否の確認ができないことだったそうです。情報のやり取りができないため避難所にいる人の名前を手書きで何枚も書いて、他の避難所にまで歩いて行ったりしながら安否の確認を行っていたそうです。その中にはあいまいな情報もあったそうです。避難所でごはんを配るときには、列をきちんと守りパニックの中でも日本人らしい気質があったそうです。



観光協会がある神割観光プラザは、津波の被害がほとんどありませんでした。しかし、及川さんの住んでいる町は津波によって大きな被害を受けたそうです。神割観光プラザのように海沿いであっても大きな岩があったりする場所では、被害は少なかったそうです。しかし海から少し離れていても障害物が少ないような場所では、大きな被害が出たそうです。

そして震災が起きる前と比べて人口は 1 万 7 千人から 1 万 1 千人に減少してしまいました。

しかし震災後は観光客が増加したともおっしゃっていました。震災前は海を見に来た人やおいしいものが食べたい人などが多かったが、今は震災を意識した目的が多いようです。道路の整備のおかげもあり徐々に交流人口は増加していったそうです。

V 取材を終えて

震災学習で南三陸に行くを決めた時は、南三陸がどんな被害を受けてどのような状況なのかも全く分かりませんでした。その一方で、ニュースなどでよく聞いた場所だったので行くことが少し楽しみでもありました。しかし、現地に行き、直接被災された方にその時の事を聞くなんてハードルが高すぎる！と正直思いました。けどインタビューをしてみて初めて知る事もたくさんありました。被災者ならではの思った事や感じたことを聞くことができ、貴重な体験をすることができました。

米盛 愛

震災学習では震災に対して色々な事をたくさん知ることができ、同時に考えさせられる事が多かったです。及川さんから聞いたお話は、私自身がニュースやテレビで知っていた事とは違うこともあり、想像していたよりもはるかに大変だったのだと思いました。もちろん南三陸の被害だけでなく、いいところもたくさん聞けて、自然豊かで人と人との繋がりを大切にしている街で、すごくあったかい街だなと思いました。インタビューを終えてみると、震災学習が南三陸でよかったと思えたし、大人になったら、また行ってみたいとも思えました。

上野 あかね

震災学習は、すごく難しかったです。実際に震災にあった人に、直接自分たちの言葉で質問をして、すごく緊張しました。震災があってから、いろいろなことを乗り越えて、一つずつ前に進んでいることを聞いてすごいと思ったし、私も頑張ろうという気持ちになりました。貴重な話が聞けてよかったです。

小田 幸奈

今回南三陸へ震災学習に行って、やはり実際に経験した人の話を聞いて、グッと心に伝わってくるものがありました。取材する前まではとても緊張しましたが、質問していくうちに、震災時の光景や状況がすごく伝わってきて親身になって聞くことができました。このような経験は、無かったので、不安もありましたが、ためになることがたくさん聞けて、及川さんに教えてもらったように、私も一日一日を大切に生きていこうと思いました。

西川 実佑

南三陸町役場観光振興課を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 南三陸町役場観光振興課 』
『 菅原 大樹 様 』

II **取材**
班長 高橋 昌伸 **記録** 伊藤 司
写真 播磨 美奈 **報告集** 菅原 綾華

III **会社・団体の概要**

- ・ 南三陸町の役場に所属しており、震災の復興活動として南三陸応援団というチーム名で《オリジナル団員証・お手伝い・情報の発信・イベントの開催・ポイントカードの発行》などを行っている。最初は地域の魅力を伝え、感謝の気持ちを伝えるために始めたがきっかけでしたが、今はもっと南三陸を好きになってもらえるよう活動をしているそうです。
- ・ またインバウンド事業という、外国との事業を始めたそうです。



IV **震災時の状況**

～2011 年 3 月 11 日地震発生～

- ・ 当時、菅原さんは役場の税務課に勤めていました。休日で仙台に出かけていて、14 時 46 分に地震がきました。その前にも何度か地震が来ていたため津波が来るとは予想していたが、今回震災がとても大きかったのが怖かったそうです。
- ・ 家族のことが心配でしたが、災害本部などの仕事があるため地元の気仙沼へ向かわれたそうです。

1. 震災時の心情

弟さんの無事を確認するため、真っ先に弟さんの住んでいたアパートに向かったが、あまりにも慌てていたため、弟さんの隣の部屋訪ねてしまい、結果的にすぐには会うことができなかったそうです。

2. 今一番復興で苦労しているところ

市街の道路が震災から約 4 年半で 2 度も工事をしたこと。早めに工事をしないと南三陸の住民が他の市に移動してしまうが、新しいアパートなどを作る時に工事の影響で土地の売買するのに時間がかかってしまったそうです。

3. 震災から 4 年間での復興状況について

お年寄りが多い地域のため、流されてしまった病院を立て直す必要があったが、予定よりも早く建て直すことができ、また来年度末には新しい商店街ができるということで以前よりも復興が進んでいるそうです。

4.震災にあって怖いと感じたことやトラウマに感じていること

役所の人の仕事で、海の中にいた遺体がパンパンに膨らんで悲惨な状態であり、見ているのが辛かったことと、遺体安置所で知り合いを見つけた時が辛かったことだそうです。

5.震災後の優先順位

- ① 住むところを作ること
- ② 生活しやすい環境を作ること……たとえば、お店・病院・職場など
- ③ 交流人口を増やすこと

※ 病院の建設費に 57 億かかるところ、台湾から 20 億の寄付金を送っていただいたそうです。

V 取材を終えて

今回の取材で話を聞き、たくさんのことを学びました。自分ではまだ知らなかった出来事や被害を取り戻す為の働き、苦勞を聞く事が出来ました。とても感動し、それによって自分の考えを直していきたいと思いました。

高橋 昌伸

今回取材で強く印象に残ったのは、「人との繋がり」と「絆」です。この 2 つがあったからこそ、他の場所からボランティアや支援を受けることができ、今の状況まで戻す事が出来たと思います。人との繋がりや絆の大切さを取材を通して感じる事ができました。

伊藤 司

様々な資料を見て、想像以上に多くの破壊したものをボランティアの活動によってここまで綺麗になることに驚きました。津波で知り合いの人が運ばれた、海水を含んだ悲惨な状態を多く目にして、もう経験したくないとおっしゃっていました。自分だったら冷静でいられるかと考えさせられました。詳しくお話して下さった菅原様に感謝しています。

播磨 美奈

動画を見た後に実際にお話を伺って、震災の恐怖を改めて強く感じました。この機会を通じて初めて復興の為に多くの人に関わっていた事を知りました。全国から 14 万 6 千人の人がボランティアに来ていたそうです。特に関西地方の人は阪神淡路大震災にあり、支援を受けた経験があり、とても親身に接してくれたと伺いました。取材を通じて、関西の人々が、自分たちが受けた恩を東北の人々に恩返ししたこと知り、助けあうことの大切さを強く感じました。

菅原 綾華



南三陸図書館を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 南三陸図書館 』 『 及川 庄弥 様 』

II 取材者

班長 田中 湧馬 記録 増子 郁矢
写真 田中 湧馬 報告集 川島 史久

III 会社・団体の概要

南三陸図書館は被災した後、2011 年 10 月 3 日ベイサイドアリーナ前にプレハブの仮設図書館として再開した。2013 年にはオーストラリア・ニュージーランド銀行の支援によって建てられた南三陸町オーストラリア友好学習館（通称：コアラ館）の開設落成式がおこなわれ、2 月 1 日に開館された。この建物は、震災後初のプレハブでない建物となった。



IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で南三陸図書館は全て津波に流されてしまいました。震災による町の惨状を知ったオーストラリア・ニュージーランド銀行が、学習館の総事業費約 5300 万円を寄付した。学習館は木造平屋建て約 220 平方メートルで蔵書約 1 万 3000 冊を備えた図書室や学習室、交流室などが作られた。仮設住宅の人達は退屈な日々が多いのでスポーツ選手や AKB48 さんなどに来てもらい、皆さんを元気付けていました。

V 取材を終えて

南三陸図書館の及川庄弥さんに取材をさせていただきました。図書館の被害はとても酷く、全ての本が流されてしまったことが分かりました。本は色々な地域から寄付という形で貰うことができ、図書館はオーストラリアの人達が建てて下さったことが分かりました。オーストラリアの人達が建ててくれた図書館は、子供たちの遊び場でもあり、勉強をする場所でもあり、何より癒しの場でもあることが分かりました。

仮設住宅は、2100 世帯もあり現在は 1000 世帯が出て全体でおよそ 30 %しか仮設住宅から抜け出せていないことが分かりました。仮設住宅の人は、退屈な日々が多いのでスポーツ選手や AKB48 などに来てもらい皆さんを元気にしていたことも分かりました。僕たちにできることは、被災地のことをいつまでも忘れないで欲しいと言って下さったので、僕は被災地を忘れないで被災地に行きボランティアなどをしていきたいです。

田中 湧馬

南三陸図書館へ行き、及川庄弥さんに取材をさせていただきました。話を聞いて改めて知ったことや思ったことは、海から 50m ほどの距離にあった図書館は津波によって何もかも飲み込まれて流されてしまったということです。震災前にあった 3 万冊の本は、1 冊も戻ってくることはありませんでしたが、他の図書館から譲り受け、1 万冊の本が集まりました。その時の気持ちは、嬉しい気持ちと感謝の気持ちでいっぱいだったそうです。10 月に図書館を再開し

たところ、子供達が本をよく読んでいると言うことを知ったニュージーランドやオーストラリアの方が新しい図書館を作ってくれました。今でも仮設住宅に住んでいる人が、最初の 50% もいる事を知り驚きました。

今までの色々な人との出会いが、一番の元気の源だと言われ、僕は今でも仮設住宅に住んでいる人に少しでも元気になってもらえるようにしていきたいと思いました。

川島 史久

南三陸図書館に行き、及川さんに取材をさせていただきました。改めて東日本大震災の怖さ恐ろしさなどを思い出しました。今回の取材では、現地の人の話を聞いておよそ 3 万冊の本がすべて津波により流されてしまったこと、そのすべてが戻っていないことを知りました。図書館は津波によりあとかたも無くなってしまいましたが、オーストラリアの銀行のおかげで新しい図書館が震災から 1 年半後に建てられ、1 万 5 千冊もの本が寄付により集まりました。

その一方、4 年半たっていまだに家がなく仮設住宅に住んでいる人が 2100 世帯中 1100 世帯もあるそうです。

取材をして今、私たちができることは被災地のことを忘れないでいることであり、被災地に来て防災についての意識を高めて欲しいということを学びました。

増子 郁也



VI 参考資料

南三陸図書館—saveMLAK

<http://savemlak.jp/wiki/%E5%8D%97%E4%B8%89%E9%99%B8%E7%94%BA%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8>

南三陸警察署の震災後の取り組みを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 南三陸警察署 』
『 佐々木 一久 様 』

II **取材者**
班長 今関倫隆 **記録** 今関倫隆
写真 佐藤明日香 **報告集** 佐藤明日香

III **会社・団体の概要**

2006 年に志津川町と歌津町の合併で南三陸警察署に改称。東日本大震災後は仮庁舎を設置し、活動している。

震災により津波が庁舎屋上まで侵入し、建物は残ったものの業務遂行不能に陥った。署員の方たちは、住民に避難指示を行いながら高台に撤退した。その際に警察官 1 名が殉職した。

その後、昼間はベイサイドアリーナ内の臨時事務所、夜間は入谷小学校に連絡拠点を設置して業務を遂行していた。



IV **震災時の状況**

～被災状況～

南三陸の方々は毎年防災訓練を行っていました。しかし、3 月 11 日の大震災は予想を遥かに上回ったそうです。しかしどんなに訓練をしていても実際に起こると頭が真っ白になってしまうそうです。津波の高さは最大 24 メートルにも達し、現在南三陸における死者は 566 名、行方不明者 212 名、全壊した家は 3300 世帯にも及んだそうです

～現在の取り組み～

現在も月に 1 回、行方不明者の搜索をしているそうです。また津波の日という日を設定し、防災訓練を行っています。

～津波がきたとき～

地震が大きすぎて津波のことまであまり考えられなかったそうですが、50 年前のチリ地震が起きた時も、太平洋沿岸を中心に最大 6.1 メートルの津波が襲来し、甚大な被害が発生しました。

そのため、行政・警察が一体となって津波対策及び訓練を継続して実施していたそうです。今回の東日本大震災では、予想を遥かに上回る津波（最大 15.5 メートル）が襲来したことで、たくさんの命が犠牲になってしまいました。

※ チリ地震とは 1960 年チリ中部で発生した、マグニチュード 9.5、震源の深さ 33 km の超巨大地震です。地震発生から約 22 時間半経ってから日本の三陸海岸沿岸を中心に最大で 6.1 メートルの津波が襲来しました。

～困ったこと～

① ガソリンがなかったこと

ガソリンがないことでパトカーが動かず捜索に行けないという事態が起こってしまいました。またガソリンスタンドがあっても何回までと決まっていた、皆が何時間も並んでいたそうです。もちろん中にはパトカーなどの緊急車両が優先のスタンドもあるそうですが、先に並んでいる方が「なんで？ずるい！」と怒る方もいたそうです。そこで震災後には警察施設にも災害時にガソリンを入れられるようにパトカー用のスタンドをつくったそうです。

② トイレの問題

震災が起きたときにライフラインが止まってしまったので仮設トイレが設置されました。仮設トイレは寒い、臭い、流せないで衛生環境がとても悪かったそうです。

～復興に向けて～

皆が安心して復興活動ができるように、交通事故・犯罪を少なくすること。安心・安全を守ることを第一に考えているそうです。

～おねがい～

① 何かあったらまずラジオを聞く。

ラジオの情報はどのメディアよりも早いです。いち早く情報を手に入れられるようにラジオを日ごろから準備しておいたほうが良いと思います。

② 東日本大震災を忘れないで欲しい。

何年も経つと漫画や映画のワンシーンのように震災のイメージを忘れてしまうかもしれない。でも2011年3月11日に起きた地震はそんなに昔のことではないです。絶対に忘れないでください。

V 取材を終えて

今回、警察の方と話して写真も見せてもらい、テレビだけではなく、経験した人の話も聞いたことで恐ろしさが分かった。できれば自分たちも何かしたいです。とても良い経験ができました。

今関倫隆

最初は正直、他人事で大変だなとしか思っていませんでした。しかし、今回お話を聞いて南三陸の方々が実際に体験したことを想像したら恐ろしくて、他人事にしていた自分の冷たさに気づきました。何かボランティア活動に参加して、少しでも東北の方々の役に立ちたいと思いました。

佐藤明日香



志津川高校を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 志津川高校 』
『 佐々木 先生 』

II **取材者**
班長 塩出 記子 **記録** 塩出 記子
写真 柴田 美幸 **報告集** 嶋田 香織



III **会社・団体の概要**

志津川高校は、大正 13 年に町立志津川実科高等女学校として設立され、昭和 23 年に現在の宮城県志津川高等学校と改称された。平成 15 年度からは南三陸町内の 4 つの中学校（現在は 2 つの中学校）との間で「連携型中高一貫教育」が実施されており、学習活動のみならず、学校行事や地域活動・部活動等でも連携を図っている。

IV **震災時の状況**

南三陸町の被害状況は、死者・行方不明者が約 800 名。

志津川高校の被害状況は、死者 1 名、行方不明者 2 名。

津波は、登校坂の中腹まで押し寄せ、学校の校門を突き抜け、町内では 4 階建て建物と同じ高さまで押し寄せた。

その光景は地獄絵図そのもので、恐怖でいっぱいだった。また、映画の 1 シーンを見ているようで、実際の出来事に感じられなかった。

当時、学校には部活動中の生徒 100 名、職員 40 名が残っていた。学習合宿のため、自然の家にはいたのは、生徒 28 名、職員 6 名であった。

津波が押し寄せた時、学校下にある老人ホームへ助けに行った生徒がいた。また、多くの住民（約 500 人）が避難してきたので、生徒たちは避難誘導や教員の手伝いを積極的に行った。

先生方は、救助活動やこれから予想される事態に備え、避難所運営のための準備を行った。

また、学校の施設を有効に利用できるように考え、場所を指定した。

～例～

年配の方、こども・・・畳のある武道場

けが人、病人・・・保健室

一般の方々・・・1 階の普通教室

学校職員・・・事務室と校長室などと部屋割りを行った。

＊その他の部屋は避難者の数を把握するため、使用できないように施錠した。

＊特に、重要書類などがある職員室などは厳重に鍵をした。

教員のほとんどは、他の地区から通勤していたので、2 グループに分かれ、2 日間で一時帰宅をした。ただし、24 時間以内に返ることが条件であった。

一時帰宅の際、「緊急車両登録」を警察官にしてもらい、ガソリンを優先的に入れることや通行禁止になっている三陸道を通行することができ、大変助かった。



<http://09384866.at.webry.info/201409/index.html>

V 取材を終えて

本当に震災は恐ろしいもので、ビデオを見たときは言葉が出ないほどびっくりしました。震災から4年半。長いような短いような月日を経りましたが、完璧には復興していません。訪問した志津川高校の先生方、生徒さんたち、地元の人たちは、地元が大好きで、復興するための努力がすごいなと思いました。

避難所として使われた為、先生方は本当に大変な思いをしたのだなと感じました。

修学旅行中の震災学習を通じて、震災後の場所に足を踏み入れ、実感したことがたくさんありました。4年半経ちましたが、はやく復興してほしいし協力すべきだなと思いました。

塩出 記子

テレビでみた風景より何もなくて、思っていたよりも更地になっていてびっくりしました。4年経った今でもまだ復興作業を進めていて、高台を作りそこに家を建てたりして、次の震災の時、少しでも被害を少なくしようとしている工夫にびっくりしました。

今回の震災学習でたくさんのことを学んだ気がして、良い機会だったと思います。

柴田 美幸

改めて自然の恐ろしさを感じました。5分も経たないうちに、津波によって町がほぼ無くなってしまう光景は、今でも心に焼き付いています。また、4年半経った今でも、まだ仮設の建物が多く見えて、復興がまだ続いていることを感じました。

この取材を終えて感じたことは、地元の人々の温かさや、前向きに生きようとする強い心です。今回学んだこと、感じたことを、自分のこれからの行動に生かしていけるように頑張りたいです。

嶋田 香織

VI 参考資料

取材の時頂いた資料から抜粋させていただきました。



志津川高校の生徒さんと撮っていただきました。



佐良スタジオを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 佐良スタジオ 』 『 佐藤 信一 様 』



II 取材者

班長 栗栖 天斗 記録 小林 芽生
写真 大熊 春奈 報告集 遠山 晃平

III 会社・団体の概要

昭和 46 年に町の写真屋として佐藤さんのお父様が開業。

その 40 年後の平成 23 年の震災で店舗兼自宅が流出したが、町の人々の支援によって平成 24 年の 2 月 25 日に仮設オープンできました。震災後も変わらず町の写真屋として営業される一方、震災前の南三陸の風景や 3.11 その後の南三陸を「写真」を通して全国に発信しています。

IV 震災時の状況

- ・震災直後はどこにいましたか。

当時、志津川小学校の PTA 会長を務めていた志津川小学校に避難した。

- ・一番辛かったことはなんですか。

街が跡形もなく無くなってしまったこと。

- ・震災から分かったことはなんですか。

自分一人では何も出来ないということ。みんなで力を合わせれば復興が出来ると思うようになった事。

- ・被災地の写真を撮り続けているのは何故ですか。

震災前は 4 軒写真屋があったが震災後は佐良スタジオだけになってしまったということと写真は何年先も残せて、これからの社会を担う人々に震災を伝えられると思ったから。

- ・今の目標はなんですか。

震災が起きた年の 5 月から仮設住宅を借りて経営しているが、次の店の準備を進めながら、本設店舗を作り、今の仕事も全力で取り組んでいきたい。



V 取材を終えて

今回震災学習で南三陸に行き、思った以上に復興が進んでないことに少し驚きました。南三陸町が復興交付金を使い山の地主全員から山を買い、山を切り崩してからそこに家を建てると話していたので大変な作業だと思いました。今回の震災学習で佐良スタジオの人の話を聞いて、未だに震災の爪痕が残っていることを知り、あらためて地震や津波などの災害の恐ろしさを実感しました。

班長 栗栖天斗

今回の震災学習はとても心に響きました。実際に被災地を見て回ったり、お話を聞いたりする中で、普段では聞けないこともあり、とても勉強になりました。お話を聞いて改めて思ったことは、仲間はとても大切だということです。1人で何でもやろうとせず、団結してやるのが大事だと感じました。今回聞いたことを忘れずに、これからを過ごしていきたいです。

班員 小林芽生

震災学習をして初めて東北に行き、実際に見ると何もなく、私が思っているよりも復興が進んでないのがわかりました。取材した方々の家も無くなり仮設住宅でお店を開いているのでとても大変だと思いました。東京オリンピックの作業もあるため、東北の復興作業も遅れているそうなので心配です。前建てていた所には家は建てられないそうですが、お店は建てられるので少しでも早く復興が進んで元の暮らしに戻って欲しいと感じました。東北に行きお金を使うだけでも復興に繋がると思うのでまた行きたいと思います。

班員 大熊春奈

初めて自分の目で東北の被災地を見て思ったことは、想像以上に復興していなかったことです。四年もたっているから家や町などがほとんど元に戻っているのかと思っていましたが、まだ時間がかかるようでした。自分たちにできることは被災地に旅行して、現地の特産物を買ったりすることだと思いました。これが復興に繋がっていくと思うので、ぜひまた旅行したいと思います。

班員 遠山晃平

VI 参考資料

南三陸さんさん商店街 佐良スタジオ

<http://www.sansan-minamisanriku.com/shop-list/saryo>



未希の家を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 未希の家 』

『 遠藤 清喜・美恵子 様 』

II 取材者

班長	中迫 優美	記録	櫻井 有莉奈
写真	鶴田 のぞみ	報告集	四方田 穂波



III 会社・団体の概要

宮城県南三陸町の海に見える高台に、津波で最愛の娘さんを失った夫婦が民宿をオープンしました。

民宿に訪れた方々に、あの東日本大震災の時に何が起きたのかを語り継いでいこうとしています。

IV 震災時の状況

地震が起きた際、電気は通っておらず水が断水すると思いペットボトルに水を入れるなど、心の準備はできていた。突然海底が見えるくらいに水が引き、それを見ていつもと違う状況だと思い車で逃げて来て、パッと見たら目の前の家や人が流されていた。目の前で起きている事が現実だとは思えなかったという。

遠藤未希さんは危機管理課の職員だった。震災当時、防災対策庁舎にいた遠藤未希さんは津波が迫る中、防災無線庁舎 2 階にある防災無線で避難を呼びかけていた。

震災後の状況

津波は、遠藤様が元々住んでいた自宅の 2 階まで押し寄せてきた。自宅は流されずに残ったため修復して住んでいるが、危険区域になってしまった。そこで、2 軒上の高台に、以前から考えていた民宿を建てることにした。

民宿の名前は、亡くなった未希さんを感じられるように未希の家と名付けた。始めたばかりの時は、娘の名前を呼ぶのに抵抗があったが、今ではもう呼べない娘の名前を呼べるのが生きているにもなり、作ってよかったと思っている。



<http://hon.bunshun.jp/articles/-/2629?page=2>

震災から一年ほどたった時に、娘の放送を思い出し、あのすごい地震のなかよくはっきりとした声で 44 回も言えたな、よく頑張ったなとほめてあげたいと思った。

海の上での生活で思ったことは、地震のたびに津波に備えなければならないこの場所には住みたくないと思ったが、地元の海の幸のおいしさや自然の豊かさ、そこに住む人にしかわからない豊かさがあることに気付いた。

震災が起き、子供を亡くしたことで親としての人生・家族としての人生が変わってしまった。しかし、これまで多くのボランティアの方から元気をもらっており、そんな方のためにも一人でも多くの方が来やすいようにしていきたい。

V 取材を終えて

娘さんの話をしている時に目に光るものがあり、自分ももらい泣きしそうになりました。娘さんの呼びかけを聞かせてもらった時も鳥肌が立って娘さんの声のおかげで助かっている人が何人もいるのだと思いました。自宅まで津波が押し寄せてきて修復しても危険区域になってしまうなど悲しいこともありましたが、未希さんと言う娘さんを亡くされ放送で避難を呼びかけていた事で少しでも多くの命が助かったのだと思いました。当たり前はいつ当たり前ではなくなるか分からないので1日1日を大切にしていきたいと思いました。

中迫 優美

今回の取材では、未希の家を作った理由や、遠藤未希さんに対する思いがたくさん聞けました。話を聞いて一番思ったのは命の大切さです。この取材で学んだことを生かして生活していきたいです。

櫻井 有莉奈

今回の取材を終えて、インタビューさせていただいた遠藤さんは話やすく、震災当時の事をテレビでしか見たことない私たちに詳しく教えてくださいました。テレビでは放送されなかった場面の話だけでも迫力があり、私は今まで震災について積極的に調べようとしなかったのですが、今回の取材をきっかけに調べ始めたくさんのことを学びました。このようなきっかけをいただいたことや、インタビューをさせていただいた遠藤さんから臨場感あふれるお話を聞かせていただき感謝しています。取材を得て改めて感じたことや知ったことを忘れずに、胸に刻みこれからの生活を過ごしていきたいと思います。

鶴田 のぞみ

仮設住宅に住んでいる人が多い中、遠藤さんは3年で家が修復して自分たちの家を次に震災が来たら避難場所にしてという優しさがすごいと思いました。

未希さんが自分の命より住民の命を優先した優しさは親譲りなのだろうと思いました。私は未希さんと同じ状況になったら自分の命を優先してしまうのではないかと思います。

四方田 穂波

VI 参考資料

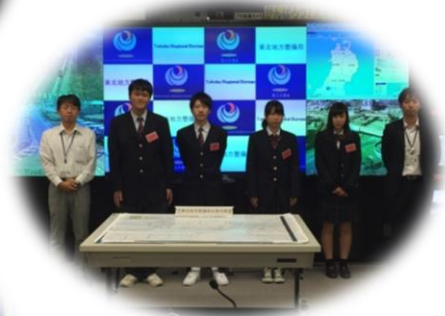
未希の家～震災語り継ぐ民宿～

www3.nhk.or.jp/archives/12347/



<http://www.sanspo.com/geino/news/20140311/acc14031104000001-n1.html>

仙台エリア



JA 仙台を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 JA 仙台 』

『 代表理事組合長 遠藤 睦郎 様
高橋 行浩 様 高橋 稔 様 』



II 取材者

班長 関口 玲菜 記録 中島 美麗
写真 和島 花枝 報告集 久保 翠麗

III 会社・団体の概要

JA 仙台は、地域農業の発展と農業所得の向上、安全な食料の供給、地域貢献を目指し様々な協同組合活動をおこなっています。

IV 取材内容

Q 震災時何をしていましたか？

A 震災時は、業務中や会議中でした。その後、職員を家に帰らせたが家族の中の人が亡くなってしまったり、組合員の方が犠牲になってしまったりもした。

Q 不便だったことはありますか？

A ガスや電気が使えなくなったり、乾電池が売切れだったりして困っていた。

Q 農業に何か被害がありましたか？

A 農業の被害額は 7 2 1 億円でたくさんの農業用機械が壊滅してしまった。

また、防風林や農地、農作物が津波の被害を受けてしまい、福島原発の放射能汚染の影響により、放射性セシウムが基準値を超えているものがあつた。(例、シイタケ、山菜、キノコ、タケノコ)

風評被害も未だにあり、心配で買わない人がある。

Q 震災後、したことはどんなことですか？

A 食糧不足によるお米の緊急販売と被災した組合員へ飯米供給の対応をした。また農地に海水が流れたため、除塩作業をしたり、農業倉庫に積み重ねて保管していた約 1 2 万個のお米の袋が崩れていたため、はい直し作業をみんなで協力して行った。

Q 中学生、高校生にできることは？

A ボランティアに参加することや、自分たちの声で、「この地名の食べ物は“安全”だよ。」と伝えてほしい。

Q これからの復興にどう関わっていきたいか

A 農地の復旧はほとんど終わっているが、生活面では復興があまり進んでいない。仮設住宅の状況がどうなっているのかを考え、家を建てる人がいたらそのために必要な資金の融資の相談を行っていく。

V 取材を終えて

JA 仙台では、震災当時勤務中で、幸い死者は出ずにすみしました。しかし、家族の方が被害にあってしまった人がいたり、中には組合員の方が亡くなってしまったりして、「命という大切なものを失った。」とおっしゃっていました。それを聞いて、私は家族を失ったことがない今のこの生活がすごく幸せなんだと改めて感じました。これからも命を大切にして生きていきたいです。

関口 玲菜

震災の時仙台では、震度 6 強でたくさんの方が被害にあったり犠牲になってしまったり、農業の機械や建物が壊滅しました。震災前、震災後の写真を見せていただいて、面影はありましたが緑がなくなってしまういたり、建物が流されてしまったりと全然違っていて怖いと思いました。震災当時はガスも食料も電気もなくとても大変で辛かっただろうなと思いました。自分たちにもできることがあるので、自分たちの声や、行動で伝えていきたいです。

久保 翠麗

今回震災学習を通して、私は「JA 仙台」がそもそもどのようなことをしている会社なのかも知らず、事前に頂いた冊子で主に農業に関わっている会社だということだと知りました。取材では、震災当時について沢山のお話を聞くことができました。「農業」という一括りだけでも被害が沢山あったこと、農作物作りが完全に再開できるまでかなり時間がかかった事を聞きとても驚きました。いつまたこの様な被害が起こるかわかりません。もしまたその時が来るなら、次は少しでも被害が減る様にもっと対策が行き届いているようになってほしいと思いました。

和島 花枝

震災学習で実際に JA 仙台にいったみて、とても緊張しました。しかし、担当者のお話を聞いているうちに緊張もほどけていきました。農家の方々は、津波の影響で農機具が津波で流されてしまってみんなで共同に使っていると聞いて、私には何ができるんだろうと考えさせられました。

私にできることは何かと考えたときに、ボランティアや募金が思い浮かびました。JA 仙台に行って改めて震災の大変さを知ることができました。JA 仙台に行ってよかったです。これから、自分のできることをしていきたいです。

中島 美麗

仙台放送を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 仙台放送 』
『 佐藤 拓雄 様 』

II **取材者**
班長 古谷 萌永 **記録** 岩井 栞
写真 村山 峻 **報告集** 本間 拓哉



III **会社・団体の概要**

株式会社 仙台放送は、宮城県を放送対象地域とし、テレビジョン放送事業を行っている特定地上基幹放送事業者です。

IV **震災時の状況**

Q1 地震発生の瞬間は何を思いましたか？

A1 地震で辺りが揺れているとき、仙台放送の建物が走り出すような感じがした。ガラスが割れたり物が沢山落ちたりしたが、とにかくスタジオに行かなければならないという思いでスタジオに向かい放送を始めた。

Q2 記憶に焼き付いていることは何ですか？

A2 生きている中で津波というのを見たことがなかったので、気仙沼の設置カメラがとらえた映像を見たときは、最初遠くに白波が立っているところしか見えず「白波が立っています」と言うしかなかった。しかし間もなく津波がいろいろなものを飲み込んで、「これが津波の恐ろしさなのか」と思った。また津波を最初に見たときに、「これで死者が出てしまうのか」と思っていた。

Q3 震災当時はどうのような生活でしたか？

A3 震災当時は物流が途絶えて、スーパーにも野菜や果物がわずかに置かれているだけで、ほとんど何もない状況だった。車が流され道路も崩れているため、遠くまで物を買に行けなかった。そのため支援物資に頼りきりの生活になった。

Q4 報道という職業で震災時に一番大変だったことは何ですか？

A4 途切れさせること無く放送を続けていた為、十分な食事も睡眠もとれずにギリギリの生活だった。被災者が、何人見ているのかも分からないのに、伝え続けなければいけないことが辛かった。辛いニュースをずっと伝えていた為、嬉しいと思うことを言葉で表すことは出来なかった。

Q5 被災地の状況や思いを放送で伝えるときに、どのような気持ちで伝えていますか？

A5 被災した人たちの立場に立って伝えるようにしている。すぐそこに被災した人がいることを忘れないようにしている。

Q6 4年たった今は何を伝えたいと思っていますか？

A6 とにかく被災地の現状を伝えたい。ニュースで報道されていないからと言って復興したと思わないでほしい。まだまだ復旧もままならない。最後の一人が復興したといえるまで、伝え続けていきたい。

Q7 私たちの世代がこれからすべきこと、してほしいことは何ですか？

A7 東日本大震災のことを忘れないでほしい。震災が起こった時に何を思ったのか、これから

どうしていくべきなのか、自分の頭で考えて、知ってほしい。

V 取材を終えて

今回仙台放送に取材に行き、東日本大震災の本当の姿を知ることができました。テレビや新聞では知ることのできない、被災した人達が何を思っ、何を願っているのか、直接聞く事ができて本当に良かったです。話を聞いたお二方共、この震災を忘れないで欲しいと言っていました。この震災について自分の頭で考えて、その為に何かしたいと思います。

古谷 萌永

震災学習では、アナウンサーの方に取材させていただきました。アナウンサーの方はとても話やすく、事細かに質問に対して答えてくれました。私もすぐに緊張が解けて次々と質問ができて、とても感謝しています。情報を提供することが仕事なため、震災当時も揺れがおさまった時に、すぐに地震の速報を出したと言っていました。最後までアナウンサーとしての仕事をやり通した佐藤さんはとても偉大だと思いました。

岩井 栞

私は修学旅行の初日に被災地、東北の各事業所に行って取材をしてきました。

初めは、何もわからない僕たちに話しても何も変わらないという対応をされるとばかり思っていました。しかし取材に行って聞いた震災当時の話は、とても私たちが住む場所ではありえない事や、悲惨な光景を物語るエピソードなど貴重なお話でした。

佐藤さんは身の危険を感じていても、情報を伝える職を忘れることはなく、今何が起きているかを伝えるべきという判断をとられていました。私が同じ状況であったとしても、そのような行動はとてもできないと感じました。またその他にも取材を通して団結力や助け合いという思いやりなどを知ることができました。

もう少しで震災から 5 年が経とうとしていますが、「震災を忘れることなく、未来に伝えていきたい」と被害にあった人たちの想いを強く私は感じました。

まだ復興できてない地域もあり、現地の生の声でしかわからない部分もたくさんあったのでこの震災学習はすごく貴重な体験だと私は思いました。

村山 竣

私は、今回仙台放送に訪れて被災した方の声を聴きました。正直私は、震災にあまり関心がありませんでしたが、震災について考えるよいきっかけになりました。震災当時は、食料が制限されていたと聞いて、自分達が普通に食事していることはとても幸せな事だなと感じました。

取材をして感じたことは、震災当時のことを絶対に忘れてはいけないということです。そして、もっと知ってほしいということです。また今後は復興に協力していきたいと思います。

本間 拓哉



VI 参考資料

・ 仙台放送ホームページ <http://www.ox-tv.co.jp/>

河北新報社を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 河北新報社 』 『 砂金 慎 様 』

II 取材者

班長 保坂 有沙 記録 安野 那菜
写真 根岸 ほのか 報告集 小河 彩香

III 会社・団体の概要

明治 30 年 1 月 17 日に創立し、社員数 498 人、年間売上はおよそ 200 億円。

新聞は 46 万部配布していて宮城県が 9 割、その他東北 5 県へ配布しているが震災で 3 万部減らし、夕刊は 6 万部、同様に 1 万 5 千部減りました。

オンラインやデータベースでも配信し、フリーペーパーなど 8 商品を発行しています。

自分たちのエリアでしかできない地元に着目した新聞を作っている新聞社です。

IV 震災時の状況

震災時に、河北新報は新潟日報社、山形新聞社、福島民報社と緊急時相互支援協定というのを結んでいました。（緊急時相互支援協定というのは、結んでいる所が緊急事態の時に紙面作成や印刷でお互いに助け合うことです）

東日本大震災が起きた時、河北新報では制作システムのコンピュータ（サーバー）が倒れ、社内は物が散乱していたそうです。耐震の本社のおかげで建物自体は倒れなかったが、壁が剥がれ落ちるなどの被害もありました。

さらに河北新報では、自家発電があり、免震の印刷センターがあったので、新潟日報社に頼んで紙面を作り、自社で新聞を印刷することができたそうです。

しかし、紙面作成のすべてを新潟日報社に頼むわけにはいけないので、どんな新聞を作るか会議をし、新潟に直接行って新聞の整理を行いました。

停電も何日か続き、配達のための燃料や紙は十分か、社員の食料はどうするかなど全員が各自の持ち場で今、何をすればいいかを考えました。

このように新聞社の方々の努力により、3 月 11 日には号外を発行し、12 日からは新聞を待っている人々の元へ届けることができました。

新聞を待っていた人々は、アナログの新聞にありがたさを感じ、情報が入ったことに感謝してお礼の手紙が届いたりもしたそうです。

～不足したもの～

新聞用の紙・・・岩沼市にある製紙工場がストップしたため。

自家発電用の油・・・停電が続いたため、自家発電し続けなければならなかった。

水・・・断水のため。オフセット印刷という印刷に必要なだった。

印刷用インク・・・千葉にあるインク工場が火事になったため。



配送用の燃料

～現地の方が震災で感じたこと～

日頃の近所づきあいの大切さや、人間関係の重要性、お互いの信頼関係の大切さなどを改めて感じたそうです。他にも、普段使っているものが使えなくなったらどうするか、電気、水、ガス、新聞などのライフラインの大切さを知り、代替品を考えるなど防災に対する意識も変わったそうです。

～今後の河北新報～

4年半たった今、復興したと思われがちになってきているが、実際はまだまだだそうです。特に人手不足と予算の問題があります。

新聞では、復興予算について、まだ仮設住宅があることなど、伝えなければいけないことがまだまだたくさんあります。

河北新報社には、震災についてのページを掲載するなど震災に関する取り組みをしているそうです。

～震災が起こる前と起きた後の考え方の変化～

起きる前は、「地震があったらどうしようということ」を考えていたが、今は「これからの東北をどうしていこうという事」を考えているそうです。

V 取材を終えて

今回河北新報の方に話を聴いて、自分たちのことよりも新聞を第一に考えているというのがすごく伝わってきました。社内も見学させていただき、普段見ることのできない新聞社の中が見られてすごくよかったです。

保坂 有沙

新聞社ということで、3.11からの新聞や色々なものを見せてもらい、見たことのないような当時の写真とともに説明をしてもらい、自分が思っていた以上に悲惨だと感じました。今回、地元の人から話を聞くことができとても参考になりました。

安野 那菜

日頃の近所づきあい、人間関係、信頼関係の大切さなど、普段あまり気にしないようなことが、震災でとても大事になったということを聞いて、これからは少しでも気にしていこうと思いました。社内見学でも普段見ることのできないような場所を見学できてよかったです。

根岸 ほのか



今回新聞社の方の話を聞いて、震災で大切なことや、大変だったことなど私たちの知らないような詳しい話を聞けてとても良い震災学習にできました。今回聞いた話をどのように活かせるかなどを考えて過ごしたいです。

小河 彩香

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 国土交通省 東北地方整備局 』
『 千葉 丈司 様 』

II **取材者**

班長 和島 武尊 **記録** 北村 卓己
写真 高杉 真生 **報告集** 深澤 真美



III **会社・団体の概要**

国土交通省が所管している東北地方の主要道路、河川、ダム、砂防、港湾の整備及び維持管理を主たる業務として行っている行政機関。災害時における防災業務も行っている。

IV **取材内容**

1. 東日本大震災の対応

国土交通省東北地方整備局では、災害対策室において、ヘリでのライブ中継等により情報収集をしていました。津波の遡上、福島第一原発などの映像は NHK などの報道に使われたそうです。

なぜ、映像を残すのかということ、二度とこのような被害が起きないように、防災啓発に役立ててもらうため、震災を風化させないためと言っていました。

2. 道路の復旧について

通常の災害であれば修繕するところから始まるが、東日本大震災では大量の瓦礫が行く手を阻んだことから、瓦礫を重機で除去する作業（道路啓開）から始まり、警察、消防、救急車など緊急車両が通れる幅を確保しました。時に瓦礫の中から発見されるご遺体は、手作業で運びつつ道路を確保したこと、道路啓開が完了するまでに約 1 週間かかりました。道路だけでなく橋への被害も多かったです。元に戻すのは困難と判断された損傷の大きい場所では仮橋をつくりました。津波が起きた後に出た震災瓦礫は、再利用できるもの・できないものに分別を行った上で、海岸堤防や防波堤の一部に再利用されました。



3. 震災当時について

仙台に勤務していた職員の話聞く機会がありました。津波が起きたときは、仙台河川国

道事務所にて、激しい揺れにより業務で使用する書類が巻き散らばってしまい歩くことも困難であり、今まで経験したことのある地震に比べて長く感じたそうです。国土交通省では防災上、家族の安否確認後は仕事に専念しなければならないため、安全である結果を報告した後は、しばらく帰宅できなかったそうです。職員もいろんな方がいて、一番大変だったことは、家族の安否確認がとれなかったことだとおっしゃる方もいたとっていました。人によっては一週間以上も家族と連絡が取れなかった方もいたそうです。仙台に勤務していた職員の方に一番印象に残っていることを聞くと、仕事、プライベートで自分一人じゃ何もできないという「無力感」、力のなさを痛感した。とおっしゃっていました。

4. 震災から4年後の今について

4年経っていても、更地になっている場所や仮設住宅が沢山ありました。東北の復興のために今の私たちにできることは、東北（岩手、宮城、福島）の特産品を買ったり、ボランティアに参加したりすることだと、取材した方はおっしゃっていました。

V 取材を終えて

初めての体験が多すぎて本当に大変でした。ですが、本当に有意義な時間が過ごせました。さらに震災の凄まじい津波の映像や異常な黒い海など埼玉県では絶対に見られない光景を見ました。改めて震災のすごさを思い知らされました。

和島 武尊

実際に見に行ったら色々思いました。建物がほとんど残っておらず殺風景でした。海岸沿いでは、防風林が壊されていました。津波の恐ろしさを知りました。

北村 卓己

津波の被害にあった場所に行って、やっぱり話やテレビで見たり、聞いたりするのは、違うと思いました。

高杉 真生

特に印象に残っているのが、津波で流されてしまった場所を千年希望の丘から見たことです。本当は街があった場所なのに何もなくなっていて津波の被害の大きさがわかりました。貴重な体験ができた一日でした。

深澤 真美



仙台市ガス局を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 仙台市ガス局 』

『 総務課総務係 鈴木 貢史様（震災当時 仙台市監査事務局） 』

II 取材者

班長 角田 梨奈 記録 大澤 貴彦

写真 濱田 香里 報告集 濱田 香里



III 会社・団体の概要

私たちは、仙台市ガス局を訪問し、震災当時は仙台市監査事務局に勤務していた鈴木貢史様へ、震災当時の体験や仙台市ガス局の取り組み等を取材した。

仙台市ガス局は現在、仙台市、多賀城市、名取市、利府町、富谷町、大和町、大衡村の 3 市 3 町 1 村にわたって、約 345,500 戸に都市ガスを供給している。また LP ガスも、仙台市を中心に約 1,500 件の販売をおこなっている。

IV 震災時の状況

震災時の状況

- ・ およそ 30 年に一度、宮城県沖を震源とする地震が発生することが言われていた。前回の宮城県沖地震からすでに 30 年が経過していたため、いつ地震が起きてもおかしくなっていた。当日、揺れが始まった時には「今日の地震がそれでなければ良いが・・・」と思ったが、停電で事務局の証明が一斉に消えた瞬間に「ついに来た」と思った。
- ・ 揺れている間はイスに座ったまま動くことができず、机の下に隠れることなどできなかった。

震災後の動き

- ・ ガスの復旧は病院が最初だった。
→敷地内まで「中圧管」という太いガス管を入れていたため。3 月 23 日までの 12 日間で真っ先に復旧させてそこから一般家庭に流した。その後、各家庭などへの供給を再開していった。
- ・ ガスの復旧は電気とは異なり各家庭などでの安全確認が必要で、一軒一軒訪問してまわった。その際に各県のガス局員が駆けつけてくれた。
- ・ 監査事務局は応急仮設住宅を担当することになっていた。仙台市では、不動産業界の協力を得ながら、アパートなどの空室も応急仮設住宅として提供した。
- ・ 監査事務局では仮設住宅の説明をするため、4 月上旬にから避難所を訪問した。
→主にプレハブ住宅についてだが、入居する条件は、1 グループ 10 世帯以上で応募することとした。理由は、知り合いと一緒に入居することで孤独死を防ぐこと等にある。

将来に向けて

- ・ 古いガス管を地震に強いガス管（ポリエチレン製）と入れ替える工事を引き続き進める。
- ・ これから先、震災のことを忘れてほしくない。覚えていてほしい。

- ・ 実際に被災地を訪れてほしい。
- ・ 大規模な災害で、食べるものすら手に入らないという状況に陥った時、周りにいる家族や友人との助け合うことができるかどうかは重要な意味を持つ。日頃から、家族や友人とのつながりを大切にしてほしい。

V 取材を終えて

私はこの震災学習で、普段だったら教わらない事や行けなかった事を出来たと思いました。ガスは、生活に欠かせないため復旧作業に追われた事、応急仮設住宅の入居に応募するためには知り合いなどグループで応募しなければいけないなど、調べただけでは出てこなかった事や、行かなければ見られなかった事ができてよかったです。今回聞いたことを、これから忘れずにいたいと思います。

角田 梨奈

この震災学習を終えて、改めて震災のことについて考えさせられました。3月11日、あのような事が起きるとはとても思いませんでした。あの大きな津波でたくさんの人が亡くなり、建物が崩れ、とてつもない被害を受けました。私はその場にはいませんでしたが、テレビのニュースや新聞を見て、とにかく驚くばかりでした。そして修学旅行で震災学習を行い、私は仙台市ガス局へ取材しに行かせていただきました。そこもガスなどに影響を受け大変なことになりました。私達の知らない所もそういったたくさんの被害があったと知りました。

改めて、こういった震災学習があつてよかったと思います。とても勉強にもなったし、良い経験となりました。

大澤 貴彦

今回の震災学習では、あまりニュースでは報じられないような、具体的な話を聞くことができました。

私はガス局に行きました。ガス局では各家庭にガスが行き届かないなどの被害があり、埼玉ではガスが止まるなどの被害などはありませんでしたが、震災当初は3月ということもあり、ガスが使えないということは、本当に不便で辛かったのではないかなと思いました。私は直接的に被災したわけではなかったのですが、このような貴重な体験が出来てよかったです。

濱田 香里

VI 参考資料

仙台市ガス局 HP

<http://www.gas.city.sendai.jp/>



株式会社ハッピーウーマン 茅原田哲郎さん取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 株式会社 ハッピーウーマン 』 『 茅原田 哲郎 様 』

II 取材者

班長 小川ゆうか 記録 吉田柊斗
写真 顧広婷 報告集 福島陽夏



III 会社・団体の概要

茅原田さんは高校時代写真部に所属していて高 2 の時には部長をしていたそうで、高校卒業後は写真の専門学校に進学、その後は師匠の元でアシスタントとして 10 年修業し、トイレ掃除の雑用からシャッター押し、海外取材と世界中を周りプロカメラマンとなったそうです。

IV 震災時の状況

震災時、茅原田さんは炊出しや支援物資を運ぶ手伝いをしながら写真を撮っていました。3 日後にはまだ死体が浮いていて、警察・自衛隊などの人達は行方不明者を捜索していたそうです。茅原田さんの家は住んでいる場所が小学校や裁判所に近かったためガス・電気・水道は最初に復旧したそうです。

またテレビに報道されなかった事として男の人がおばあちゃんを連れて津波から必死に団地の階段へ連れて行ったそうです。そしてその男の人は屋根の上でぷかぷか浮いている高校生を腰に紐を巻き付けて、津波に飛び込みおばあちゃん達が紐を引っ張って助けました。他に潮が引いた日に雪が降って凍死した人や津波によって電線に宙吊りの状態で亡くなっていた人の話を聞きました。

～茅原田さんに質問しました～

Q：自分と家族が生きていた以外で嬉しかった事は？

A：1 番は人に感謝されること、自分の写真を喜んでくれること。例えば遺影写真を撮った時に親族の方からお礼の手紙を頂いた事だそうです。

Q：震災で困った事は？

A：お金。なぜなら、働けない・野菜が高い・物が無い事でインスタント食品から車や自転車などを友人達に言って送って貰っていたそうです。

Q：カメラは何台持っていますか？

A：4 台持っていて、高いもので 100 万以上するそうです。

V 取材を終えて

震災学習は、不安と緊張の中で行き、成功したか分かりませんでした。何とか乗り越えられました。ニュースに報道されなかった事や支援している時に起きた事、これからの為に何をすべきかなど色々な事を話してくれました。その中でも「一瞬がすべてすべてが一瞬」と話してくれた言葉を忘れずに今後過ごしていこうと思いました。

小川 ゆうか

震災学習に行っても良かったと思います。なぜならニュースでは、流れなかった裏の話や被災地に住んでいる人がなぜ笑顔でいられるかなど色々な話が聞けたからです。しかも茅原田さんの経験からのお話もすごく為になって興味深い話でした。なのでまたこのような機会があれば行って話を聞きたいなと思いました。

吉田 柊斗

今回の震災学習では、とても為になる話を聞きました。当時被災地では2週間はお風呂に入れなかったり、飲み物がないため、自動販売機を開けて皆で飲んだり、カインズホームに行っても長靴など沢山の物を貰っていたそうです。すごく大変だったんだなと思いました。

顧 広婷

震災学習を終えて震災時の状況や震災後の生活、茅原田さんから聞いたTVに報道されなかった貴重な話などが直接聞けて嬉しかったです。茅原田さんは震災時、情報(友人)を使って自分よりも皆(困っている人達)の事を1番に考え、物資を頼み送ってくれていた事に共感しました。震災から4年たった今、仙台に行ってみて想像していたよりも復興が進んでいましたが、まだまだ他の所では避難所や仮設住宅と写真等を見て分かりました。インタビューをしてみて「自分を信じる事」「努力が大事」と茅原田さんは言っており、特に印象に残ったのは「一瞬がすべてすべて一瞬」大変な時も一瞬の笑顔を写真に収める事なんだと言っていました。私は学習してみてすごく良い経験になったので良かったと思いました。

福島 陽夏



株式会社エフエム仙台を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 株式会社 エフエム仙台 』 『 浅野 彰信 様 』

II **取材者**

班長	相沢 彩弥	記録	武田 ナオミ
写真	武田 ナオミ	報告集	佐藤 宏祐



III **会社・団体の概要**

創立 1982(昭和 57)年 3 月 1 日 放送開始 1982(昭和 57)年 12 月 1 日

資本金 4 億 8 千万円

代表者 代表取締役会長 剣持文仁

代表取締役社長 西川 守

東北で初の民放エフエム局として 1982 年に開局、放送開始はこの年の 12 月。以来東北地区の基幹局として、地元宮城県内のみならず東北の各地、また、JFN（ジャパニエフエムネットワーク）加盟社の一員として全国に情報を発信しています。

IV **震災時の状況**

震災発生時は、本社から 10 分ほどのサテライトスタジオでの生放送中でした。ブース内のスピーカーが壁から外れて垂れ下がり、停電のために放送継続できない状況で、スタッフは本社に避難しました。

本社のスタジオでは緊急地震速報が鳴りっぱなしで、送信所が自家発電機に切り替わるまでの約 30 秒間は電波が止まってしまったと、技術部から話があったそうです。すぐに自家発電に切り替えて、本社スタジオで災害特別番組をスタートさせました。震度情報、津波情報、災害伝言ダイヤルの開始、戻ってくる社員による街のリポートなど、震災関連の特別番組を、24 時間生放送での対応を始めました。

停電によりテレビは見られず、インターネットは切断。電話の混線など大きく通信情報の混乱があり、唯一自家発電の回路が通っていたニュース室が気象台や関係機関などとのファックスのやり取りをする為の頼みの綱でした。

3 時半ぐらいに津波が押し寄せてくる時、唯一使えたテレビがニュース室のアナログテレビだったので、ファックスとテレビからの情報を随時ニュース室でまとめてメインのキャスターのところにに入れ替わり立ち替わりアナウンサーが入って、放送を続けました。

話を伺った浅野さんは 2～3 日家に帰れなかったそうです。



～震災時辛かったこと～

停電のため電気が使えない。その為ストーブ等も使えずとても寒かった。

～役立った物～

石油ストーブ、カセットコンロ、ラジオ、ろうそく、ラップなど電気が使えないので、電気を使わない温める物や情報を得る手段として役だったようです。

その他にも、ガソリンが手に入らなくガソリンスタンドが大混雑した為、普段から半分くらい入れておくの良いとのことでした。

V 取材を終えて

今回、震災学習を行い今まで知ることのなかった実際の被災者の方のお話を聞き改めて東日本大震災の悲惨さ、規模の大きさを痛感しました。そして、被災者の方の本音や意見を知り考え方や捉え方も見直す事ができました。

今回この貴重な体験を無駄にしないように今出来る防災を行っていかたいと思います。

相沢 彩弥

私は今回の震災学習で、仙台のラジオ局に行きました。ラジオ局ならではの悩みがありとても驚きました。自分が帰りたくても家に帰れないなど、リスナーさん達の為に情報を届けるのがすごいと思いました。

武田 ナオミ

株式会社エフエム仙台の浅野彰信様の話を聞いて、私は被災して家や家族を失くした人々も大変だと思っていますが、震災被害情報を休む間もなく放送する報道の立場の人々もとても大変だと思いました。しかも株式会社エフエム仙台は被害も他の局よりも大きいので報道をするのもすごく難しくとても苦労していたのだなと思いました。

私は今回の震災学習で色々な視点からみることができ、人と人との絆がとても大事だと知ることができました。ありがとうございました。

佐藤 宏祐

VI 参考資料

Date fm 株式会社エフエム仙台

<http://www.datefm.co.jp/about/>



宮城県の震災当時とその後の自衛隊の活動を取材して

平成27年10月28日

I 取材地 『 陸上自衛隊 仙台駐屯地 』

『 佐々木様、加藤様、小野寺様、
河野様、渡辺様、櫻田様 』

II 取材者

班長 今関 泰隆 記録 堀江 賢人
写真 今関 泰隆 報告集 酒井 俊輔



III 団体の概要

陸上自衛隊仙台駐屯地において東日本大震災の
の当時から今に至るまでの状況、活動を取材しま
した。

この駐屯地は宮城県仙台市宮城野区南目館1-1に所在
し、東北方面総監部が駐屯する東北方面隊の中核となる
駐屯地です。

1957年（昭和32年）11月、この地に駐留して
いた米陸軍から同地が防衛庁に移管され、南仙台駐屯地
として発足し、1960年（昭和35年）8月に統一さ
れて今に至ったとのことです。

現在は、平成23年8月に災害派遣撤収命令が出され、
災害派遣活動は行っておりません。しかし仙台駐屯地に
所在する東北方面音楽隊は、今でも各地で行われる各種イベントで大震災の被害を受けた地域
住民の方々に演奏を届けています。



IV 震災時の状況

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震
が発生、これにより発生した津波は想像をはるかに超える大津波となって東日本沿岸を襲いま
した。

1. 街が崩れた風景を見てどう思いましたか？

「どうしよう」「なんだこれは」「夢なのか」「瓦礫が凄い」「目の前の風景に唖然した」とそ
の場にいた女性隊員は津波が押し寄せた直後の状況を見て思ったと語っていました。

そして櫻田様は「自分たち自衛隊の出番が来た」と思ったそうです。

2. その後の自衛隊の活動について

～2-1 救助活動について～

地震発生直後、防衛大臣から救助命令が下され、陸上自衛隊が主に出動してヘリコプターや
ゴムボート等のあらゆる装備を駆使し、孤立した住民、瓦礫の下や車に入ったままの人を救助
する等の即時救援活動を行ったそうです。その後は行方不明者の搜索活動にあたり、時には被
害にあってしまった方の遺体を御家族に伝え埋葬地へと輸送する活動も並列して行っていた
そうです。

他には、被害にあった地域住民のために生活するために大切な「食事」「入浴」「給水」など

の物資を現地に届ける等の民生支援活動を行い、現地において被災住民のニーズなどを聞いて細やかな対応に努めたそうです。

～2-2 防疫・施設支援について～

時間が経過するにつれハエなどの害虫が多数発生したことから、消毒液の散布による害虫駆除を行い、衛生環境の改善に取り組みました。

また、トラック及びグラップル等の機械力とシャベルを駆使した人力により瓦礫や木を一つに纏めたほか、破壊された橋の近くに応急的な橋などを開設して、インフラの改善にも努めたそうです。

3. 自衛隊 音楽隊のことについて

当時の被災者は、「本来あるべきものがそこにある」「これからどうなってしまうのだろう」と不安な気持ちが多く募ってしまう心情でしたが、そのケアをするために東北方面音楽隊は各避難所等において演奏会を開き、多くの被災者の方々を元気づけたりして、中には「あの歌が聞きたい」「AKBのあの曲を…」という被災者の方々のニーズや要望に応じて演奏をすることもあったそうです。

4. これからのことについて一言

「これからも復興活動は続き、色々な問題や課題が待ち受けているがこれからの日本を守るのは学生である君たちです。しっかりこの日本を守っていくんだよ、頑張って」と語ってくれました。



V 取材を終えて

自分の夢は自衛隊員になりたいので、今回の話を聞けて、少しは自信が持てるようになりました。隊員の人たちに「次はキミ達が日本を守るんだよ」や「頑張ってるね」と言われました。もし自衛隊になれたら日本を守るように頑張ります。

今関 泰隆

今回自衛隊の方々に取材をして思ったことは、自分が今住んでいるところも場所も地域もたった一瞬の出来事で簡単になくなってしまふ、中には体の一部分が無い遺体もあったという話にとっても恐怖を感じました。

そしてもしそうってしまった場合に自分は何が出来るか、何がやれるのかを考えていきたいと思いました。

酒井 俊輔

今回の震災学習では私は自衛隊の皆さんから貴重な話を聞かせていただきました。

自分達が活躍する時が来たと言っていたのを残念がっていました、とてもそれが印象に残っています。

堀江 賢人

VI 参考資料

陸上自衛隊仙台駐屯地 (Wikipedia)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%99%E5%8F%B0%E9%A7%90%E5%B1%AF%E5%9C%B0>



仙台空港を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 仙台空港 』 『 菊地 美穂 様 』



II 取材者 班長 長谷部 優花 記録 太田 実玖 写真 牧野 翔司 報告集 吉野 匠

III 会社・団体の概要

宮城県中南部の海岸に近い、仙台市の JR 仙台駅から南南東 14km ほどのところに位置し、仙台空港アクセス線（空港連絡鉄道）で結ばれている。離着陸の際には、広大な太平洋と仙台湾沿いに続く砂浜や防砂林の松林、南北に流れる貞山運河、そして奥羽山脈に抱かれた仙台平野と市街地のビル群が一望の下になる。

出発ロビーや待合室の壁面を全面ガラス張りして照明の使用を減らす省資源化が施されているや、屋根 3 つの波型になっている点、出発ロビーや搭乗待合室などの行先案内表示機が反転フラップ式案内表示機（パタパタ）である点などの特徴もある。展望デッキは、屋上の「スマイルテラス」と屋内 3 階とがある。ターミナルビル中央部分のエスカレーターが集まる吹き抜けは「プラザ」と呼ばれ、中央の噴水の水を抜くと照明機能付きのステージに変わり、イベントが行えるようになっている。3 階にはエアポートミュージアム「とぶっちゃん」があり、旅客機のコックピットやビジネスクラスのシート等が展示されている。

IV 震災時の状況

震災時、当社事務所の天井が落下したが幸いにも 1 人の負傷者も出なかったのも直ちにロビーに出て負傷者がいないか、建物の内外に損傷がないかの確認をした。15 時 58 分、津波が到達。空港のターミナルビルの 2 階と 3 階に 1700 人ほどの人が避難した。津波が襲来する前に余裕をもって避難してきたのでパニック状態にはならなかったそうです。津波は 1 階の 3.02 メートル（現地調査報告より、津波の痕跡高さ 5.7m、浸水深は 3.4m と推測されている）の高さまで冠水した。震災直後の滑走路は一部陥没、液状化が発生した。津波が来たとき、車が 2000 台近く流されてきて、海上保安庁や民間の小型機・ヘリコプターなど計 67 機が津波によって被害を受けた。海の前にはたくさんの松林があったが津波により流されてしまった。2 日間空港に泊まり、売店のお菓子と 500 ミリリットルのペットボトルで過ごしたそうだ。

平成 23 年 9 月 25 日に仙台空港ターミナルビルが完全復旧し国際定期便が再開された。震災後の航空機の利用客については国際線については震災前の 7 割程度に推移しており、これは震災の影響によるものではなく、中国および韓国との国際関係悪化による減便、運休によるものと推察されている。国内線については LCC（格安航空会社）の就航新規路線（関西空港）等もあり震災前の旅客数を上回っているようだ。仙台空港周辺には、震災前には北釜、相野釜という 2 つの地区があったが震災後には他地域の集団移転が決定しており戻ってきてない。空港の復旧には 1 年かかるが仙台空港は半年で復旧した。仙台空港は復興のシンボルと呼ばれたそうだ。

3月16日、福島第一原子力発電所事故の影響を考慮して、アメリカ合衆国政府が在日米軍を含む自国民に対し、同原発から 50 マイル (80km) 圏外に退避するよう勧告したが、同原発から 80km の同心円上に位置する当空港に嘉手納飛行場に駐留するアメリカ空軍第 320 特殊戦術飛行中隊が航空自衛隊松島基地を経由して移動し空港の復旧活動を行ったそう。アメリカ空軍及び空港の保守作業を担当している前田道路が残骸を除去し、部分的な滑走路の確保後、アメリカ空軍特殊作戦コマンド用輸送機 MC-130P が、強行着陸で復旧用の機材や車両を輸送。空軍戦闘航空管制官がバックパクラジオ(可搬型無線機)で臨時の航空管制を確立し、空港機能を復活させた。以降、米軍はこの空港を使って 200 万トン以上の食料、水、毛布を被災地に輸送するなど、4月7日までアメリカ空軍・同海兵隊・自衛隊による日米合同救援活動で、授業でも習った「トモダチ作戦」の拠点として使用されたそう。

V 取材を終えて

空港から太平洋までとても近くて、津波が到達するのが早かったです。ビデオを見せてもらい実際の状況を詳しく見る事ができて良かったです。

長谷部 優花

震災学習で映像を見せてもらい、飛行機や車が一瞬にして流されたのを見て怖かったけど、その場にいた人たちはもっと怖い思いをしたのだと思います。幸い、仙台空港にいた人たちは無事でした。しかし、またいつこのような事が起こるかわからないので1日1日を大切にしていこうと思いました。

太田 実玖

震災学習をしてとても緊張し、他県ということで少ししか興味なかったけど、今日行ってとてもいい体験をしてこんな体験はもう二度とできないと思いました。

牧野 翔司

震災学習ということでインタビューをするとき緊張しましたが、色々なことがわかりました。又、地震や津波の恐ろしさを改めて知ることができました。とてもいい経験になりました。

吉野 匠



VI 参考資料

Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%99%E5%8F%B0%E7%A9%BA%E6%B8%AF>

NPO 法人 KIDS NOW JAPAN を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 NPO 法人 KIDS NOW JAPAN 』 『 佐藤 敏郎 様 』

II **取材者** **班長** 伊藤 晃大 **記録** 砂田 美緒里 **写真** 田村 梨茄 **報告集** 松本 佳蓮

III **会社・団体の概要**

KIDS NOW JAPAN は、東日本大震災直後から復興支援・まちづくりを中心に活動を開始したボランティアグループです。仙台を中心にその後、日本各地そして現在ではアメリカ・カナダまで活動を広げています。

KIDS NOW の名称は、きずな「絆」に由来しています。これからの未来を担う子供たちにとって、夢のある安全・安心なまちづくりを推進する決意を「絆」の一文字に込められたそうです。

IV **震災時の状況**

～ 3 月 11 日 当日はどのような状況でしたか～

震災時は、当時教師をしていた女川第一中学校の卒業式の前日だった。一年生と二年生は卒業式の飾りつけで一、二年生は全員学校にいたが、三年生は帰宅途中だった。揺れがあった後に学校近くの山にある町の避難所指定されている総合体育館に避難した。

～先生方の対応はどのような状態でしたか～

一年生、二年生は全員いるのがわかっていたので大丈夫だったが、三年生の安否確認が大変だった。三年生 92 人中 2 人安否確認が取れなかった。（1 人は亡くなり、もう 1 人はまだ行方不明）佐藤さんを含め先生方は、冷静な判断をしなければいけない状態であった。

～強い揺れの直後の状況～

想定外の停電になってしまったので校内放送は使うことができず学校全体に放送をすることができなかった。

～総合体育館に避難した後の中学生の様子～

親が迎えに来た生徒もいたが、職員の話し合いで体育館から帰さないほうがいいとなった。親の顔を見て「帰りたい」という子もいたしパニックになってしまう生徒もいた。そんな中、割れて落ちてしまった体育館のガラスの片づけを自ら手伝う生徒達の姿もあった。そんな姿を見て安心して帰る親もいた。

～総合体育館では～

総合体育館は避難所指定されていたものの寝具、食料などの用意はされていなかったもので、仕方なく女川第一中学校に戻り教室のカーテンを剥がしたりした。その時先生方の私物のクッキーなどを持ってきて総合体育館にいるみんなで食べた。それでも 1 枚を 5 人で分けるくらい



しかなかった。その後は町で一軒残ったかまぼこ屋さんが、残り物のみで作ったスープを差し入れしてくれた。

V 取材を終えて

避難場所といっても水や食べ物や布団などがなく支援物資が来るまでとても困ったと聞いたので、避難場所に布団や食べ物、飲み物を用意しておくべきだと思った。もしも地震があった時のために1人1人がバッグなどに布団や食べ物、飲み物を用意し、いつでも避難できる準備をしておいた方がいいと思った。

伊藤 晃大

震災学習で佐藤さんを伺うまで、私は東日本大震災の本当の怖さをわかっていませんでした。佐藤さんの話を聞き、その日の地震の大きさと揺れの長さ、津波の恐ろしさを知りました。パソコンで水がどんどん増えていく様子を見たときはとても怖さを感じました。貴重なお話をありがとうございました。

砂田 美緒里

取材して当時の状況が少しは頭に浮かべられました。当時は子供たちもパニックになって先生方もとても大変だったと思います。そんな中、冷静になり正しい判断をして子供たちを助けた事がとても素晴らしいと思います。卒業式の前日ということで、三年生は帰宅途中だったようで二名が亡くなってしまった事とても悲しく思います。学校に居た一、二年生は全員助かったみたいでとても良かったです。いつ何があるかわからないので、一日一日を大切に過ごしていきたいと思いました。

田村 梨茄

今回の取材で、実際に震災の被害にあった方のお話を聞くことができ、ニュース等では得られなかった被災地の人の声を直接聞いて感じる事ができて良かったです。そして私が取材して印象に残っている二つの事は「30cmも水嵩があれば命を落としてしまう」ということ「冷静な判断」が出来たことです。たった30cmの水でも溺れてしまうのはとても怖いなと感じました。佐藤さんも生徒と同じ1人の人間でパニックになってもおかしくないのに冷静な判断が出来て凄いと思いました。

松本 佳蓮

VI 参考資料

<http://www.kids-now.net/>

👉 KIDS NOW JAPAN

多賀城エリア



しらとり幼稚園を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 しらとり幼稚園 』
『 園長 菊田 義治 先生 』

II **取材者**
班長 桑原 万黎那 **記録** 酒田 愛
写真 須戸 李菜 **報告集** 田島 優花

III **会社・団体の概要**

しらとり幼稚園は、海の近くにある幼稚園で、自然とも触れ合えて、子供たちにはいい環境の幼稚園です。

また、先生方も優しく笑顔を心掛けて園児と接しているのが、よく伝わってきました。園庭も園内も広くつくられていて、園児たちもののびのび生活ができる造りになっていました。



IV **震災時の状況**

園児をバスに乗せ、14 時に出発し、各自宅まで送った後に地震が来た。

園庭にいた園児は、立っているのが困難で、近くのブランコにつかまり、揺れがおさまるのを待った。

延長保育などで、幼稚園に残っていた園児約 20 名と園長を含めた教員 6 名は幼稚園から歩いて 300m のところにある、「高砂中学校」へ避難した。その避難先の体育館で約 1500 名の中学生や非難してきた人々と一緒に 15 人が一晩を過ごした。

電気、水は一切使えないため、地域の人々はラジオを持ってきた。

地域の人々が持参していたラジオを聞いて今の状況が、津波予報が 6m から 10m になっていることがわかった。



園児たちは、誰一人泣く子はいなくて、むしろ落ち着いていた。ちなみに、15 人中、何人かの園児は普通に迎えが来て、中には水の中を這って迎えに来た親もいた。

15 人の中の 1 人だけは、2 日経っても保護者が迎えに来なく、母親が迎えに来る途中で津波の被害に遭い、亡くなっていたことが分かった。

それからまた 2 日後に、祖父母がその子の迎えに来た。

水道、ガスが完全に使えないため、トイレの水を流すのにプールの水を使い、飲食はしらとり幼稚園の人たちが避難していた箇所へ一人水 1 本と、カンパン 1 つが 20 : 00 頃に支



給された。

22:00 には、パンが支給され、何人かで分け合って食べた。

一人一つではなかったため、園児たちを優先に飲み食いさせ、パンは先生方で分けて食べた。

余震は1時間に3～4回はあった。

蒲生の海岸沿いにある家は、流され、土台しか残っていなかった。

今は、そこには人は住めなくなり、工業団地になる。

その海岸沿いには、まだまだ津波の傷跡も家もたくさん残っているが、人は誰一人いない。

V 取材を終えて

私は初めて自分の目で被災地を見に行き、胸が苦しくなることを聞いたり見たりしました。

ですが、4年前よりも今は復興が進んでいて、東北にも段々笑顔が戻ってきたので、もっともっと明るく温かみのある街に戻れるように、自分も募金をしたり、何か東北のためになることをたくさんしていきたいと思います。

田島 優花

私はこの震災学習で、命の大切さが本当によくわかりました。4年前に比べると、今はだいぶ復興も進んでいて、落ち着いていました。でも、所々震災の跡が残っていて、まだ完璧に終わったわけではないんだと思いました。早く復興できるように、募金などを積極的にしていきたいです。

酒田 愛

私は初めて被災地に行きました。しらとり幼稚園の人たちに震災時の話を聞いてテレビで見ていたのよりすごかったんだと、実感しました。家の土台だけが残ってるのとかを見て、とても衝撃的でした。

1日でも早く復興してほしいです。

須戸 李菜

私は、宮城県仙台市宮城野区にあるしらとり幼稚園へ行ってきました。アウトレットパークから徒歩で行きました。街並みを見ながら行ったので遠くとは感じませんでした。しらとり幼稚園についてから、震災時の話を聞かせてもらいました。その話を聞いて、大変だったんだと思いました。復興が進むように、私にもできることがあれば、進んでやっていこうと思いました。

桑原 万黎那



平成 27 年 10 月 28 日

I **取材先** 『 芳賀 正 様 』

II **取材者**

班長	鈴木 都斗	記録	室岡 亮祐
写真	森田 充	報告集	戸塚 佑介

III **取材先の概要**

仙台東部で農業をしていた芳賀さん取材しました。

芳賀さんは、現在農業はしていなく、地域の農業と町内の「まちづくり」に力を入れているようです。また、芳賀さんは町内会の復興部の責任者を務めていて、若い人から年配の方までが町作りに参加しているようです。

まちづくりとは街の復興だけではなく、地域の 1 人 1 人の人間関係をより深くすることです。

IV **震災時の状況**

震災時、芳賀さんの家の周りは約 2 m 以上の津波が来たようです。

芳賀さんの家の 1 階は水で全部埋まってしまう、家の中にある物がすべてだめで何かが何だかわからなくなってしまうようです。また、家の中ががれきや泥でいっぱいになってしまったので電化製品すべてが使い物にならなくなったそうです。

V **これからについて**

1. まちづくりとはどういうことか

まちづくりとは、今までよりも住みやすくすることです。

協力者や町の方々の意見や考えを尊重することが大切です。

2. 新しい田舎をつくる

新しい田舎づくりとは、今まで自分達でも知らなかった町のいい点を見つけ、安心して住めるようにすることです。

3. まちづくりをするにあたって必要なもの

息の長い事業なので、できる人ができる形で協力することが必要です。手伝える時間のある人が手伝うのが大切です。

4. これからの未来

若い人が未来を変える。

人は得意、不得意があるのは普通でみんな違うからこそいいものがある。

若い人は不可能を可能にするのができる力を持っていて、それを見守るのが大人の仕事である。

VI 取材を終えて

震災学習では改めて被災地の方々がすごく大変だったことがわかりました。

4年半経った今でも復興はまだ続いているので、みんなで協力して頑張っていたきたいです。自分にもできることがあればやっていきたいです。

鈴木 都斗

震災学習は自分達で取材をするなどと、とても大変なものばかりでした。ですが、自分の意見を積極的に出すことが大切だと学びました。

また、終わった時に達成感がありました。

4年半経ち、確かに家や道路は元通りになりましたが、まだ全てが復興したわけではありません。なので、僕たちができることを1つ1つやっていきたいです。

戸塚 佑介

今回の震災学習は自分にとってとてもいい経験を積むことができました。

被災地の方々の話を直接聞くことによって、今までの自分の気持ちを大きく変えることができました。

その気持ちをこれから活かしていきたいと思います。

室岡 亮祐

今回の震災学習では、自分の知らないことを知ることができて良かったと思います。

自分が思っていたより被災当時は深刻でした。

しかし、自分が見てきた被災地よりも酷い被災地もあると思います。他の被災地についても知りたいと思いました。

森田 充

VI



参考資料

この像は仙台市若林区荒浜に建立されたものです。11日に三回忌の法要と観音像の開眼式を行います。

慰霊碑は高さ1,7メートル、幅2,4メートルの黒御影石製で、慰霊碑には190名の犠牲者の名前が刻まれています。

<http://inforanger.tasukeaijapan.jp/report/130307-13/>

せんだいあらはまを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 せんだいあらはま 』 『 佐藤 善一 様 』



II 取材者 班長 百瀬 将太 記録 堀川 茅里 写真 門馬 拓未 報告集 林 隼也

III 会社・団体の概要

東日本大震災で津波被害があった仙台市若林区荒浜地区の農家がつくる農事組合法人。

各戸から農地を借り受け、一括して耕作を請け負う。30ha から 90ha まで田んぼを大きくして「ひとめぼれ」と「まなむすめ」の 2 品種を今年から本格的に耕作を始めた。ほかにも、ハウス栽培でミニトマトなどの野菜も作っている。

IV 震災時の状況

Q 震災後、どのような影響が生じて何を思いましたか？

A 津波後、死者が 183 名に上り海沿いの集落が荒浜小学校の校舎とわずかな松の木を残して消滅してしまった。今回取材をうけて下さった佐藤さんは、現実だとは思えない規模の大きい津波が襲ってきて、がれき等が散乱している光景を見て絶望感にさいなまれた。さらに、自分の土地の田んぼが津波により水浸しになり、もうダメだと思い諦めていた。また誰とも連絡が取れない状況が続き、佐藤さんは 2 日経ってようやく家族や近隣住民の安否を確認ができた。



Q 震災後の景色を見て何を思ったか？

A 田んぼが水浸しで近所の農家の方々は農業を続けることを諦めていたが、佐藤さんは前向きに振る舞っていた。しかし心の中では色々と悩んでいた。
砂浜の近くの松の木が沢山あったが、津波が 10m も来て、ほとんど流されてしまい現実ではないと思った。

Q 農機具が津波で流された後どのようにして農機具を手にいれたか？

A 国や仙台市から無償で七年間・2 億円分の農具を借りることができて耕作をしている。

Q 被災された後、一番嬉しかったことは？

A 当時小学生だった子たちがトマト狩りに来てくれたことがとても嬉しく、今年の春に卒業したこと。

V 取材を終えて

震災学習で宮城県仙台市にある農事組合法人、せんだいあらはま代表の佐藤善一さんを取材させて頂きました。最初は感情移入できなかつたら、空気を読めず発言してしまったらと緊張しましたが、佐藤さんのお人柄と丁寧なお答えのおかげで起きたことを想像出来ました。農具の費用が膨大にかかるということ、地盤沈下によって生じた様々な問題を聞いて震災の奥深さを痛感するものがありました。これからも震災で起きた出来事を忘れず、後世まで伝えられたらと思います。

百瀬 将太

今回の震災学習では、今まででは体験できない貴重な体験ができました。知っていた情報とは違うことが聞けました。ニュースに報道されていたこととは違う、その場にいた人しかわからない情報が聞けました。また、実際に津波にあった場所にいきました。元々家があった場所には家の土台みたいな場所があつて、ほとんど更地になってしまいました。ですが、小学校だけは残っていました。そのことが津波の怖さを物語っていました。

門馬 拓未

自然災害はとても怖いものだと感じました。しっかり建てられたものが水で流されてしまうなんて考えられません。実際に聞いて被災者のみなさんも現実だとは思わなかったと言っていました。私は今回の体験で真実と風化させない事が重要だと思いました。貴重な体験ができてよかったです。

堀川 茅里

今回、震災学習ということで佐藤善一さんから貴重なお話を聞かせていただきとても勉強になりました。正直訪問する前は津波のせいで農業ができなくなり、除塩をガッツリとしないと再開できないと思っていましたが、実際に話を聞いてみてほとんどしなくても大丈夫だと聞いて正直驚きました。今回貴重な体験談を聞いて被災された方々の話を私たちが後世に伝えていなくてとは思いました。

林 隼也



←荒浜小学校の今の様子
(動画)

←荒浜祈りの像
荒浜地区で犠牲になった方々のための慰霊碑と観音像

VI 参考資料

仙台荒浜の集落営農組合が法人化河北新報オンラインニュース

(http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201412/20141224_12057.html)

仙台市公式ウェブサイト

(http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/311photo/list_01/images/1-09_1.jpg)

井土生産組合を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 井土生産組合 』 『 鈴木 保則 様 』

II 取材者

班長 大澤 康太

記録 野村 琉河

写真 野村 琉河

報告集 小林 光希

III 会社・団体の概要

井土生産組合は宮城県仙台市中心部から南東部に位置しており、ここは江戸時代の藩政時代から仙台藩の台所として機能を果たしてきました。近くに伊達政宗が切り開いた貞山運河があり、ここでとれた農産物などの物流機能を果たしてきたそうです。水清く、流れも緩やかに太平洋にそそいでいて、その関係から海・川双方の魚が釣れたり、シジミも取れたりしました。また、秋になると広大な松林にはキノコがいっぱい。秋にはキノコ採り等楽しみの多い場所でした。しかし震災で大きく変わってしまいました。この農地も瓦礫で無残な状況でしたが、関係者他の支援によりこのように農地が戻りました。これからは少しずつ皆さんへの恩返しをすべく出来る所から創生して行きたいと考えているそうです。



そこで、先祖代々引き継がれて来たこの土地を、自分の代で荒らすわけにはいかない。あの豊饒の地に戻そうと、15名の有志でH24年12月に（農事組合法人）井土生産組合を立ち上げたそうです。一步一步確実に前に進んで、少しずつ稲作の耕作面積を広げています。更に、新規に整地された耕作地の状況を見極めながら畑作物の作付けも実施し、少しずつ品数を増やす等前向きに進めているそうです。これも全て行政・JA等、幾多の皆様による御支援によるもので、感謝の気持で一杯だそうです。これからお客様に喜ばれる安心で、安全な農産物を提供すべく適切な施肥管理、品質の高い農産物生産とニーズに対応した園芸作物生産に取り組み、地域性を生かした創意工夫をある農業を目指して行くつもりだそうです。



経営理念

- ・ 復興のシンボリック存在としてコミュニケーション再生の場にします
- ・ 安全で安心な農産物の生産、顔の見える購買、ブランド化を図ります
- ・ 若い担い手、女性の活性で持続的な組合、収益を確保します

IV 震災時の状況

震災当時は田んぼの作業をしていたら田んぼが波を打って揺れたそうです。鈴木さんはひとまず避難所になっていた小学校へ逃げ込んだのですが、建物の中がひどくて校庭に逃げたそうです。中には約 400 人位の人がいたそうです。外を見るとずっと先のほうの高さ 10m 位はある松の木の上から白い煙のようなものが見え、よく見ると津波の水しぶきだったそうです。その水しぶきが見えたので二階に逃げ込んだのですが逃げた直後に一階のところに津波が来たそうです。地震が起こった日はとても寒く、小学校にあった服や紙などを使い寒さをしのいだそうです。震災の津波で塩分をたくさん含んでしまった土は、一回水を入れて流すといった除塩作業を繰り返して土を洗ったそうです。



V 取材を終えて

今回の震災学習で習ったことは、とても勉強になったし、復興に向けて、被災者の本音が聞けたので良かったし、とても良い経験ができました。一日でも早く被災者の皆さんが自分の家に戻れることを祈りつつ、震災学習で学んだことを進路や今後の生活に役立てていきたいです。

大澤康太

今回の震災学習はとてもいい経験になりました。ニュースでは語られなかった被災者の方々にしかわからない悲惨な思いを聞くことができました。実際に経験されたお話で、こうしたほうがいいなどアドバイスをたくさんいただいたのでそれを踏まえて関東のほうで震災があってもそのことを思い出して慌てず行動していきたいです。できればもっとお話を聞きたかったです。

野村琉河

今回の震災学習ではいろいろなことを学びました。まず、実際に現地に行って取材をするということが初めてでした。被災地は本当に何もなくてびっくりしました。そこには震災の爪あとも残っていて、とても衝撃を受けました。例えば津波の影響により、家の根本のコンクリートだけが残っていて改めて 3.11 の恐ろしさを知りました。私はこの震災学習でたくさんのことを学び、震災がどれだけのすごさか感じることでよかったです。

小林光希

VI 参考資料

井土生産組合 <http://www.idoseisan.net/>

高砂中学校の震災後の取り組みを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 高砂中学校 』
『 山田 威彦 校長先生 』

II **取材者**
班長 宇野澤 夏奈 **記録** 木藤 亮太
写真 関口 健太 **報告集** 三戸 朱理



III **会社・団体の概要**

宮城県仙台市宮城野区にある高砂中学校に伺い、震災当時から現在に至るまでの活動を取材しました。

1947 年 4 月 1 日に設立された。

仙台市東部の田園に位置していたが人口が増加し、住宅地として発展している地域である。学区内には仙台港や工業団地が含まれている。

IV **震災時の状況**

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震は想像をはるかに超える大津波となって東日本沿岸を襲いました。

▽高砂中学校の受けた被害

津波によって校舎の一階は 30 cm ほど浸水。そのため、避難所として使われたのは二階からだったそうです。

当時の生徒 621 名中、50 名を超える生徒の家が全壊。

校庭や体育館などは津波の影響で浸水し、その後多くのヘドロや沢山のゴミなどが残ってしまった。

▽高砂中学校周辺での被害

高砂中学校の周辺には中野小学校があり、私たちはその小学校を見るために車で移動しました。

その道中で様々な津波の爪痕を見ることが出来ました。

津波で壊れたままのガードレールは交通事故があったかのように曲がったまま残っていました。家やアパートなどは画像(1)のように窓ガラスが割れて家の中が散乱したまま残っているものがまだ沢山あり、驚きました。

中野小学校は地震や津波の影響で現在は中野小学校跡地になっています。(画像(2))



画像(1)



画像(2)

▽高砂中学校で起きた奇跡

高砂中学校には 3.11 当時のものや全国の学校から届いた支援物資や応援メッセージなどが飾れており、その中に津波によって茨城県の沖に流されていたボールが一年後、高砂中学校に返却されました。

画像は実際に返却されたボールです。



V 取材を終えて

今回の震災学習で初めはとにかく不安で、変なこと言ったらどうしようと思っていましたが、実際はみんな震災のことを伝えたいという気持ちが強いことがわかりました。今回の取材を通して、私たちからもこの現実を伝えられるように、この日のことを忘れないようにしたいです。

宇野澤 夏奈

今回、震災学習をしてみてテレビなどでは聞けない生の話を聞けて良かったです。震災学習を通して、今まで自分が知らなかったことを分かれてよかったです。この震災学習で分かったことをこれからは、色々な人に伝えていきたいです。

木藤 亮太

今回、震災学習をしてみて色々なことが分かりました。また、改めて地震、津波は怖いなあと感じました。ニュースでは報道されていない、知らないことを新しく知れて良かったです。

関口 健太

今回の取材を通して、テレビや新聞では知れないことがまだ沢山あるのだなと思いました。また、未だに当時のままの建物などが残っていて言葉では言い表せないような気持ちになりました。

私は今からでも自分が出来ることがないかを探し、実行していきたいです。

三戸 朱理

VI まとめ

もし私たちが大きな地震に巻き込まれた場合は、慌てず自分の安全を確認して自分の命は自分で守る「自助」、次に人の助けになる「共助」を意識して動くことが大切ということを学びました。また、災害には想定外の出来事が沢山起こります。「想定外を想定」し、一つの情報などに左右されず、しっかり状況を見極めることが大切です。

VII 参考資料

▽ウィキペディア〈高砂中学校について〉

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E7%A0%82%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1>

株式会社太平洋フェリーを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 太平洋フェリー 』 『 鈴木 孝朗 所長 』



II 取材者 班長 宮野 琉奈 記録 船戸 小緒里 写真 金子 つくし 報告集 金子 つくし

III 会社・団体の概要

自動車やその他車両、または一般旅客の航送等の旅行業をフェリーで行っている太平洋フェリーに取材しに行ってきました。この会社は日本最大級の大型カーフェリー 3 隻を保有し、苫小牧・仙台・名古屋の約 1,330 キロメートルを結ぶ定期航路を運航しています。年間 25 万人のお客さんと車や農産品・工業製品などさまざまな物資を積んだ貨物車両を、安全、正確、快適に運ぶ海上の公共交通機関として重要な役割を担っています。

特に、東日本大震災以降は、就航地である東北地区へ復興関連貨物を輸送したそうです。

IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震による大津波が東日本沿岸を襲いました。

震災当時、10 時に苫小牧港から帰港。予定では 19:40 に出航予定であったが、津波を避けるために 15 時に沖に避難し無事だった。普段であれば乗組員は出航前の休憩時間であったが、翌日の新船お披露目のための準備に多くの作業員が残っていたため津波対応に多くの人員を割けたのは不幸中の幸いだったという。

残っていた作業員 42 名はターミナル屋上に避難し、その時の状況は満タンの風呂に使ったときにあふれかえった水の様だったようです。

隣の石油会社が爆発しそこから逃げてきた 48 人の人たちと一緒に 2 階にある待合室で夜を過ごし、食料は同じく 2 階にある売店にあったものを食べたようです。



震災後の状況

翌朝、解散したが車が津波に流され帰りは全員歩きとなった。

ターミナルに戻ってきたとき、売店は食料を求めてきた人々により売店にあった食料は知らぬ間になくなってしまっていた。

電気やガスもなく、テレビ・ラジオが聞けずに原発の情報は震災後に知り、鈴木さんの住む家では電気類が使えるようになったのは 2 週間後だった。水もなかったため、風呂やトイレが

使えず不便だった。

27日には港にフェリーが入り、支援物資は3～4日で届きました。この震災からラジオや懐中電灯は必要だということが再確認された。

V 取材を終えて

震災当時は車などが流されてとても酷い状況でした。しかし今は、震災の跡が残ってなくて綺麗でした。鈴木さんは、震災時の話をとても真剣に話してくださって、その時の大変さがとてもよく伝わってきました。私は震災学習を通して自然災害の怖さと被災しても前向きに生きている人達を改めて知り、実感することができ、私にとってすごく勉強になりました。

宮野 琉奈

私は初めて被災のあった所へ行って、動画や画像を見たときよりも強い恐怖が伝わってきました。道中には津波の痕跡があり、これはただ事ではないと思いました。さらに、被害状況を見ることができとても貴重な体験が得られました。

船戸 小緒里

鈴木さんの話を聞いて災害は自分が思っているよりも大袈裟に考えたほうがいいと思いました。地震が来てもうちは大丈夫、と思っていました。家の周りには海や山はありませんが、私は私の家族のために災害に警戒しようと思いました。

金子 つくし

VI 参考資料

太平洋フェリー公式 HP <http://www.taiheiyo-ferry.co.jp>



キンビール工場を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 キンビール（株）仙台工場 』
『 関根 久仁雄 様 』

II **取材者**
班長 板倉 武耶 **記録** 豊岡 隼人
写真 村上 龍太郎 **報告集** 菅沼 柊平

III **会社・団体の概要**

1923 年に、東洋醸造と合併しキンビール仙台工場が建てられた。

1983 年に宮城野区の仙台港に移転し、活動開始。

キンビール仙台工場の従業員は 159 名、パートナ会社 262 名。(2015 年 4 月時点)

敷地は 32 万 1573 m²、建物は 10 万 986 m²。

IV **震災時の状況**

① 2011 年 3 月 11 日震度 6 強の地震が襲い、敷地内のタンクが 4 基倒壊し、高さ 8m の津波が襲いました。だが、キンビール仙台工場は 5 m の盛り土をしていたので、実際に来た津波の高さは 2 m 位だったそうです。その夜は停電し、水道も使えなくなってしまったそうです、だけどキンビール仙台工場には、備蓄していた乾パンや発電機があったので携帯電話などの充電などは出来たそうです。年に一度訓練をしていたため、工場の屋上に避難でき、犠牲者は 1 人も出ませんでした。その後再活動の準備を開始。

② 復興

敷地内に大量に散乱した瓶や缶は、全て手作業で仕分けし片付けたそうです。また工場内にヘドロが溜まっていたそうなのですが、まだ水道が使えなかったため、凄く大変だったそうです。努力の甲斐もあり、2011 年 9 月に再稼働し、2011 年 11 月 2 日に震災後、初出荷をしました。

※ 「キン絆プロジェクト」として被災三県に復興支援金として 60 億円を援助。

V **取材を終えて**

実際に避難した屋上を見せて頂き、けっこう遠くに見える海から津波が来たのだと思うと、ゾッとしました。ビール工場には津波がここまで来たということを示す物があり、ここまで津波が来たのかと思うと、とても驚きました。

村上 龍太郎

今回話を聞くまで、実際に被害にあった人がどう思っているのか全然知りませんでした。だけど、今回キンビール仙台工場に行き、被害を受けた人の話を聞き、震災の時に撮られた動画などを見て、そこで何があったのかを知りました。今回、話を聞いていろいろなことが知れたのでよかったです。2011 年の震災の時、僕は被災地の人々に対して何もすることができませんでした。もし、今度大きな震災があったときは、少しでも被災地の人々の役に立てることがしたいです。

菅沼 柊平

今回の震災学習で思ったことは、絆が深いということです。埼玉などはあまり被災してはいませんが、東北地方は津波など、多くの被害を受けました。そのことについて、麒麟ビールの関根さんが多くのことを教えてくれました。工場内で起こったこと、震災直後のこと、震災後の工場内の写真、工場内で復興させるために行ったこと、多くのことを教えていただきました。その中でも1番印象に残っていたのが、工場内の全職員、工場見学に来ていたお客さん、近隣住民の方々を合わせても1人もけが人や死者が出なかった。年に一度、避難訓練をしていたことが功を奏したと言っていました。津波が来て、避難しているときもしっかり協力しあうことができました。その1人1人がしていたことが少しでも大きな存在だったのだなと思いました。自分たちがもし、その場にいたらできなかったと思います。しかし、東北の方々は協力し合い、1日1日をしっかり生きている感じがとても強かったです。今回の震災学習で僕は協力し合うこと、絆が大切なこと、相手を思いやることを学びました。とてもいいことを知れてよかったです。

豊岡 隼人

今回の震災学習で、何気なく過ごしている1日がとても大切なことが分かった。埼玉は震度5弱という被害を受けましたが、東北はこれ以上の地震、それに津波が来て家などいろいろなものが崩壊したと思うと、とても切なく感じました。東北では、死者や行方不明者、帰宅困難者などたくさんいて、とてもつらい人がいたのだと感じました。震災学習で伺った、麒麟ビールの関根様の話を聞いて、震災を受けた時はとても苦労したのだなと思いました。しかし、麒麟ビールの人達は全員無事で、その近所の人たちも無事ということがとてもすごいと思いました。年に1回、消防士がいる避難訓練を実施しているからかなと思いました。東北の人達に自分は何もできなかったけど、東北に行き話を聞いて何気なく過ごしている1日を大事に過ごそうと思いました。

板倉 武耶



東洋製罐を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 東洋製罐 』
『 照井 洋美 様 』

II **取材者**
班長 大川戸 陸 **記録** 小川 健司
写真 樋口 智士 **報告集** 加藤 康大

III **会社・団体の概要**

金属、プラスチックとそれらの複数材料を素材とした包装容器の設計・開発・製造・販売、食品関連機械、包装システムの販売及び技術サービスをしている所です。



IV **震災時の状況**

〈建設の被害〉

工場の中に車があったり、缶や書類が散乱していた。大地震や津波の影響で、壁に穴が開いたりしてしまったところもあった。製造ライン(機械)は津波による浸水で錆び付いてしまい、さび落としは手作業で行った。

社員の協力により機械を直してからまずはじめたのが「蓋」の生産だった。これは医薬品用容器の蓋であり、最優先で復旧するべきと判断し、7月に稼動となった。

〈質問内容〉

Q 1 大震災前に想定して行われた訓練を行いましたか？また、実際に役に立ちましたか？

A 10月に火災、地震などの訓練はしていたが、役に立たないところと役立ったことがありました。訓練後は反省を行い、有事に備えていました。訓練では話したりしないが、実際はパニックになってしまい、指示を出しても聞こえないほどでした。そのため、拡声器を使い指示をしたりするなど工夫をしたそうです。地震の時に社員が2か所に避難してしまいました。その時に必要だと思ったのは、地震や津波についての情報で、携帯を使用しました。携帯のおかげで10mの高さの津波が20分後に来る事がわかり、工場から700m離れた空き地に避難してから、近くの小学校に移動しました。避難できたおかげで津波の恐怖がなくなり、安心したといっていました。

Q 2 工場を直すのにどのくらいの費用がかかりましたか？

A 全国14か所ある工場では、22年度から25年度の間に総額99億9500万円ほどかかりました。

Q 3 大震災後の対策は何をしていますか？

A 工場の周りに防潮堤(高さ4m)を作り、津波の侵入を防ぐことができるようにしました。次に、1階にある事務所は、震災前は、靴とスリッパを使い分けをしていたが、震災後はすべて安全靴での行動になりました。

V 取材を終えて

はじめはきちんと挨拶できるか、質問の答えをしっかりとメモできるかなどいろいろ心配でしたが、協力者の方がとても優しく話してくれ、徐々に緊張感がほぐれて質問などしやすくなりました。最初は工場の地震・津波被害の動画を見て、大地震や津波の影響が想像を超えていたので辛く、もし自分がそんな体験をしたらと考えると怖くなります。

大川戸 陸

僕達が住んでいる所はあまり被害がありませんでした。被害がわずかでも復興させるのにすごい時間がかかるのに、大変な被害を受けてもあきらめずにやり続けている方々にどんな形でもいいから支援をしたいと思いました。

小川 健司

僕たちが住んでいるところはあまり被害がありませんでした。すごい被害を受けて、復興させるのにすごい時間がかかるのに、それでもあきらめずにやり続けている方々にどんな形でもいいので支援をしたいと思いました。

加藤 康大

今回、震災学習をしてみていろいろなことがわかりました。津波で工場が損壊し、機械についた泥や錆落としても大変だったと思います。震災前に行っていた訓練は地震についての対策はできていたものの、津波についての対策はできておらず、役に立ったもの立たないものがあったそうです。津波の被害が想像より大きかったけど、社員の協力で工場を直し、再開できたのがすごいと思いました。

樋口 智士

VI 参考資料

東洋製罐株式会社ホームページ URL<https://www.toyo-seikan.co.jp/info/domestic.html>



みやぎ産業交流センター（夢メッセみやぎ）を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 夢メッセみやぎ 』

『 課長補佐 諸積 毅行 様
総務課 珍田 沙保里 様 』



II 取材者

班長 服部 滉太 記録 小幡 啓人
写真 谷口 奈菜 報告集 猪瀬 みなみ

III 会社・団体の概要

夢メッセみやぎは、来たる 21 世紀を見据えた産業と貿易の振興を目指して、宮城県が 1995 年 10 月にオープンしました。仙台塩釜港仙台港区に隣接し、仙台東部道路・三陸自動車道のインターチェンジにも近接するなど、海と陸の両面においてアクセス性が高く、これまで大規模展示会をはじめ、コンサート、各種大会など様々なイベントが開催され、産業の発展・交流が培われてきました。これからもヒトの夢を紡ぎ続けていくそうです。

IV 震災時の状況

- Q 震災の時の大きな津波を見てどう思ったか。

A 夢メッセに押し寄せてきた津波は、思ったよりは高くはなかった。しかし、津波とともに流れてきた土砂や車を見て恐怖が大きくなったそうです。
- Q 車が津波に飲み込まれるのを見たとき、どの様な思いだったか。

A ゆっくり津波が来たのに、思った以上に水圧が強かった。車が水につかり、バッテリーがショートしたためクラクションが鳴ったり、車のガソリンに引火して火災が発生したりしたため、怖がる人もいた。
- Q 前日に避難訓練を行っていたそうですが、前日の避難訓練と比べて、震災時の動きや時間はどうだったか。

A 実際は、前日ではなく定期的に避難誘導訓練・消火訓練・通報訓練をしていた。（この訓練は、年に 2 回行っているそうです。）訓練時には、小さな子供やお年寄り、妊婦さんや体の不自由な方、病人なども想定しているので、訓練時の所要時間は 15～20 分だった。しかし、震災当日は、15 分ほどで避難が完了していたそうです。当日、津波の時は、夢メッセ会議棟とアクセルビルの屋上（当日開催の催事会場から近い会議棟屋上は、体の不自由な方等が優先されたそうです。）に避難した。
- Q 夢メッセの中で震災前と変わったことは何か。

A 当時、一階は事務所があったため水に浸かり、書類などすべてダメになってしまった。そのため、今は事務所が二階になった。アクセルビルは、舟をモチーフにして作っていたため、ドアなどもとても頑丈で水はほとんど入ってこなかった。夢メッセでは、波の向きにより水が入るところと入らないところに分かれていた。
- Q 震災から今の状況になるまでどのくらい時間がかかったか。

A 津波の被害にあった所は、建物所有者の宮城県が費用を負担して修復した。アクセルビルは一か月後には電力が供給されていた。（アクセルビルは、二階に電力室があるため、受変電設備が無事だった）夢メッセ本館の復興には 1 年 4 か月かかった。アクセルビル 1・

2 階は支援物資等の倉庫として使われていたため、少し復興に遅れが出た。被災翌月に電気は供給されたが、夢メッセ西館が完全に復興したのが 2 年 4 か月後のこと。

6. Q 未だに連絡が取れない人はいるか。

A 幸いにも行方不明者もなく、無事、全員と連絡がついた。

7. Q 津波で流されてきた車の処理はどうしたか。

A 防風林に車が引っ掛かって 4 台くらいの壁となり、5~6m の高さまで積みあがっていた。国道は国が、県道は県が、自分たちの敷地は自分達で片付けた。ただ、アクセルビルは県のものだったので県が片付けた。

8. Q 震災時 700 人近くもの人達は避難できたのか。

A 夢メッセとアクセルビルを使い、問題なく入りきった。会議棟には 1,000 人、アクセルビルには 2,500 人入れる。被災当日は雪が降っていたため建物の中に入ってもらったものの、トイレの水洗機能が停止したため、後片付けが大変だった。また、アクセルビルには非常用物資などはなかったため、近くのホームセンターから布団や赤ちゃんのおむつ、ミルクをもらいに行った。(後日精算、支払いをした)

9. Q 夜間の盗難について。

A 近くにある大型電気店などでは、夜になるとレジのお金や家電製品などを盗みに来ていた人もいた。服装は汚れもなく、自転車で着ていたもので津波をかぶった地域外から来たと思われる。また、供給がなくなりガソリンが不足する中、バールやポリタンクを両手に、放置車両から勝手にガソリンを回収してまわる人たちが来た。その後、他県警車両が夜間パトロールを行ってくれるようになったが、外では亡くなった方々からお金を取る人もいた。

V 取材を終えて

私が震災学習に行って思った事は、パニックの中でも誰かが中心となり、みんなをまとめて避難させるなど、周りの状況を素早く判断し、誰 1 人被害者を出さなかった事に感動しました。実際の写真などを見せてもらい、今の場所と比べてみると、こんなところに車が積み上がっていたりと想像できない事ばかりでした。実際の話を聞き、心が痛くなる話も多くて、恐ろしいと思いました。

でも、みんなの協力があり復興することができて、被災時の面影も無いくらい綺麗になっていてびっくりしました。

私が 1 番に思ったのは、いつなにが起こるか分からないので、地震などに向けて対策を準備する事と、1 日を大切に生きる事だと思いました。とてもいい経験になりました。

谷口 奈菜

僕は、最初はどのような人が話をしてくれるのか不安でしたが、会ってみるととても優しい方で、自然と緊張も抜け、しっかり話を聞くことができました。

本当の善悪や人の怖さなど、ニュースでは報道されない事も知れて、とても貴重な経験を得ることができました。これから、毎日 1 日 1 日が無駄にしないよう生活していけたらと思うような震災学習でした。

小幡 啓人

私が震災学習に行って話を聞いて思った事は、実際の震災の現場へ行く時に、テレビなどで見た事と似ているのかと思っていましたが、いざ本当に話を聞いてみると、テレビでは報道していない全く違う話や、実際の体験の話を聞いてびっくりしました。津波の恐ろしさや震災

時の状況、震災時の風景などを詳しく知る事が出来、とても良い経験になったと思います。

猪瀬 みなみ

僕は、3.11 の時はまだ小学生でこの大きな地震は、初めての経験でした。今では高校生になり復興のことなどをテレビで見るようになり、復興が進んでいるかなどについて考えるようになりました。そんな中、震災学習の取材を行い、今まで分からなかった津波の恐ろしさや、避難した後の苦労などを知ることができて、震災学習をしたことに誇りを持てた様な気がします。この経験をこれからの自分の将来に生かしていきたいと思いました。この様に思えるようになったのも、このような企画を立ててくださった先生方のおかげですし、何より感謝しなければいけないのは、見ず知らずの僕達を受け入れてくださった、夢メッセの諸積毅行様、珍田沙保里様を始め夢メッセの皆様です。この度、僕達のために取材させていただきまして誠にありがとうございました。

服部 滉太

Ⅵ 参考資料

夢メッセで頂いた資料



石巻エリア



街づくりまんぼうを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 街づくりまんぼう 』
『 大森 盛太郎 様 』

II **取材者**
班長 渡辺 美帆 **記録** 神山 碧
写真 千葉 貴斗 **報告集** 大川 陽和

III **会社・団体の概要**

街づくりまんぼうは、「人の光が街をかえる」を営業概念として、中心市街地 52 ヘクタールの商業活性化を中心とし、広く公益的な立場のもとに、「まちづくり」「産業振興」「人材育成」を果たし、石巻市全体の活性化のために力を尽くしている会社です。

IV **震災時の状況**

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震は大津波となって東日本沿岸を襲いました。

大森さんは震災時、車で移動中でした。車の中にも聞こえる地鳴りがしたそうです。その後、お客様や石ノ森萬画館が心配になり、萬画館に向かいました。何回も自然災害などで訓練していたので、適切な避難行動が浮かび、避難案内が実行できました。結果的に萬画館から被災者がでなくて、本当によかったとおっしゃっていました。

また地震の後、6～7m ぐらいの津波が入口を破り一気に流れ込んできて、1 階が完全に浸水してしまいました。押し寄せた波は激しく、新しい家や何十トンもある船などが流れてきて、橋にぶつかり島のようにになっていたそうです。



震災後の状況

震災で流されて残った建物がいくつかあり、そのまま残そうという意見がありましたが、それらを見ると震災のことを思い出してしまい、夜も眠れないと言う人々もいたそうです。そのため結局は壊してしまいました。ただ残すわけではなく、どのような形で残すのか考えることが大切だとおっしゃっていました。

被災地の今後

復旧しても決して元に戻らないが、前と同じでは意味がないので、元に戻すのではなく、前よりもよりよくして、次につながる街にしていきたいとおっしゃっていました。

震災後は、若者が色々なところから集まってきて、中には移住する人や、お店を出して商売を始める人がいて、活気も出てきているそうです。



これからは、イベントなどで人を集めて、人と人の交流を深めたいとおっしゃっていました。

そのためにも色々な人の意見を聞き、自分たちだけではなくみんなで考え、行動に移すことが大切だそうです。

V 取材を終えて

私は今回の震災学習で、行く前の調べでは「へーそうなんだ」みたいに上辺だけで分かったような感覚でいました。しかし、実際に現地へ行き、被災者の生の声を聞いて、私の東日本大震災への思いが大きく変わりました。津波によってかなり遠くから萬画館に漂着した人までいるそうで、本当に大変だったのが窺えます。テレビで見ているだけより、実際に被災者から聞いた方がより衝撃的だしより間近に感じることができました。すごい経験になったと思っています。

渡辺 美帆

今回の震災学習で最初は「行きたくないな」と思い、嫌々ながら下調べなどをしていましたが、色々と調べているうちにすごく大変なことがあったのだと理解し、もっと話を聞いてみたいと思うようになりました。そしていざ話を聞いてみると、遠くから流されて来た人や、目の前を流されていく人などの話を聞き、とても大変なことだと思いました。今回の震災学習を通して、このような経験をした人がいることを決して忘れてはいけないのだと思いました。

神山 碧

僕は、今回の震災学習を通して人の命の重みと、復興にあたって頑張っている被災者の方々の思いを感じ取ることができました。僕の行った事業所の街づくりまんぼうさんは、石ノ森萬画館をやっていて、漫画の世界を体験しつつ、震災の被災状況を確認することが出来ました。聞いた話の中で記念館の一階が、ほぼ浸水してしまったということを聞いて、自分達が立っていた所まで津波の水が来たということにすごく驚いたのと同時に、津波に対する恐怖を覚えしました。震災学習で学んだことは、今後の自分にも役立てていきたいと思います。

千葉 貴斗

今回の取材を通して震災を身近に感じることができました。大森さんの話を聞いて、震災のすごさや恐ろしさを改めて知ることができました。また震災の写真を見せてもらいましたが、たくさん家や車、木などが流されている写真はとっても壊滅的で衝撃を受けました。萬画館にあるグッズが流されている写真もありました。萬画館にとってとても大切なグッズが流されてしまうなんて、辛いと思います。今回は貴重な体験ができてよかったと思います。

大川 陽和

VI 参考資料

街づくりまんぼう

<http://www.man-bow.com/>



仮設日和が丘第二団地を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 仮設日和が丘第二団地 』
『 杉山 賢太郎 様 』



II **取材者**
班長 高橋 風花 **記録** 大谷 智恵美
写真 石黒 彩花 **報告集** 飯野 ひかる

III **会社・団体の概要**

地震・水害・山崩れなどの自然災害などにより、居住できる住家を失い、自らの資金では住宅を新たに得ることのできない人に対し、行政が貸与する仮の住宅。

日和が丘第二団地は、石巻市に住んでいる人だけが住むことができる。

IV **震災時の状況**

< 3 月 11 日震災当時 >

午後、自宅にいたところ地震がきた。

杉山様は消防団の副団長を務めており、震災発生直後は消防団の仕事をするために外出した。仕事が片付き、自宅に帰る時に津波がくると聞いたので、山の方に車で逃げた。車のサイドミラーで後ろを見たときにはもう波が 15m もあった。あと 3 秒遅れていたら津波にのみ込まれていたかもしれないと思った。山に着いた頃には、もう家などが流されていた。津波は 1 回目よりも 2 回目の方が大きかった。

< 仮設住宅の暮らしで一番大変なこと >

真冬はとても寒く、ご飯は奥さんが亡くなってしまい作れない為、頼んでいる。一人暮らしの為、寂しい。

< 地震があってから何日でご飯が食べることができたか >

1 日目は神社にいて、2 日目は近くの学校の体育館に行き、それから 2 ヶ月半過ごした。

初めの頃は 1 日いちご 1 個や、バナナ 1 本しか食べることができず、酷いときにはソーセイジ 1 本を 4 人で分けて食べていた。そんなときはとてもお腹が空いていて、水を沢山飲んでお腹をいっぱいにした。

10 日目でおにぎりを半分食べることができ、1 週間たっておにぎり 1 個、ジュース 1 本が配給された。2 週間たってからしっかりとものが食べることができるようになった。

人によっては 3 日目で食べることができた人もいて、場所によって違った。

< 電気はいつから使えるようになったか >

場所によってばらばらだが、3 月末頃には使えるようになった。

それまで携帯電話が充電できなくて使えず、家族にも連絡がとれず大変だった。

V 取材を終えて

私は、震災学習で最初はとても緊張しましたが、訪問先の方がとても優しくかったので気楽にお話を聞くことができました。

一番印象に残っているお話は、震災後ちゃんとしたご飯を食べることができず、おにぎりをみんなで分けて食べたり、ソーセージを4等分にしたりしていたということです。それを聞いてとても驚きました。

取材のあと日和山に連れて行ってもらいました。被害が結構あって建物などが無いと聞いていましたが、思っていたよりも全然なくてびっくりしました。

今までテレビでしか見たことがありませんでしたが、実際にお話を聞けてよかったです。

大谷智恵美

私は震災学習に行ってみて、沢山のことを学びました。

テレビでしか見たことがなかったので、実際お話を聞いて真実を知ることができました。一番驚いたことは、ご飯が1週間くらいバナナを4人で分けあったりしていたことです。とてもお腹が空き、水を沢山飲んでいたのでありますが、私にはとても考えられないことで衝撃を受けました。

地震の大きさは、体験したことのない揺れだったと聞いたのでびっくりしました。その後の津波の大きさは、15mと聞いて想像もできませんでした。

もし、私が震災にあっていたらどうなっていたかを考えてみました。家族などに連絡がつかなかったと聞いて、私なら耐えられないなと思いました。家族と一緒に今過ごしていただけることの幸せに気付くことができました。沢山のことを知ることができてよかったです。

石黒彩花

震災学習でインタビューをすると聞いて、私は初め相手の方が怖い人だったらどうしようと思いととても緊張していました。ですが、実際に訪問先へ行き、話を聞き始めたら全くそんなことはなく、震災のことについて今のことや、当時の話を沢山聞くことができました。

話を聞いた後には、日和山にも連れて行っていただき、震災についての話をさらにもっと深く聞くことができました。

今までテレビなどでの情報しか知りませんでしたが、実際に現地へ行くことで初めて知ることが沢山あり、良い経験になりました。

今回取材を受けて下さった杉山様、本当にありがとうございました。

高橋風花

私は現地に行くことができませんでしたが、班の人から話を聞いて、このように報告をまとめています。今、私が普通に生活できていることはとても幸せなことなのだと思います。

そして、これから生きてくうえで1日1日を大切に生きていこうと思います。

飯野ひかる

VI 参考資料

石巻市役所ホームページ

<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/>

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 一般社団法人 みらいサポート石巻 』
『 佐藤 茂久 様 』

II **取材者**

班長	藤村 れいら	記録	大野 綾華
写真	西村 ハルミ	報告集	サトウ 杏奈

III **会社・団体の概要**

地域と共に、石巻の未来をつくっていく活動を行う団体です。
地元の高校生と一緒に防災活動や減災活動の実施や、石巻の中心市街地飲食店の賑わいの創出・活性化を目的として実施されたイベントの参加店を紹介する活動を行っています。



IV **震災時の状況**

当時、佐藤さんは小学校に勤めており、その小学校で被災したそうです。
海から 700m ほど離れたところに小学校があり、そこへ津波が車や家、人を巻き込んで近づいて来ました。校舎に水が流れ込んできたとき、子供たちは 3 階に避難していました。
初め 6 mと言われていた津波が 10m になると聞いた佐藤さんは恐怖で胸が押し潰されそうになったとおっしゃっていました。情報は大事と言われているが、避難後に情報が入ってくることもあるため、現場での判断も大切だと感じたそうです。
外は雪が降っており、とても冷え込んだため、カーテンや暗幕などを使って寒さをしのぎました。次の日、赤ちゃんがいる親からはミルクが欲しい、薬が欲しいなど色々な要望が出ましたが全てに応えるのは難しかったそうです。避難者は 700 人ぐらいいて、教室だけでなく、廊下も使い、畳 1 つに 3 人が座っているような形で過ごしていたそうです。さらに外が暗くなると明かりがなく、理科室のロウソクを廊下、教室、トイレに置きましたが一晩で無くなってしまったそうです。また、食べ物は我慢できるが水は我慢できず、地震の後に汲み置きした水を小さいコップに水を入れて配っていたそうです。
そして多くの人が体調不良になっていましたが、校舎から出ることもできませんでした。ヘリコプターに助けを求めてもなかなかおりてきませんでした。またヘリコプターが来ても 1 度に 4~5 人しか乗せられず被災者の中で誰を先に乗せるべきかという順番を決めなければなりません。そのため「なぜ私の家族を先に乗せてくれないのか」などの切実な声もでたそうです。

ボランティア活動

石巻だけで 28 万人が参加しました。
ヘドロのかき出し、ガレキ撤去、食事提供などさまざまな形で関わり、ボランティアの人のおかげで前に進むことができた人もいたそうです。

震災後

震災に対する心構えが今までよりも強くなり、今、この場で地震が起きたらどこに逃げるかなどを考えるようになったとおっしゃっていました。

私たちにできること

避難場所の確認、地震に対する準備、心構え、被災地で起こったことを忘れないこと、災害時、早く避難することが大切で、そのためには周辺の環境もよく知っておくことが大事だと言っていました。

V 取材を終えて

今回の震災学習を通して、震災に対する考え方を見直すことができました。今までは自分の周りが安全ならばそれでいいと思っていましたが、他の地域のことを他人事だと思うのはよくないことだと教わりました。今回のインタビューで自分も被災した地域の人々の手助けをしたいと思いました。

藤村れいら

私は震災学習を通して1日1日を大切にすること、できるだけ家族の人と話すということを学びました。関東ではそこまで大きな被害はなく、石巻に行ったら建物があつたところがまだ空地のままであるなど、震災の傷跡が残っていることが分かりました。私たちがもっと前向きに生きることで、向こうの人たちの力にもなれると思いました。

西村ハルミ

震災学習を通して、命の大切さや毎日があたりまえではないと思いました。埼玉県は津波が来ないから大丈夫ではなく、他人事のように考えないで過ごしていきたいと思いました。また、東北の人たちがどれだけ大変な思いや悲しい思いをしたのかがとても分かりました。熱心に話をしてくれて震災のことがよく分かりました。

大野綾華

私は取材に参加できませんでしたが、みんなの取材用紙を見て避難生活が思っていた以上に大変なことが分かりました。地震が来る前、そして来たときにできることも教えていただいたので、それを参考にこれからの大地震に備えたいと思いました。

サトウ杏奈

VI 参考資料

一般社団法人 みらいサポート石巻 HP
<http://ishinomaki-support.com/>



日本カーシェアリング協会を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 日本カーシェアリング協会 』 『 吉澤 武彦 様 』

II 取材者

班長	須澤 星斗	記録	森谷 拓海
写真	森谷 拓海	報告集	渡邊 勇太



III 会社・団体の概要

2011 年 4 月、阪神淡路大震災の支援活動を 7 年半の間取り組んだ。山田和尚氏（通称:バウさん、元神戸元気村代表）から、「仮設でカーシェアリング、やったらどう？」と提案を受け、当時、車を運転できないペーパードライバーだった吉澤さんが、大阪の企業を自転車で周りながら車を集めることからこの活動は始まりました。7 月にやっとこの仮設万石浦団地に最初の車を届け、仕組みを作り、活動に賛同してくれた地元スタッフと共に奮闘しながら活動を続けていくうちに、今では約 90 台の車を活用できるようになりました。また、現場で相談受けて、それぞれ柔軟に対応していき、吉澤さん達のカーシェアリングは、いい意味で多様化していきました。石巻にお住いの皆さんに、吉澤さん達の取り組みを知って頂き、少しでも多くの方の生活の力になれるようにリーフレットを作りました。車を活用した社会貢献は、今日本見渡してもほとんど実績はありません。なので、吉澤さん達は、全国から寄付して頂いた気持ちがこもった車があるためそれを誰にでも使いやすく貸し出すことを石巻で行い、車の確保を含めて維持・発展できる一つの形を作って行きたいと思っています。また、そのやり方を他の地域に広めて貢献することを目指し、取り組みを進めています。

IV 震災時の状況

Q 震災当時、どこにいましたか？

A 熊本に出張していた。九州の方は揺れなかった。震災の事はフェリーの中でテレビのニュースを見て初めて知った。そして、ホテルで状況確認をした。

Q 熊本から戻って来た時、最初に思って行動した事はなんですか？

A 大変な事が起きていて、大変さが思い浮かんで、ニュースを見て東北の被災した子供達を助けようと思い、関西に疎開させる取り組みの協力者を募ることから活動を始めた。この活動を行っている最中にこの活動の情報が広がり、協力してくれる方々が手伝いをしに来てくださった。震災から 1 週間たった頃に支援物資(食糧・鍋・ガスなど)を車 3 台で避難所に向かった。

Q 避難場所の状況はどのような様子でしたか？

A 避難所に入って思った事は、みんなが凍り付くような空気だった。健康な人や障害者などが居た。支援物資を持って行ったが足りなく買い出しに行った。(パンや温かいスープなど食べやすい物や体が温まる物を中心にたくさん買った)温かいカレーうどんを作り配給した。

Q 復興に向けて何から始めましたか？

A 当時事務所があった大阪市内近郊の一部上場企業を訪問し、車の提供を呼びかけることから始めた。

Q 今後大きな地震が起きた場合どのような行動をしたら良いですか？

A 津波が来そうな場所を瞬時に予想してとにかく高く頑丈な場所に避難する。

いつでも情報が聞けるようにラジオ又はスマホなど用意しておく。(スマホは充電が出来ない事を想定しておく)

食糧を確認しておく(賞味期限や量など)

みんなが共同で使えるようなもの(懐中電灯・ラジオなど)

どこに逃げるか、どうやって逃げるかを改めて確認して置く。

何が何でも命が一番！！

V 取材を終えて

今回の震災学習を通して、石巻で本当に大変なことがあったと思いました。雑草がたくさん生えていたところを見て改めてそこに家があったと思うと悲しい気持ちになりました。でも、取材を聞いて、いろんな人たちが、復興に向けて協力しあっていると思ったら、自分も復興のためにも何かできないかと思いました。また、1日で早く復興してほしいと思いました。

須澤 星斗

今回の震災学習を通して、津波の怖さを初めて知りました。また、日本カーシェアリング協会という団体が石巻で活動をしていることを初めて知りました。吉澤さんに被災地を案内していただいて、テレビで見たよりも実際に見た方が被害の大きさがわかりました。しかし、自分が思っていた以上に復興が進んでいたことに驚きました。最近では、関東大震災が起こると予想がされているのでいつ起きてもいいように緊急避難経路を確認し、非常食や懐中電灯などの避難道具を準備していきたいです。また、今回の震災学習で学んで事を今後起きえる災害にいかせていきたいです。

渡辺 勇太

東日本大震災からもうすぐ、5年が経とうとしています。今回の修学旅行で実際に被災された方の話を聞いて、今まで知らなかったことや被災時の気持ちなどを知ることができました。取材者の吉澤さんも自分たちのように地震が起きたとき他人事のように思っていたけど大変な事が起っていると知り動いたことが自分たちとは違い、すごいと思いました。僕も災害が起こっていると知った時、行動できるようにしたいです。

森谷 拓海

VI 参考資料

日本カーシェアリング協会の使い方。

虎の巻より



NPO 法人 まちの寄り合い所・うめばたけを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 NPO 法人 まちの寄り合い所・うめばたけ 』 『 谷 碧 様 』

II 取材者

班長 遠山 瑞基

記録 藤村 海優

写真 大澤 里旺

報告集 森田 明日香

III 会社・団体の概要

高齢者・障がい者が家に閉じこもることなく互いに交流し、生活を楽しみ、生きがいにつなげることのできる場を目指し、平成 12 年、自宅の空地にプレハブ (24 m²) を建て「まちの寄り合い所・うめばたけ」を始めました。以来、パソコン教室、英会話教室、朗読教室、麻雀教室、図書室の設置等を通じて近隣の人々や外国人と交流し、お互いの得意技やスキルを教えあったり、パソコンや麻雀を習得したり、英語の歌や朗読、福祉施設での読み聞かせなどの活動をしたり、無農薬・無化学肥料で育てた自家野菜を朝市で販売、近隣小中学校のプール清掃や用水路の浄化等の活動にも参加してきました。寄り合い所としてのコミュニティ・カフェの運営実験も行い、平成 23 年 3 月の震災後は、通院、役所の手続き、入浴、買い物などに一人では行けない人々（移動困難者）を支援している県外からの団体に対し、約 1 年間事務所や駐車場の提供などの支援を行っている所です。



IV 震災時の状況

Q 津波が来て畑や田んぼは海水を浴びたと思うのですが、それらはこれからも使用できるのですか？

A 震災後、すぐに EM という微生物を利用して、土を使えるようにしたり、土を全部入れ替えしたりして畑や田んぼを使えるようにしました。

Q ネットで「災害に強いまちづくり宮城モデルの構築」を推進するための津波対策とあったのですが、具体的には何が強くなるのですか？

A 津波対策の堤防や防御施設を造り、震災に強い町づくり、復興整備の町づくり事業の推進。復興町づくりの事業は今でも進んでいます。

Q 震災後、情報はどこから得ていたのですか？

A 震災当時、私は大阪に住んでいて、通天閣に登っている時に震災があって、通天閣を降りた時に商店街のお婆さんに東北の震災被害を聞きました。被災地では、ドコモやソフトバンクが仮アンテナを設置し、緊急の携帯電話を配布していた。



Q 地震が起きて最初に思ったことは何ですか？

A 本当に地震が起きているのか信じられなかったの、東北に住んでいる友人に電話をかけ、震災の状況を聞き、すぐにボランティア活動に参加しようとしたのですが、今ボランティアをしに行っても迷惑だと思い行きませんでした。けれど、友人から人手が足りないという連絡が来て、第二次応募でボランティア活動に参加しました。

V 取材を終えて

谷様のお話を聞いて、詳しく東日本大震災の事を知ることができて知れて良かったです。今まで僕が知らなかった震災後の状況など色々な事を聞くことができて勉強になりました。

思っていたよりも大きな被害がないように見えて、復興は進んでいるのかなと感じました。

遠山 瑞基

東日本大震災が起こった1年目くらいは心配していましたが、2年目頃からは他人事のように考えていました。今回、震災学習で石巻の方に取材させていただき改めて東日本大震災の事を考えさせられました。震災後の行動や状況、ニュースでは分からなかった部分まで知ることができて良かったです。

藤村 海優

NPO法人うめばたけさんに行って、谷様に取材させていただき、改めて震災の状況など色々知ることができて良かったです。

今回の取材で、緊急用の携帯電話を使用するほど震災の被害が大きいのだと改めて知ることができました。私もあと何年後かしたらボランティアとして東北を助けに行きたいです。

大澤 里旺

今回震災学習でNPO法人うめばたけの方に取材させていただき、震災後の状況など私が知らなかった事を知ることができて良かったです。震災後、情報はドコモやソフトバンクの仮アンテナや緊急用の携帯電話を使っていたという事を聞いて、私はそこまで被害は大きくないと思っていたのでとても驚きました。建物は津波の被害にあった建物も少しありましたが、ほとんどがきれいな建物になっていて復興は少しずつ進んでいるなと感じました。

森田 明日香

VI 参考資料

まちの寄り合い所・うめばたけとは-全国 NPO 法人 設立趣旨書

http://umebatake.org/?page_id=32



石巻仮設住宅自治連合推進会を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 石巻仮設住宅自治連合推進会 』 『 大嶋 三千代 様 他 3 名 』

II **取材者** **班長** 吉井 汐理 **記録** 藤本 愛美 **写真** 島田 真珠 **報告集** 中島 桃花

III **会社・団体の概要**

震災後、石巻市では 134 の仮設住宅団地(7, 122 戸)が建設されました。抽選による入居のため、馴染みのない土地での生活を余儀なくされました。そこでは住民による支え合いや生活ルール作りが、求められていました。石巻仮設住宅自治連合推進会は、「孤独死をなくそう」を合言葉に、各仮設団地の自治会長が中心となり、2011 年 12 月に発足しました。



IV **震災時の状況**

今回は石巻仮設住宅自治連合推進会の 4 人の方からお話を伺うことができました。

Q1 どのようにして助かったのですか。(場所など)

A1 家の二階に逃げ、3 日間飲まず食わずそこで過ごした。4 日目の朝にタクシー業者の方に助けてもらった。

山の上に登って 2 日ほど野宿をした。

ほかの家より少し高めの 2 階に避難し、4 日目に自衛隊の方々に助けられた。

Q2 津波が来た時の気持ちはどのようなものでしたか。

A2 この世のものとは思えないほどの光景。

怖い。

何も考えられず、頭が真っ白になり体が動かなくなった。

「終わり」しか頭にない。

Q3 津波の速さはどうでしたか。

A3 あっという間。

計り知れない。

速い。

Q4 津波のイメージはどのようなものでしたか。

A4 どす黒い油みたいにドロドロしている。

水の力がすごい。

Q5 1 番不安だったこと、困ったことは何ですか。

A5 住むところがない。

情報が入ってこない。

ライフラインが通じない。

多少のお金を持っていても、売り物がないから買えない。

食べ物がない。(バナナ 1 本を 5 人でわけた。)

Q6 避難所で支えになったことは何ですか。

A6 自衛隊の方々の物資の配給。

神戸学院の先生方のボランティア(本棚などを作ってくれた)。

子供たちが遊んでいるときの声。

Q7 今の状況はどうですか。

A7 仮設住宅を出なければいけない不安。

孤独死がある。

これからの行き先は決まっているが、建物自体は建っていない。

仮設住宅は壁が薄いため、大きな音を立てられない。

Q8 これからの復興に望むことはどんなことですか。

A8 次の家に移るときに近所付き合いが一からになるので、交流の機会をもうけてほしい。

家賃が払えずに次の家に移れない人もいる(お金の問題)

V 取材を終えて

私たちが質問しているときに涙目になりながら質問に答えてくださったので、今でも震災というのは被災者の方にとって、とても怖くて、つらい思い出なのだろうなと思いました。

そして、私たちが普通に暮らせていることは幸せなんだと改めて思いました。

今回被災者の方々の話を聞いて、何か少しでも役に立つことができたらいいなと思いました。

島田 真珠

実際に被災地に行ってみて、被災者の方々の生の声を聞いたら、私たちの想像以上の苦しみを抱えて4年半も生活していたことを知ってとても悲しくなりました。これからもみんなで力を合わせて復興できたらいいと思います。自分たちもできることは協力したいと思いました。

藤本 愛美

お話し中に涙を流しながら震災当時の話をしてくださる方もいらして、やっぱり当時の出来事は4年半たった今でも思い出したくないことなんだと感じました。

テレビで見ているだけでは、その時の状況はあまり伝わってきませんでしたが、実際に被災されて避難生活をされた方の話を直接聞くことができ、ニュースで見ている情報よりもより詳しく知ることができたのでとてもいい経験になりました。

中島 桃花

今回の取材をして被害にあった方々や建物などの話を聞いて私も当時のことを思い出しました。石巻の方々に比べたら埼玉のほうは被害がほとんどなかったので苦労することはありませんでしたが、石巻では家を失い避難生活をしている方がいて改めて地震というものは恐ろしいものなんだなと思いました。まだ復興が続いているということなので、私たちにできることは何なのかを考えさせられる取材でした。

吉井 汐理

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 社会福祉法人石巻市社会福祉協議会 VC 』 『 今野 啓夫 様 』

II 取材者

班長 府川 隼人 記録 松本 祐美子
写真 梅沢 紫園 報告集 北澤 真理奈



III 会社・団体の概要

社会福祉協議会は社会福祉法に位置づけられており、地域の住民やボランティア、保健、医療、福祉等の関係者、行政機関の協力を得て、ともに福祉のまちづくりをめざす組織です。

住民一人ひとりの福祉ニーズに対応し、みんなが住み慣れた地域で、いつまでも安心して暮らせるまちづくりの実現をめざします。

福祉関係の皆様には、略して「社協」と呼ばれています。社協の運営・事業は、主に住民の皆様や事業所からの会費、行政からの補助金、共同募金の配分金、寄付金などの財源により支えられています。

IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日金曜日、最大震度 7 の大地震が巨大な津波を連れて東日本沿岸を襲いました。

1. 当時の様子

震災発生当時、社会福祉協議会の本所で仕事をしていた今野さんは地震が起きたとき何が起こったのかよくわからず携帯電話で調べようとしたが使えなくなっていました。さらに日も暮れ始め、電気やガスまでも使えなくなってしまったため、何もわからないまま一晩明かすことになってしまいました。



震災から一日たちいつもの仕事場に戻ろうとした所、津波による被害で道が通れなくなっていました。そこで見た光景は車が重なったり、電柱が倒れたりとは非現実的なことばかり起きていて、その時この地震はただ事ではないと感じたそうです。

2. 避難生活について

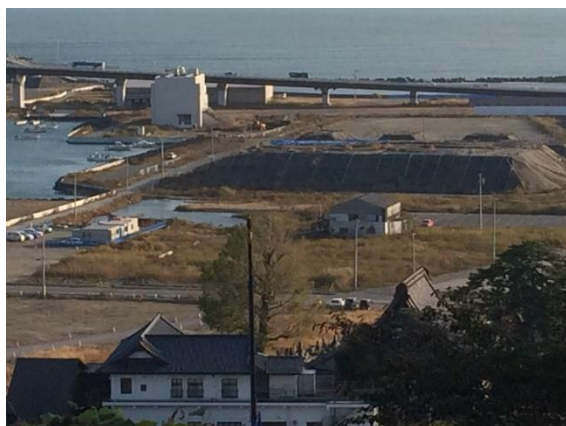
その後も、道路が通行不能だったため、しばらくの間は近くの高台にある老人福祉センター寿楽荘で寝泊りしたそうです。しかし、あまり広いとは言えない空間に 20 人くらいで生活していたため、非常用の食糧も減り始め、ついには乾パンひとかけらだけの生活や角砂糖

一つなどの過酷な生活もしていたそうです。それに加え、布団などもなくシーツ等があったとしても数が足りずカーテンの布を外し、カーテンの布にくるまり寒さを何とかしのいだそうです。

震災の被害が少し落ち着いた頃、ようやくお米が手に入りました。鍋で炊いたご飯はとても美味しく感じたそうです。

3. 津波後の状況

津波の被害で道路が泥で埋まってしまい、そこに何が



あるかもわからない状態になりました。しかし自衛隊が来て復旧作業を行ってくれたため、道路がたった半日できれいになり、すごい！と改めて実感したそうです。また自衛隊の1人の隊員は「私たちが必要とされるのはこの様な時くらいがいい、本当なら私たちは必要とされないほうがいいと思う。」と話しており、今野さんは感動したそうです。

4. 東日本大震災以来大切にしていること

家族が一番大事。と改めて実感したそうです。

今野さんの奥さんをはじめ、家族の人たちは今野さんが死んでしまったと思っていたそうです。震災後5日たってようやく今野さんと再会できた時は、普段しっかりしている奥さんも安心のあまりほっとして泣いてしまったそうです。今野さんもこの奥さんと結婚して良かったと感じたそうです。

今後はもしもの時に備えて家族が集まる場所を決めておいたほうが良いとおっしゃっていました。

V 取材を終えて

僕は、今回の震災学習の取材で様々なことが学べました。震災当日、電気や水も使えない状態で過ごしていたことなど今野様から聞いたことはとても印象に残っています。この話を通して僕は改めて家族の大切さを感じました。僕も災害などが起きたら出来るだけ状況を把握することを心がけたいと思いました。

府川 隼人

今回の震災では色々所で被害があり、けがをしてしまった人や行方不明の方が多くいて、石巻市で見た衝撃的な被害の光景は私の中で忘れることはないと思います。同じ日本の中でもこんなにも埼玉と違うことを改めて思い、これからは早く復興できるようにボランティアなどができたらいいなと思います。

松本 祐美子

私は、震災直後泥まみれになった町を自衛隊の方が半日で綺麗にしてくれたことに感動しました。また、避難生活のときの食事が乾パン一片と聞き強く衝撃を受けました。貴重な話が聞けて本当によかったと感じました。

梅沢 紫園

今回、貴重な震災の話を聞いてみて改めて津波の怖さを知ることが出来ました。私は津波に関する内容はテレビなどでしか見たことありませんでしたが、いざ現地に行き外を歩くと軽く1mを越えるような津波の標識があり本当の怖さを改めて実感することが出来ました。これからは、津波の被害がなかった地域に津波の怖さを広めていきたいです。

北澤 真理奈



VI 参考資料

石巻社会福祉協議会 HP

(http://www.ishinomaki-shakyo.or.jp/shakyo/node_264)



平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 社会福祉法人石巻市社会福祉協議会 CSC 』 『 谷 祐輔 様 』

II **取材者**

班長 藤永 友佳莉

記録 朝稲 千夏

写真 林 笑夏

報告集 堤 望美



III **会社・団体の概要**

石巻市社会福祉協議会は、住民同士が支え合い誰もが生き生きと暮らすことができる地域を目指す民間組織(社会福祉法人)です。名前にある CSC とは、地域福祉コーディネーター(コミュニティーソーシャルコーディネーター)の略です。

IV **震災時の状況**

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震は予想をはるかに超える大津波を伴って東日本沿岸部を襲いました。

石巻は、死者 3,282 名、行方不明者 669 名、住家全壊約 28,000 棟で、社会福祉協議会の建物自体にも 1 階天井付近まで津波が押し寄せる被害がありました。沿岸部付近の雄勝地区、牡鹿地区をはじめ、石巻市はとても大きな被害を受けました。

復興に向けて

震災後、石巻市内には 134 カ所の仮設住宅団地(7,153 戸)が建設されました。抽選による入居のため、馴染みのない土地での生活を余儀なくされた仮設団地では、住民による支え合いや生活ルール作りが求められていました。石巻市社会福祉協議会の方々は復興支援のために数々のボランティア活動の調整をしてきたそうです。被害にあった家の泥出し、避難所にある布団のダニ除去、炊き出し、仮設住宅への引越しの手伝いなど多くのことをボランティアの力を借りやってきました。

今現在不便なことは、高齢者の方々の移動手段や地域のコミュニティーがなくなったことだそうです。社会福祉協議会の谷さんがこれからの石巻に必要なと思うことは、支え合った人たちともっと地域を盛り上げていくことだそうです。



V **取材を終えて**

最初はとても緊張し不安もたくさんありました。でも取材をしていくうちに自然と解けました。事業所の方の体験談を聞いて衝撃的なことなどが多々ありました。力を合わせる大切さがわかったと思います。また機会があったら取材しに行きたいです。

藤永 友佳莉

私は、笑顔でいることが大事だと改めて感じました。辛いことがあっても、前を向いて生きている事業所の方々の笑顔は、震災を経験したからこそその笑顔だったと思います。震災インタビューでニュースでは知らないことをたくさん聞けて、とても良い時間でした。

朝稲 千夏

取材地に行ったとき思ったのが、少し殺風景な気がしましたが災害後であるかのような痕跡は残っておらず、建物も綺麗に直ってきていると思いました。ボランティアについて色々と話を聞いて、幸い被害を受けなかったボランティアの人たちもみんなのために無償で頑張っていたと思うと、人と人の助け合いはすごいと感じました。埼玉で災害など起こったときは、私も色んな人のために役に立つことをしたいと思いました。

林 笑夏

コミュニティー支援が一番大事と言っていたのを聞き、知らない人同士でも協力し合いボランティア活動をして助け合っていくのがいいと思いました。私も今後日本で何が起こるか分からないので、出来ることであればボランティアをやってみたいと思いました。

堤 望美

VI 参考資料

石巻市社会福祉協議会 CSC

http://www.you-homeclinic.or.jp/img/dr_muto/las_pdf/forum4_20121029

http://www2.rikkyo.ac.jp/web/csc/file/renzokukouza_3_ishinomaki

私たちはこの建物の二階で取材をさせていただきました。この建物では、高齢者の方々が集まって今後の復興支援などについての話し合いをよくしているそうです。



キャンナス東北を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 キャンナス東北 』 『 山田 葉子 様 』

II **取材者** **班長** 橋本 祥悟 **記録** 佐藤 里奈 **写真** 強矢 悠斗 **報告集** 林 海里

III **会社・団体の概要** 障害者、高齢者、福祉、保健・医療、地域・まちづくり、環境・エコロジー、災害救援、起業支援



IV **震災時の状況**

1 体育館などの避難場所や食料などは十分だったのか？

A 一日目…菓子パンを分けながら食べた。

多くの避難者の中でも、高齢者には最初に一個の半分渡していた。

二日目・三日目…朝晩ビスケットを 2 人で 1 枚。

自衛隊がタンクに入った水を持ってきた。

夜にはお団子といったやわらかい食べ物が食べられるようになった。

四日目…避難者同士でできる範囲での炊き出しを行った。

五日目…二人に一個おにぎりが配給された。お昼は避難者同士で炊き出しを行った。

炊き出しはインスタントラーメンのスープを薄くして、麺をふやかして一人にコップ一杯ずつを与えた。インスタントラーメンは、ビニールをかぶっていたため濡れていなく、食べられた。

六、七日目～…不定期に食料が届いた。渡波は石巻のはずれなので、道路状況や被災状況によって避難所への物資の提供が安定しなかった。

一週間ちょっとたったころにようやく一人一個パンやおにぎりを食べられるようになった。

十日目～他県の行政支援員が避難所の運営サポートに入る。（鳥取県 3 月 19 日、北海道 4 月 1 日）看護協会…3 月 20 日頃～4 月 14 日

果物が届き始めた。

バナナ→手が汚くても食べられる。柔らかい。栄養素が高い。

リンゴ→食べ方に困る。在宅の方に渡す。



2 建物などの瓦礫を片付ける際、どのくらいの大きさのがれきがありましたか？

A 家の瓦礫が多く、大きい瓦礫が多かった。

3 震災直後は、どのようなことを考えましたか。

A もう逃げることしか考えていなかった。

二日目の朝外に出たら、想像もできないほど悲惨な光景が広がっていた。

V 取材を終えて

今回の震災学習での感想は自分たちが取材させていただいた方はとても親切に自分たちにわかりやすく津波の怖さ、避難所での苦労などを話していただきました。実際に津波の跡などを見た時とても鳥肌がたちました。この震災学習で学んだ事を自分の家族などに伝え風化させないようにしようと思いました。

橋本 祥悟

私は、今回の震災学習を通して色々なことを学びました。

震災があり、ほとんどの人が体育館へ避難しました。家などが流され道路はガレキだらけでとても外に出られる状況ではありませんでした。なので、外に出られるようになるまでの間、体育館で生活をしていました。そこで、被災者の方へ配られる食料が、おにぎりやパン、クッキーなどです。自衛隊などがその体育館へ来るまでの間、その様な栄養が偏りがちな食料ばかりでした。しかも、一日分の一人の飲み物はペットボトル一本ではなく、紙コップ一個分しか貰えませんでした。このような状況が何日間か続きました。ですが、避難所生活が続くと自分にも余裕が出てきて、周りが見えるようになりました。その時に、避難所にいる人が高齢者の方や子供達がとても多かったのに気づきました。高齢者の方や子供達が多いということは、今まで配られていた食料が硬かったりして、その人達には合わないものばかりでないかと思いました。なので、ガレキの山からガレキを持ってきて火をおこしお水をお湯にして、お湯の中にお米を入れお粥にしました。そのお粥をみんなに配りました。お粥や温かいものを口にする事で、ほとんどの人達が笑顔になったり自分にも余裕が出たりして、みんながみんなを支えるという状況になり、今まで緊張していた空気が無くなったような感じがしました。



私は、この話を聞いて温かいものを口にするだけで、こんなにも気持ちや空気が変わるのだと思いました。

このような状況だからこそ、温かいものを少しでも口にするだけで気持ちが落ち着くのだと思いました。私も似たような状況になったときに、この話を少しでも真似できたらいいなと思いましたし、今後にも活かしていきたいと思います。今回はこのようなお話をさせていただき、ありがとうございました。

佐藤 里奈

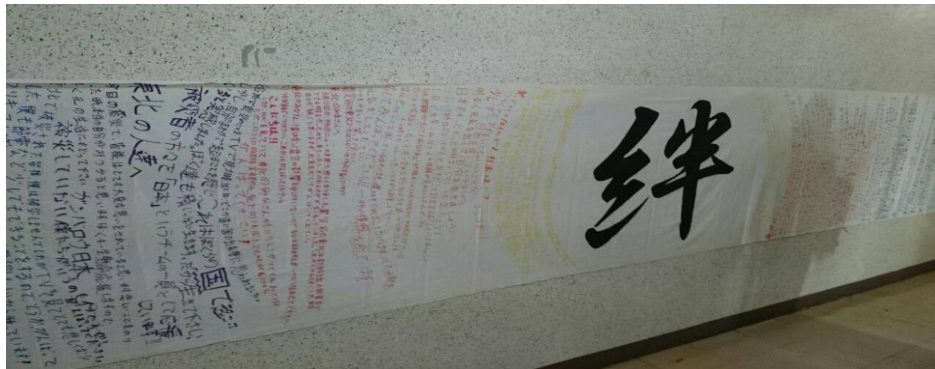
僕は石巻のキャンパス東北という所に取材に行きました。看護のボランティア団体ということでどんな話を聞けるのかとても興味がありました。写真係なので写真を撮るのですがあまり撮ってなくて困ったけど班みんなが撮ってくれていたのによかったです。被災地の方の生の声を聞いて想像以上に悲しく辛く怖くて大変なことなのだと改めて感じました。震災にあまり関係ない埼玉の人なので、それほど震災や被災地に詳しくはなくあまり興味もなかったけど、聞けば聞くほどどれも考えもしなかったことばかりですごく勉強になりました。今回このような貴重な話を聞けて、少しは震災と被災地の方の気持ちなどわかっていたんじゃないかなと思います。

した。いままでは関係ないと思っていたけれど同じ日本人として、そして被災地の生の声を聞いた人としてこれからも 3.11 を忘れないで過ごしていきたいです。

強矢 悠斗

私は、10月28日に宮城県石巻市に震災の状況を聞きに取材に行きました。崩壊した家やまだ直りきっていないガタガタな道路、地盤沈下したマンホールなどが取材の場所に行く途中でたくさん見られました。取材を終えて、震災の当時、とても苦しかったことがわかりました。ライフラインが使えない、食料が十分でないなどということがわかりました。涙が出ました。だから、「自分達が震災にあったら」ということを考えて、今、自分たちが準備や出来る事をしていきたいと思いました。貴重な体験ありがとうございました。

林 海里



VI 参考資料

キャンパス東北 団体情報

※ <http://fields.canpan.info/organization/detail/1606145132>

松島エリア



陸奥物産店を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 陸奥物産店 』
『 相澤 慶太朗 様 』

II **取材者**
班長 恩田 祐輝 **記録** 鈴木 鳳人
写真 崔 忠誠 **報告集** 恩田 祐輝

III **会社・団体の概要**

松島のお土産屋さん。ここでしか買えない限定のキャラクターグッズや世界の貝や、ほかにはない商品、食品も多数取り扱っている。



IV **震災時の状況**

震災時は、仕事をしていて急な強い揺れにびっくりしたそうです。それで慌てて従業員を駐車場に避難させたそうです。揺れがおさまった時は、電気が止まってしまって津波が来ることがわからなかったそうです。娘を車で避難させるときの車のナビで初めて津波が来ることを知ったそうです。家族で山沿いのホテルに泊まったそうです。津波が胸の高さまで来たため、店内の商品が 4000 万円分ほど流されてしまったそうです。

・地震後お店を再開するのに一番苦労したこと
店内にたまったヘドロを弟と一緒に掃除したこと。

・震災で知ったこと

津波は来た時より引く時の威力のほうが大きいこと。

・お店で震災前と震災後で変わったこと

東京の間屋と協力して、「がんばろう東北」グッズを作り売り上げが、震災前より上がったそうです。

もう 1 つは、外国人観光客が 100 分の 1 ほどに減ってしまったことで、多くの外国人は、宮城県も福島県も「東北」という一つのくくりで認識しているため、放射能が怖くて来ることに躊躇しているのではないかとっていました。



・気を付けてほしい事

当時、東北では地震がいつ来てもおかしくないと言われていたという。そして、現在、関東にもいつ地震が来てもおかしくないと言われている状況です。そのため、避難用の備えはしておいた方がいいと言っていました。

V 取材を終えて

今回取材をして、今まであまり身近に感じる事のなかった震災のお話を聞いたり、津波の動画を見せてもらったりすることで、埼玉では感じなかった恐怖や被害の大きさにびっくりしました。実際東北では被害が少ない方に入るといふ松島でも、津波が胸の高さまできたという話を聞いて、他の場所はどうだったのかと少し調べようと思うことができました。今回の震災学習はいい経験になりました。

恩田 祐輝

東日本大震災が起きた時、自分はまだ小学生でした。外にいたので、ものすごく強い地震とは思わなかったのですが、テレビなどに映る光景は、まるで地獄のようでした。約2万人の人が亡くなったと聞きました。ものすごい数の方が亡くなってしまったので、その人たちの生きたかった分まで、僕は元気に生きたいと思います。

鈴木 鳳人

今回の取材を終えて、震災がどれほど怖く恐ろしいことかを改めて実感しました。だからこそ、毎日を悔いが残らないように頑張りたいと思いました。

そして今回のような経験は、2度とないと思うので、今後に活かして行こうと思いました。行ってよかったです。ありがとうございました。

崔 忠誠

VI 参考資料

陸奥物産店ホームページ

<http://matusimaaizawa.jimdo.com/>



I **取材地** 『 松島温泉絶景の館 』
『 石川 勇太 様 』

II **取材者**

班長	小川 キミエ	記録	皆川 亜実
写真	増田 結菜	報告集	野村 美真



III **会社・団体の概要**

日本三景の一つ松島は、東北で唯一観光地としてフランスのタイヤメーカー「ミシュラン」の三ツ星に選ばれました。松島温泉絶景の館は、この三ツ星の景観が見られるホテルとしてミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで紹介されているホテルです。

IV **震災時の状況**

Q 1 ちょうどお客様が来られた時に地震が起きたと聞きましたが、お客様はパニックになったりしませんでしたか？

A チェックインが 15 時からだったので、観光中のお客様が多く、慌ててホテルへ戻ってきたお客様が多数いらっしゃいました。

Q 2 その時にホテルの従業員の方は何人くらい、いらっしゃって、どのような対応をとられたのですか？

A 自宅へ帰宅できるお客様はすぐに帰られて、帰宅できないお客様へは、ホテルに残って頂きました。そのときに簡単な料理を提供して、従業員も頂きました。震災 2、3 日後に仙台市内を通る山梨経由のバスで帰宅して頂きました。震災当時残っていた従業員は 20～25 人でした。

Q 3 震災後ホテルから出て避難所などへ避難したりはしませんでしたか？

A ホテル自体は避難所ではないのですが、もともと高台にあるホテルだったので、津波の心配がありませんでした。そのため避難所には行かずにホテルに待機していました。



Q 4 ホテルから食糧を提供しましたか？

A 電気はダメになってしまったのですが、ガスは使えていたので簡単な料理を提供しました。また冷凍庫にあるストッカーの食糧が腐ってしまうので、その食糧も使いました。

Q 5 震災後、ホテルの窓が割れてしまったと聞きましたが、他に被害の受けたところはありませんでしたか？

A まず電気がダメになってしまったことや器が割れたこと。他にもバックヤードの土台がダメになってしまったことや客室の壁にヒビは入ってしまったことなどの被害がありました。

V 取材を終えて

私は、班長で凄く緊張していました。しかし、思っていたよりも質問もスムーズに出来て時間があっという間に感じました。自分も5, 6年前には東北に住んでいて、幸い震災にはありませんでした。今回少しだけ自分の住んでいたところを通りましたが、そんなに変わってなくて少し安心しました。今回の取材で被災した方の話を聞くことが出来てとても良い経験になったと思いました。

小川 キミエ

震災学習を終えて、私は震災についてよく知ることができました。以前は他人事のようにしか思っていませんでした。今回の取材で色々大変だったことなどを聞いて自分もこういう経験をしたらどれだけ大変で、辛かっただろうかと思い色々考えさせられました。この経験を生かしていきたいと思いました。

増田 結菜

今回の修学旅行で震災学習をして東日本大震災がいかに大変だったか、苦しい思いをしたかわかりました。私はホテルでお仕事をしている人にインタビューをさせて頂きました。ホテルで働いている人は、自分たちも東日本大震災の地震で怖い思いをしているにも関わらず、お客様を第一にしていたので凄いと思いました。この震災学習は私にとってとても貴重な体験でした。

皆川 亜実

震災学習を終えて、今までテレビの中でしか知らない情報を、取材を通して知ることが出来ました。松島温泉絶景の館は、津波などの大きな被害はありませんでした。ですが、実際は色々な被害を受けていて、大変だったことなどを取材で伺うことが出来ました。従業員の方や宿泊客の方はとても辛かっただろうと思いました。今回の震災学習を通してとても良い経験が出来、貴重な体験が出来ました。

野村 美真

VI 参考資料

松島温泉絶景の館 <http://www.zekkei.jp/>

松島ヨットハーバーを取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 宮城県松島公園管理事務所 』
『 蜂谷 様 田代 様 中川 様 新田 様 石川 様 』

II **取材者**
班長 嵯峨 自由 **記録** 渡辺 みゆき
写真 田原 和希 **報告集** 藤村 麻衣

III **会社・団体の概要**

県内学生のヨット部や社会人ヨットクラブなどが利用している。ディンギー、クルーザーの他、シーカヤックなども、県内有数の停泊地として活動している。松島公園内にヨットハーバーを整備し、利用するクラブが運営する運営委員会を作って共同で運営している。構内には艇庫や、艀装するスペース、駐車場などがある。

松島ヨットハーバー運営委員会と宮城県松島公園管理事務所が独占的に使用していて、関係車両以外は進入禁止となっている。

松島ヨットハーバー関係者とは、①宮城県仙台第一高等学校ヨット部、②宮城県塩釜高等学校ヨット部、③東北学院大学学友会ヨット部、④松島外洋ヨットクラブ、⑤松島ヨットクラブ、⑥レーザー仙台フリート、⑦松島 Coastal Kayac の 7 つの団体である。

IV **震災時の状況**

松島では人的被害は少なかったが、津波によって平地にある多くの建物は浸水し、建物の崩壊や流れてきたヘドロなどが屋内外に堆積した。

船の被害

松波丸：中央栈橋ゲート付近に正常位にて揚陸。
海陽丸：繋留場所にて転覆。
牛若丸：繋留場所にて転覆。
朝輝丸：海中に水没破損。
松竹丸：国道西側入り口付近まで流される。
荒建丸：ハーバー裏入口にて転覆。



構造物の被害

ハーバー委員会のプレハブ：正門付近に流される。
ハーバー委員会の物置：流されて破損。
渡月橋：落下。泊地内に止まったので解体。
ハーバー中央栈橋：反転破損。
防波堤防潮扉：地盤沈下、機械部分の劣化による可働不良。

震災によりほとんどのお店が津波などの被害を受けたが、旅館二軒を除くほぼすべてのお店が約 1 ヶ月半で営業を始めた。

V 取材を終えて

今回の震災学習は、とても良い経験となりました。現地に着くまでかなり緊張していて、失敗しないように何度も何度もイメージをしていました。現地についてもその緊張はほぐれず、心配ばかりしていました。しかし、取材をしていくにつれ段々とほぐれてゆき、たくさん話を聞くことができました。

嵯峨 自由

今回の取材を終えて被害の大きさや津波の恐怖を改めて知りました。被災時は周りの人達との付き合いの大切さや、ライフラインの中でも水が必需品という、被災を経験しているから分かるようなアドバイスをもらうことができてとても良い経験になりました。

渡辺 みゆき

今回の取材を終えて、松島の津波の被害があまりなかったことに驚きました。震災時になくて困ったのは水だと聞きました。また約1ヶ月半ですべてのお店が営業を開始することができたことが凄いなと感心しました。たくさん話を聞けてとても良い経験になりました。

藤村 麻衣

今回の震災学習では松島の被害が少なかった理由やその他色々な今まで知らなかったことを知ることができました。非常時に備えるには普段の周りの人とのつきあいが大事だということが、知れてよかったです。

田原 和希



VI 参考資料

<http://bulkhead.sblo.jp/category/1173977-1.html>

(ヨット画像)

松島蒲鉾本舗を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 松島蒲鉾本舗 』 『 渡辺 徹 様 』

II 取材者

班長 王 佳賀 記録 田場 大樹
写真 絹田 拓哉 報告集 田場 大樹

III 会社・団体の概要

この会社は昭和 9 年に須田商店として創業され、昭和 45 年に現在の松島蒲鉾本舗となりました。店舗は、松島・塩釜・仙台と 3 カ所にあります。ネットでも販売をしており、いつでも買うことができます。お店では自分達で蒲鉾を焼き、その場で食べることもできます。



IV 震災時の状況

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震は想像をはるかに超える大津波となって東日本沿岸を襲いました。

1、お店の被害状況について

「地震の揺れは2階の階段にも上がれないほどの大きな揺れだった。その後來た津波は、2階建ての店の1階部分が波にのまれてしまい、シャッターも1mほどめくり上がってしまった。その結果1階の店内は壊滅状態だったが、2階はなんとか無事だった。」と渡辺さんはおっしゃっていました。

2、震災当時、お店の蒲鉾を無料提供について

「被災者の人達に無料提供をすることは当たり前だった。こういった状況の中だったら誰でもやと思う。自分達が今、何ができるかを考えて行った行動だった。もちろん、お店で蒲鉾が作れるようになってから避難所に持っていった。こういった行動は誰でも思いつくことだし、当たりの事だった。」と渡辺さんはおっしゃっていました。

3、今後、東日本大震災のような被害が起きたとき一般人にとって大事なこと

「まずは、一人一人が出来ることをやればいい。自分達が何を今、出来るかを見つけてから行動に移すこと。その人達のペース、その人達が求めていることをやるのが一番大事。その中でも被災者の生の声も聞くことも大事。」と渡辺さんはおっしゃっていました。

V 取材を終えて

今回、震災学習をしてとても良い話が聞けて良かったです。被災者の方から話を聞く事によって、当時の被害状況が詳しく知ることができて、とても良い経験になりました。自分がどれだけ震災や津波の事を甘く考えていたか痛感しました。

実際の被災者の方からの生の声を聞く事によって震災への向き合い方も変わりました。今回の震災学習はとてもためになる事ばかりで、良い経験になりました。

田場 大樹



正直、震災学習は面倒だと思っていました。でも良い話を聞けて良かったです。実際に3.11を経験した人から話を聞いて、東日本大震災に対する今までのイメージが少し変わりました。今まで、震災当時はみんな恐怖を感じていて理性を失い、正しい判断が出来ないパニック状態になっていたと思っていました。しかし、取材をしてみると全然そんなことはなく、ピンチの状況に対してどう乗り切ろうかと考えていたと聞いて驚きました。当時の詳しい状況や何をしたかなど、実際にこのような大震災が起きたときに何をしたらいいかを聞くことができて本当にいい体験になったと思います。

王 佳賀

今回の震災学習で被災者の方の話を聞けて良かったです。このような機会はあまり無いと思うので、とても勉強になりました。実際に被災者の方から真実の声というものはあまり聞く事が出来ないと思います。自分がどれくらい震災を甘くみていたか、どれくらい軽い気持ちで考えていたかを知ることが出来ました。そう考えるととても自分が恥ずかしくなります。今後、私たちがもし被災したらどうしたら良いかなど、被災時の対応など凄いい参考になることばかりでした。自分にとってとても良い勉強になりました。

絹田 拓哉

VI 参考資料

【松かま】松島蒲鉾本舗

<http://www.matsukama.jp/shop/souhonten.html#22>

瑞巖寺の4年半後取材して

平成27年10月28日

I 取材地 『瑞巖寺』 『千葉 洋一様』

II 取材者

班長 藤谷 歩夢 記録 山本 果奈
写真 林 萌香 報告集 寺師 元春



III 会社・団体の概要

詳名は『松島青龍山瑞巖円福禅寺』、つまり瑞巖寺は臨済宗妙心寺派の禅寺です。平安時代の初め天長5年(828年)、慈覚大師円仁により開創され、天台宗延福寺と称しました。鎌倉時代中期の13世紀半ば、執権北条時頼公が法身性西和尚(俗名：真壁平四朗)を開山とし圓福寺と改称して、建長寺派の禅師に改めました。

圓福寺は鎌倉幕府の庇護の下に大いに栄え、室町時代も五山十刹制度の十刹に位置づけられ、末寺を作り発展しました。しかし、戦国時代に寺勢は衰え、その末期には妙心寺派に属しました。

江戸時代の初め、仙台六十二万の祖となった伊達政宗公が師傳虎哉禅師のすすめで現在の大家藍を完成させました。寛永13年(1636)、政宗公の遺言で松島にきた名僧雲居禅師(1582～1659)の努力で名実ともに奥羽の大禅刹となり、周辺には円通院・陽徳院・天麟院などが造営されました。

IV 震災時の状況

Q 今はテレビで震災の事をやっている事がすくないですが今の復興状況どのような様子ですか？

A 瑞巖寺では、文化財建造物の復興工事は完了しており、現在では参道の復興事業を行っています。海岸市区では海岸線の護岸工事が『松島公園津波防災緑地事業』として平成30年3月まで行われる予定です。

Q 仮説住宅に住んでいらっしゃる方は、今どのくらいいらっしゃるのですか？



	松島	宮城全体
プレハブ	0名『プレハブは無いが仮設集合住宅はある』	27.666名
民間の家『空き家 亡くられた方の家』	111名	23.698名
合計	111名	51.364名

平成27年9月30日現在

Q 津波が来たとき、どのようなことを考え行動をしたのですか？

A 瑞巖寺は緊急避難場所になっており、大津波警報発令際に、避難者が大勢来ると考えました。そこで避難場所を裏山駐車場に決め、要所に人を配置して誘導しました。避難者の安全を第一に考え、『運動会で使用するような』テントを張り、暖を取るためにたき火をして、状況判断ができるように情報収集に努めました。

Q 具体的にお寺としての責任の大きさはどのようなことですか？

A 幸いにも松島町内では亡くなった人が少なかったのも、亡くなった人の供養に関しては最小限で済みました。今回の震災で避難所として機能させていただいたことは、観光客はもとより、地域住民、地域で働いている方々の力になれたのではないかと思います。お寺としては震災に遭われた方の安心を得られるように努めることが責務だと思っています。

Q 震災前から災害に対し、気をつけていた事は何かありますか？

A やはり、文化財を持っているので、火災については細心の注意を払っています。また、職員と近隣住民の方と瑞巖寺自衛消防隊を組織し、年に2回、ホースの使い方や避難経路の確認と仏像などの運搬の経路の確認について訓練しています。

Q 震災前から震災後での心の変化はありましたか？

A 大きな変化はありません。やはりお寺は心のよりどころとなるべきところだと言う事を、今回の震災で実感しました。また、今回の震災は近隣に住民やお店の方々の協力があって乗り越えることができたので、地域の方々との繋がりをもっと大切にしなければいけないと思いました。



写真：伊達政宗の正室の墓堂

V 取材を終えて

今回の震災学習で千葉様に直接お話をさせていただき、さらに普通では入れない所で取材をさせていただいてありがとうございます。松島は周りの地区に比べ被害が少なかったのも、復興が早く進んでいました。被災者の方から震災の話を聞くのは初めだったので、かなり緊張しました。しかし、千葉様が緊張をほぐすようにお話をしてくださったのでリラックスして取材できました。私の中で一生記憶に残る出来事でした。貴重なお話をありがとうございました。

藤谷 歩夢

今回、震災学習をやると聞いて最初は知らない人と知らない所に行くので少し不安もあったし緊張もあったが、班の人も優しく私達が行ったお寺のお坊さんも笑顔で出迎えてくれたので緊張も少なくなりました。今はあまり震災の事をテレビなどでやっていないが、まだまだ私達が知らないことがたくさんあると思いました。普段、ニュースでしか被災した方々のお話を聞ける時がないと思うので、今回直接お話しを聞けてとても貴重だったと思いました。

林 萌香

今回震災学習で瑞巖寺に行き、千葉様から震災当日の話を聞き瑞巖寺では観光客を受け入れて、夜には暖を取るために火をつけた。また、おにぎりを一人2個ずつ行き渡るようにするなどしたそうです。松島地区は死者が少なかったというのを初めて知りました。この震災で千葉様は地域のつながりを大切にしたいとおっしゃっていました。ですので、私も周りとの繋がりを大切にしていきたいと思います。

山本 果奈

僕が今回の震災学習を通して感じたことは、瑞巖寺でも当時の災害で避難した人々が大勢来て、震災直後の対処を聞いて、どれだけ大変だったかが身に沁みました。テントを張り、おにぎりの配給をしたり、カイロを配ったり、現場にいた千葉様のお話を聞き避難させることも楽ではないと感じました。そして、震災の恐怖を再確認し、これからも忘れないように生きていかなくてはならないという意識を改めて実感しました。

寺師 元春

VI 参考資料

臨濟宗妙心寺派青龍山瑞巖寺のパンフレットより

丸文松島汽船（株）松島事務所を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I **取材地** 『 丸文松島汽船（株）松島事務所 』 『 佐藤 守郎 様 』

II **取材者**

班長 野崎 啓司 **記録** 筑田 咲稀
写真 吉澤 之悠 **報告集** 有野 航平



III **会社・団体の概要**

丸文松島汽船は色々な観光コースがある。

- ・ 松島～松島コース 所要時間 50 分
- ・ 塩釜～松島コース 所要時間 50 分
- ・ 奥松島～大高森コース 所要時間 50 分（不定期）

船は 8 種類あり、そのうち 3 種類がバリアフリーになっていて、どのような人でも乗れるように工夫されている。また、暖房完備なので色々な季節の松島を見ることができる。

IV **震災時の状況**

震災では、松島は南三陸などに比べてあまり津波の被害が出ていなかった。なぜなら松島には、たくさんの島があり太平洋側にあった島々が防波堤の役目を果たしたために大きな津波は来なかったためだ。それでも松島に届いた波は 2 m ぐらいあり、事務所の天井まで届いたため、機器のほとんどは壊れてしまった。



この他にも、例えば、船が逆さまになる、海にゴミが散乱する、海沿いのお店がほとんど閉まる、5 月の中ごろまで電話が使えない、予約がキャンセルされる、お客様が来なくて従業員の給料を 2 割減らさなければいけない、食べるものがない、福島第 1 原発による風評被害、20 日連続で風呂に入れない、ライフラインが止まる、という被害がでた。それに加えて、海に散乱したゴミにより危なくて船を運転できなかった。また、出勤しても毎日海の掃除をすることしかできなかった。そのためしばらくの間は、収入がなく出費だけがかさんだ。ガレキや海のごみなどを片づけて営業を再開しても、お客様は来なかった。だから、船を元に戻してもむなしさだけが残った。

<<震災後>>

- ・ 震災直後は、行方不明者の捜索などの復興に向けた動きや、海の中のごみを撤去して営業再開に向けて動かなければと思った
- ・ 気仙沼からの要請ではやぶさに食料や水を乗せて運んだ
- ・ 今年にはお客様が震災前の 80% まで回復した
- ・ 震災時に地割れがあったのが修復された
- ・ 日本人は東北を見捨てないという温かさがあると知った
- ・ 2 年ほど経てくると人々は震災を忘れてきてしまった

<<凄いと思ったこと>>

- ・ アメリカ軍 震災の次の日には来ていたこと
- ・ 日本人 同じ日本人が困っていたためにボランティアしたこと
- ・ 自衛隊 遠い居場所からかけつけたこと
- ・ 避難訓練 津波の避難訓練をしていたことで人的被害がなかったこと

V 取材を終えて

今回の震災学習で大切だと思ったことがあります。それは、津波を想定して行った避難訓練です。松島では、避難訓練をしていたためにけが人がいなかったということです。それを聞いてこれからは、自分を守れるように頑張りたいと思います。

野崎 啓司

今回、修学旅行で震災学習をして、今までテレビでしか見てこなかった震災を、被災した 地で被災した人から詳しく話を聞いてテレビより説得力あったし、これから先そうそうない機会なのでとても貴重な体験になったと思います。

筑田 咲稀

震災学習を終えて思ったことがあります。1 つは、震災直後お客様がこなかったために当時の収入が 0 で、今年になってもお客様の数が震災前に比べ 8 0 % だという話を聞いて大変さを感じました。2 つめに、丸文松島汽船ではけが人が出ず、船にも被害がなかったことを聞き、よかったと思いました。また町内会の方々に助け合っていたと聞いてすごいと思いました。

吉澤 之悠

自分は、小学 6 年の時に東北大震災が起きて、怖い思いをしました。にもかかわらず、高校の修学旅行前まで震災について関係ないと思っていました。しかし、それは間違いで、誰もが経験することだと思いました。これからは、無関心でいるのではなく、震災で役立つことを学んで自分自身や周りの人をも守れるようになっていきたいです。

有野 航平

VI 参考資料

丸文松島汽船（株）HP

<http://www.marubun-kisen.com/>



磯崎漁業組合を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 磯崎漁業組合 』 『 菊池 様 』

II 取材者

班長 内堀 翔悟 記録 田口 哲哉
写真 田口 哲哉 報告集 海老澤 光揮



III 会社・団体の概要

松島湾を漁場とする沿岸漁業の中心は“つくる漁業”としての牡蠣の養殖です。

水揚げ高、売上高ともに牡蠣が全体の 9 割以上を占めるほど代表的な水産業です。

町内には 4 ヶ所のカキむき場があり、そこでむいた生カキの一部はパック詰めに加工され、即売所で観光客などに直接販売されたりしますが、ほとんどは漁業協同組合を通じて市場に出荷されます。

宮城県のカキ生産量は（全国の 25%）、広島県（全国の 50%）に次いで日本で二番目です。

松島町では、1 年間に約 114 トン（平成 20 年）のカキが生産されています。

磯崎漁業組合は松島町の磯崎地区にあり、主にカキの養殖をしている漁業組合です。

IV 震災時の状況

震災では、松島は南三陸などに比べ、あまり津波の被害が出ませんでした。松島には、たくさんの島々があり、太平洋側にあった島々が防波堤の役目をしたために大きな津波は来ませんでした。私が行った事業所では、10m くらいの津波が来て、2 階部分まできたため工場内のものがめちゃくちゃになってしまったそうです。

～取材～

・地震発生時の仕事上の苦労

水や電気が止められてしまい、給水車や発電機を使ったそうです。漁業では、漁船の 3 分の 2 が壊れてしまったり、沈没してしまったりして 3 分の 1 も戻らなかったそうです。津波により竹などのがれきがたくさん流れてきて山のようにになってしまい、機械を使って撤去したそうです。

・震災後、漁が再開できるまでの苦労

震災後も海上保安官や自衛隊や警察などによる行方不明者の捜索により海に出られず漁の



再開ができなかったそうです。

・牡蠣などの生産は震災前と震災後ではどれくらい変化があったか。また今現在ではどれくらい戻ったのか

牡蠣の生産量は震災前と震災後では半分しかいってなく、今になってやっととれはじめたそうです。震災後はかきのたねが少なくて少ししか取れず、翌年にはかきのたねがなくなり、取れなくなってしまったそうです。牡蠣のほかにアサリも生産していましたが、アサリが育つ砂や泥は津波によりすべて流されてしまったそうです。

・他県からのボランティアでうれしかったこと

最初ボランティアはあまり好きではなく頼らないと言っていたそうですが、泥などの撤去が大変で従業員の人たちだけでは無理だったのでボランティアの方たちに手伝ってもらったそうです。そのおかげでとても助かり、とても感謝しているそうです。

V 取材を終えて

私は、小学 6 年生の時に震災を経験し今まで感じたことのない地震だったので何が起きたのか全くわからない状態でした。家に帰ってテレビを見ると言葉にできないほどの驚きでした。その地震から 4 年半がたち、今回の修学旅行で被災者の方に直接取材をして、被災者のその時の思いや 4 年半の苦労を知ることができました。これから自分でできることがないか考えさせられることが多かったです。これからは、小さいことからコツコツと被災地にできることをやっていきたいです。

内堀 翔悟

震災学習を終えて、2011 年 3 月 11 日から今 2015 年になっても、地震や津波の面影がまだあり、来年で 5 年がたちますが、まだ復興追いついていないと思いました。私が行った松島では、海の近くはまだ瓦礫の残骸や津波の跡が残っていました。津波により船がたくさん流されてしまい、探すのがとても大変だったなどたくさんの被害を受けてしまったそうです。しかし、それでも諦めずに仕事をできるということがすごいと思いました。あんなに悲しい出来事から 5 年が経とうとしています、5 年前のことを忘れずにこれからは、なにかできればなと思いました。

田口 哲哉

私は、小学 6 年生の時に東日本大震災にあいました。今でもあの時の揺れや窓ガラスが割れそうな音やドアや机が揺れる音、みんなの悲鳴が思い出されます。ですが今になると他人事のように感じてしまっています。しかし、今回の修学旅行で実際に津波に直面し、被害にあった方に話を聞いて、今まで知らなかったこと、被災者の気持ちなどを知ることができました。これからは、無関心でいるのではなく、先のことを考え行動し、自分だけではなく、周りの人たちも守れるようにしたいです。

海老澤 光揮



第一交通有限会社を取材して

平成 27 年 10 月 28 日

I 取材地 『 第一交通有限会社 』

『 遠藤 義憲 様 』

II 取材者

班長 石川 智也 記録 松本 光一

写真 鈴木 祐騎 報告集 鈴木 祐騎

III 会社・団体の概要

第一交通有限会社は昭和 35 年に創業され、タクシー事業やバス事業、他にも不動産関連事業やファイナンス事業など様々な事業に力を入れている会社です。ドア・to・ドアのサービス産業としてお客様第一のサービスに徹し、安全でスピーディをモットーにしている会社です。

また全国 33 都道府県に約 7500 台の車両を所有する第一交通グループの一員です

観光タクシーだけでなく、車内携帯電話充電サービスや時間制運賃、運転代行も行っており、年中無休、24 時間対応のタクシー会社です。

平成 23 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災が、どのようなものだったのかをお客様に実際に知って頂く“語り部タクシー”というサービスもおこなっています。乗務員の方たちが受けた様子や被害のありのままの様子をお客様にご案内しているそうです。



IV 震災時の状況

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災（マグニチュード 9.0）で宮城県の松島町では最大震度 6 弱、津波の高さは 3.8m でした。最高気温 4℃最低気温 -4.5℃というとても低い気温の中で地震が発生しました。地震発生時誰もが経験したことのないような大地震だったそうです。

松島町では地震・津波による被害者は 21 人で行方不明者は出ておらず、他の地域よりも被害が少なかった地域といえます。そして地震発生時松島にいた観光客の数は約 1200 人だったそうですが幸いにも観光客に被害はなく全員無事だったそうです。それから震災後 7 日間電気が止まり、また 3 月 20 日まで水道が止まってしまいました。

震災直後はタクシーの燃料となるガソリンやガスを手に入れるのがとても大変だったそうです。その理由として 3 月の宮城県は寒いということもあり、ガソリンと同様に灯油を求める人が多いためガソリンスタンドの周りを取り囲むほどの行列ができたからです。

V 取材を終えて

今回の震災学習を終えて改めて震災後の大変さを思い知りました。

ニュースでは見えなかった所などなど、すごく新鮮味があり、時間を忘れて思わず話を聞きこんでしまいました。

最初、松島はニュースではあまりよく聞かないし、被害もないだろうと思っていたのですが

全然違いました。実際に行って、聞いて、見て思っていたことが全然違うこと、そこで初めて思いました。東北という寒い季節の中で、停電し、食料もほとんどない、電話も止まり本当に大変だったというのを聞き、その松島はそこまで大変じゃないという考えも一瞬にして吹き飛びました。そしてその先入観が無くなりました。これからは先入観を持たないようにしていきたいと思います。これが今回の修学旅行で学んだことです。

松本 光一

修学旅行の震災学習で僕たちは被災地を訪れて、被災地の今の状況を自分の目で見る事が出来ました。バスでの移動中に津波の影響を受けた地域を見て今まで自分がテレビや新聞で見た光景が目の前に広がっていて震災の怖さを改めて知ることが出来ました。

そして第一交通有限会社に震災に関してのインタビューをさせていただき震災当時の被災地の状況や地震と津波による被害などをお聞かせいただき今まで自分たちが想像していたよりも詳しく震災の状況を知ることができました。今回の震災学習はとてもいい勉強になりました。

鈴木 祐騎

今回の震災学習で、災害の恐ろしさを改めて知ることができ、改めて東日本大震災のことについて考えることができました。また自分たちがこのような状態になった時の対処法や対策などのことも考えられる事が出来ました。貴重な体験ありがとうございました。

石川 智也



VI 参考資料

第一交通有限会社タクシーを呼びたいタクシー会社

<http://www.taxisite.com/cal/profile/805.aspx>

修学旅行震災学習を終えて

震災学習担当 佐々木 龍馬

1000年に一度といわれる東日本大震災は広い範囲に甚大な被害をもたらしました。あれからまもなく5年がたちます。私の出身地である宮城県も広範囲で被災し、今もなお爪痕が多く残っています。

東日本大震災を学習するには今しかない。そんな思いで東北方面への修学旅行を発案し、今回の震災学習が実現しました。1年次のときに経験したインターンシップのノウハウを活かし、生徒一人ひとりが責任を持って活動できる「取材」という形式で、5エリア57の事業所や個人の方にご協力いただき、57通りの震災の姿を見ることができました。その結果、私自身も知らなかった当時の状況や、それぞれの場所での活動を知ることができました。生徒たちも、東日本大震災での人々の苦しみや辛さを知り、それでも迎え入れてくださった東北の方々の温かさを感じることができたようです。

大震災という大変なことが起きたんだな、という漠然とした知識から、また宮城に行きたい、宮城や東北の人のために何かをしたい、という思いを持つようになった生徒もいます。今回の震災学習は、これまで他人事だった大震災を身近に感じるきっかけになったのではないのでしょうか。今後、地震や津波だけでなく、台風や大雨など様々な災害がやってきます。そんなときに、この震災学習での経験が、誰かのために何かをしてあげたい、という思いをもって手を差し伸べられるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、取材にご協力いただきました57の事業所・個人の方々に厚く御礼申し上げますとともに、被災された場所が一日でも早く復興し、活気あふれる場所になりますことをお祈り申し上げます。